
婚約破棄から始まる悪役令嬢の監獄スローライフ

S p a - o x

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

婚約破棄から始まる悪役令嬢の監獄スローライフ

【Nコード】

N5577ES

【作者名】

S p a - o x

【あらすじ】

ファーガソン公爵家の長女レイチエルは、許嫁であるエリオット王子から身に覚えのない罪状で弾劾され、婚約を破棄される。あくまで罪を認めないレイチエルをエリオットは王宮の地下牢へ拘禁するよう命令し、レイチエルはパーティ会場から引きずるように連れ出された。

そしてレイチエルは思った。

「イエーツ、ゴロゴロし放題のスローライフ！ 王妃教育もサボれ

てうるさい使用人もいない、楽しい休暇の始まりだ！」

こんなこともあろうかと準備万端整えていたレイチェルは、
だら生活と王子への嫌がらせを心置きなく牢の中で満喫する！
というお話。

1・令嬢は牢に入れられる

盛会だった夜会は、突然王子が行った婚約破棄宣言で静まり返っていた。

豪華な大広間の真ん中で、輝く長髪のブロンドを肩に流した優美な青年が腕組みをして立っている。王の長男であるエリオット王子だ。彼の背中に隠れるように、赤毛をツインテールにまとめた可愛らしい令嬢が抱き着いていた。

その二人の視線の先では、一人の令嬢が王子の側近に引っ立てられようとしている。

チョコレートブラウンの髪をアップにまとめた大人びた少女は、こんな事態でも冷静さを保って肅々と引きずられていた。王子の（元）許嫁、ファーガソン公爵家の長女レイチエルだ。

震える男爵^{ツインテール}令嬢を後ろに庇うように立つエリオットは、側近たちによって拘束されているレイチエルを憎々し気に睨みつけていた。
「レイチエル。貴様に良心があるのなら、せめて最後にマーガレットに謝罪をせよ！」

レイチエルの両腕を掴んで力任せに挟み上げる騎士団長令息のサイクス・アビゲイルと、レイチエル自身の弟ジョージ・ファーガソンも口々に彼女をなじる。

「全てバレているんだぞ魔女め！ お前が令嬢たちを扇動したのはバレているのだ！」

「……正直に罪を認めてください姉上。ファーガソン公爵家の名をどれだけ汚すつもりですか」

男たちは口々に身動き取れない令嬢を非難する。

しかし彼らに何と言われようと動じずに、集中砲火を浴びるレイ

チエルは冷めた表情で王子を見返した。

「私はそんなことはしておりません。だから貴方の彼女に謝ることなど何一つありません」

暗い茶の髪に抜けるような白い肌。

コバルトより濃い蒼の瞳にピンクに塗られた薄い唇。

白皙の美貌は大人びていて、切れ長の眼は理性的なまなざしをしている。

着ているドレスも落ち着いた色合いで、華やかさよりも品の良さを見せつけていた。

レイチエルはエリオットと同年だが、落ち着いた物腰と地味な外見からいくつか年上に見える。そんな彼女はイメージそのままに静かな調子で否定の言葉を繰り返した。

怒りに任せて言葉が湧き出る王子たちよりも……ただその態度だけで、レイチエルの言葉には重みが出ていた。

王子はそれが腹立たしい。

実のところレイチエルの態度が普段と変わらないこともまた、エリオットをいらだたせる一因になっている。

なんでこいつは反抗的なのだ……！

控えめで自分を主張することもないレイチエル。男を立てる模範的な令嬢の態度そのもので、そういう点も評価されての王子の婚約者なのだろうけれど……自己主張はないけれど、落ち着きのないエリオットを咎めはする。

彼の心が離れた……というか、この許嫁を初めからどうしても好きになれない理由の一つが彼女のこの態度だ。エリオットに対して、大人が子供をたしなめるような態度を崩さない。それは逆に言えば、

エリオットがいまいち大人になれていないという事の証左になるのだから……。

普段から邪魔くさく思っているうえに最愛の令嬢に危害を加えられた(らしい)という思いもあり、どうしても謝罪しない婚約者を王子は罰したい気持ちが強かった。

「もういいレイチエル。貴様に反省の機会を与えようというのが無駄だった」

王子は顎をしゃくった。サイクスたちがレイチエルを地下牢へと引きずり始める。

「レイチエル、人生は長いのだ。監獄暮らしをたっぷり楽しむがいい」

エリオットの嘲りに、レイチエルは初めて口元を歪めた。ただしそれは、エリオットが望んだ辱めに耐えるものではなく……皮肉気な笑み。

「ええ、殿下。せっかくなのですから、ゆっくり楽しませていただきますわ」

珍しく感情を見せたかと思えば、おとなしいだけと言われる公爵令嬢には似つかわしくない表情……その意味を王子が考え付く前に、レイチエルはサイクスに引っ張られて大広間を出て行った。

得意げにおかしな理屈を叫び続ける婚約者を、レイチエルは冷めた気持ちで眺めた。

コイツは本当にどうしようもないわ。

子供のうちは男の方が精神的な成長が遅いとは言うけれど……このバカはもう数年で成人の筈なだけ。

レイチエルがあんなどうでもいい女にわざわざ嫌がらせをするなんて思っているのも馬鹿らしいし、そんな暇人だと思われるのも腹立たしい。

王家の婚約者教育がどれだけ大変だと思っているのかしら。

罪状とやらも笑ってしまうほどどうでもいいし、それを真面目に糾弾して来るのも失笑してしまう。一体コイツらは脳みそが付いているのだろうか。

正直別にエリオット王子と結婚したいわけでもないし、将来王妃になりたいわけでもない。公爵家の娘として、貴族の義務を果たそうとしているだけ。それがなんでこのバカをノータリンの下級生と取り合わなくちゃならないの……？

そもそも義務感だけで許嫁をやってきたレイチエルは、馬鹿らしい茶番劇に今の時点でかなり白けている。それこそどうでもよくなくて全部投げ出したいくらいに。

そんなレイチエルに対して。

「レイチエル、人生は長いのだ。監獄暮らしをたっぷり楽しむがいい」

偉そうに言い放つ能無し王子の激寒な決めゼリフに、レイチエルはとうとうポーカーフェイスを維持できなくなって笑ってしまった。「ええ、殿下。せっかくなのですから、ゆっくり楽しませていただきますわ」

もういいにしよう。コイツの将来など知った事か。

王子はいきなりのもりだったようだけど、実のところ今日の情報はいちこちから漏れ伝わって来ていた。まさか丸々事前情報どおりになるとは思わなかったけど……。

本当に婚約破棄をやらしてくれたので、レイチエルの“準備”も無駄にならなかったようだ。予想通り過ぎてちよっと笑ってしま

う。

レイチエルはついニマニマしてしまいそうになり、努めて無表情を維持しながらサイクスに引っ張られて歩いた。

せっかくの王子の御命令だ、王妃教育も忘れてゆっくりさせてもらおう。

近年使われていなかった王宮の地下牢に閉じ込められる……そんなこれからの生活に、ちょっとワクワクしてしまうレイチエルだった。

辛くて厳しい王妃教育もなく。

分刻みのスケジュールもなく。

ごろ寝しているとうるさいメイド長もいなければ、だらけて本を読んでいると教鞭で叩く家庭教師もいない。

持て余すほど時間があって、お茶の時間も飲みたい時に飲めばいい。昼から熟睡していたって誰にも怒られない。

好きなだけ遊んでいられる楽しい牢^{スローライフ}暮らしがレイチエルを待っている。

スキップしそうな足を意識して抑え、レイチエルは気持ちと裏腹にトボトボと足を進めるのだった。

2・令嬢は牢に立て籠もる

ひたひたと石段を降りる音に、巡回で地下牢に寄っていた牢番は顔を上げた。揺れる灯りとともに、ガタイのいい青年が縄をかけた少女を引いて降りてくる。

変な取り合わせに首を傾げていると、青年が偉そうに叫んできた。

「貴様が牢番か？」

「はっ、そうですけど……」

何ごとかと首を傾げる牢番の見ている中で、地階へ到着したサイクスはレイチエルにかけた縄をはずして背中を押した。

「エリオット王子の命令だ、コイツを牢へ入れる。いつ出すかは未定だ……ま、コイツの反省次第だな」

「はあ……」

牢番の気の抜けた返事にサイクスが眉をしかめた。

「なんだ？」

「はあ……じつは、その、牢が……」

牢番の視線の先をサイクスが追うと……牢の中が物置と化していた。

「なんだ、これ？」

思いがけない光景に、ついサイクスは素っ頓狂な叫びをあげた。

色々なサイズの木箱が大量に牢の中へ積み上げられている。奥の方は天井まで届きそうだ。

「実は……よりによって今日の昼間に役人どもがやってきて、不要物を一旦保管するんだって荷物を入れちまったばかりでして」

呆然としたサイクスの問いに、牢番が頭をかいた。

「城の地下牢なんてめったに使うもんじゃ、無いじゃないですか。だもんでまさかお客さんがすぐ入るとは思わず……」

何が入っているのか判らないが、牢屋の半分ちよつとぐらいまで木箱が占拠している。

「なんでまたこんな時に勝手に物置に使ってるんだ……」

「いやあ、あつしもこんなの初めてでして……でも、断るほどには確かに普段使ってないもんで……」

要保管の書類でも置き場に困って官吏が持ち込んだのか……タイミングの悪さにサイクスは舌打ちしたが、見れば入口からトイレに続くあたりはそれなりにスペースが空いている。

よし、レイチエルが横になるにはそこで十分だ。

「仕方ない、このままコイツも突っ込め。おい、狭いとか文句は言うなよ？ 犯罪者と相部屋でないだけありがたく思え」

「わかりました」

レイチエルがおとなしく頷くので、サイクスは牢番に向けて顎をしゃくる。牢番が鉄格子の隅に設けられた扉の鍵を開けた。

やって来た男女の事情が分かって、やっと調子が戻った牢番が下卑た笑みを浮かべた。

「へっへっへ、貴族の嬢ちゃんにはいささか不気味な場所かもしれねえが……ま、住めば都っていうじゃねえか。一週間もいりやあ慣れて来るだろう、珍しい宿だと思ってせいぜい楽しみな。……まあ、嬢ちゃんが何年いる事になるかはわからねえがなあ？」

牢番がマニュアルで決まっている脅し文句を口にする間に、レイチエルは黙って扉をくぐった。

牢番がすぐに扉を閉め、鍵をかける。ガタガタ揺すって扉が完全に施錠されているのを見せつけるのも入牢儀式だ。

中に入っておとなしく座る少女に、牢番がニヤリと嫌味な笑顔で笑いかける。

「お偉いさんに泣きつくんなら、早いうちにした方が身の為だぜ？ なにしるこの地下牢は最近全然使ってなかったからな。場所も悪いんで、入れたお方もオレ様も忘れちまうって事もあるからなあ」
牢番の軽口にサイクスも笑う。

「ははは、確かにその通りだ。殿下はおまえの事なんぞすぐに忘れてマーガレット嬢と楽しくやりたいんだ。牢に入れた事を忘れられる前に、さっさと頭を下げた方が身のためだぞ」

愚かでどんくさい公爵令嬢を嘲笑いながらサイクスと牢番が出て行く。あとには打ちひしがれた令嬢が一人残される……筈だった。

サイクスと牢番が階段を上がろうとした、その時。

ジャラジャラ、ガシャン！

「ガシャン？」

おかしい物音に二人が振り返ると。

レイチエルが鉄格子と扉の枠に太い鉄の鎖を巻き付け、そこにかい南京錠を取り付けた所だった。

レイチエルの反撃が^{いやがらせ}始まった瞬間だった。

「は？」

「な、何をつ！？」

意表を突く令嬢の行動に、慌ててサイクスと牢番は鉄格子に駆け寄った。

が、すでにレイチエルは戸締りを終えた後だった。

「おい、なんだこれは！？」

駆け寄ったサイクスが鍛えた腕力で扉を揺するが、ギチギチに鎖

で締め付けられた扉のフチは指一本分も動かない。

向かい合うレイチエルは涼しい顔。

「なんだも何も。身の安全の為に、私しか開けられないように鍵をかけました」

「牢屋だぞ、ここ！？ 囚人の方が鍵をかけるなんておかしいだろ！」

叫ぶサイクスに、平然と返すレイチエル。

「私も未婚の女です。万一の事があつては堪りません。物の本によると牢番の楽しみは上司の目が無い時に囚人を嬲ることだそうですから」

「にしたって、こんなことは前代未聞だ！？ この鎖と鍵はどこから出した！？」

「そんなのは私の勝手です」

何を言ってもまるで相手にしてくれないレイチエルに、サイクスも牢番も言葉を失う。牢屋に閉じ込めたはずが、むしろ立て籠もられた形になってしまった。

「ど、どうしましょう……」

牢番に聞かれて、サイクスも言葉に詰まった。

「どうしようと言われても……と、とにかく殿下に報告だ……」

騎士団長令息は転げるように地下牢を出ると、パーティ会場へひた走った。

3・令嬢は牢をリフォームする

いまだに夜会会場でマーガレット嬢といちゃついていたエリオットを引っぺがし、サイクスが牢まで連れて来た頃には……状況はさらに進化（悪化）していた。

「なっ……！」

地下牢の様子を見て、エリオットも言葉を失った。覚悟していたはずのサイクスも言葉が出ない。牢の中は、ほんの三十分前と全く違う空間になっていた。

地下牢は四角い一つの部屋を鉄格子で二つに区切っただけの施設だ。

鉄格子を挟んで手前の前室は牢番が待機・監視につく為の部屋で、端に壁と同じ石でできた階段がある。家具は粗末な机と椅子が一セツト置かれているだけだ。

囚人の食事は上階の宮廷内の使用人の厨房から運ばれてくるので、この部屋には別に調理設備のような物はない。取り調べも同じく近衛兵の詰所で受けることになっているので、ここには家具がいらないうというわけ。

奥の部屋が囚人の入るところで、いわゆる“地下牢”はこちらを指す。内装は前室と変わらず石の壁と床、天井があるだけで、隅の方に便器とシャワー、洗面台があった。二つの部屋は素通しの鉄格子で区切られているだけで、実質続いた一部屋になる。

地下牢と言うだけあってほぼ地階にあり、窓は壁の高い所に数か所換気と明かり取りを兼ねた細長い物が設けられているだけだ。建物の外からは床下の通風孔に見えるように工夫されていて、当然鉄

格子がはまっている。部屋の明かりはこれだけなので、ランプか蠟燭が無ければ昼間でさえ薄暗い。

この殺風景な空間での生活が大変かどうかは、入った人間の地位と入れた側の度量の広さに依る。

囚人が配慮の必要な大物だったり、あるいは収監させた者が囚人に優しさを持つていれば。牢内に敷物や寝具、机や椅子が与えられ、トイレや風呂の前には衝立が許される。

囚人を虐げる目的、あるいは残虐な指示者が見せしめとしたならば、それらは一切与えられない。寒さに震えて石畳にうずくまり、床に置かれた盆から食事を食べ、排泄や入浴の一部始終を看守に見られるという辱めを受ける。

この話を聞くだけで大抵の者は震えあがる。収監が決まっている者ならなおさら……。

とはいえ、それらの話は実のところほとんど都市伝説だ。

そもそもこの牢獄が使われることは最近ではまずありえない。

昔に比べるとはるかに受刑者に人間的な対応がされるようになったので、今は配慮されるべき収監者は地下牢なんか使わず、逃げ場のない客室に監視付きで押し込まれるようになっていく。

逆に配慮がいらぬ木っ端犯罪者は、わざわざ王宮の地下牢なんかに入れない。郊外の立派な大型監獄へ庶民と一緒にぶち込めばいいだけだ。

この地下牢は内乱や陰謀が日常茶飯事だった大昔に、失脚した有力者を虐待するために作られたようなものだ。だから平和になって長い今では、この部屋は貴族が廷臣しか入れないけど普通の囚人以下に扱う相手専用という矛盾した存在になってしまっている。

そう考えると久しぶりにそこへ押し込まれたレイチエル・ファア

ガソンは、まさにその矛盾した条件に合う人間と言える。公爵令嬢にして、王子の憎しみを一身に受けてひどい目に合うのを期待されている者。今時そんな人間はなかなかいない。得難い人材と言えよう。

もつともエリオット王子は、そこまで深く考えていたかということ……？

何のことは無い。ただ単にかわいいマーガレットを虐めたレイチエルを、酷い環境に置いて虐めただけだった。居住環境がどうなっているかなんて初めから頭の片隅にも無かったし。

王子がなんとなく考えていたのは、貴族にとって屈辱的な投獄でレイチエルが絶望してマーガレットに土下座すれば許してやらんでもない、というポワツとしたイメージ。具体的な話は何にも考えていなかった。

しかもレイチエルを社交場から追放してマーガレットとイチヤイチャしている間に、王子はそんな“どうでもいい事”はサイクスに引きずられるまですっかり忘れていた。

だから側近が何を慌てて悪女を自分に見せようとするのか、牢につくまで理解できなかった。

……そして牢に着いたら、エリオット王子は目の前の光景が理解できなかった。

地下牢の中、床が見えているスペースで婚約破棄された公爵令嬢がくつろいでいる。

石畳が見えている筈の所には幾何学模様のラグマットが敷かれ、奥のむき出しだったはずのシャワーやトイレのブースには品のいい

花柄のカーテンが掛けられている。

今日入ったばかりの住人はすでにイブニングドレスから簡素な室内着に着替えを済ませていた。ラグマットの上に賢者も駄目にするクッションソファを置き、そのうえでゴロゴロしながら本を読んでいる。つまり本も読めるほど明るい照明が彼女の傍に置かれている。

着の身着のままです突っ込まれたはずなのに、なぜ彼女は着替えているのか？

家具はどこから持ち込んだのか？

ありえない。

この光景はありえない。

鉄格子のこちら側は確かに地下牢で。

それなのに向こう側も地下牢の筈なのに、狭いながらも快適そうな居住空間が広がっている。

不可思議な光景に言葉もなく一同が見つめていると、何かに気が付いた令嬢が身を起こす。

「？」

レイチエルは鉄格子の外を完全に無視して座り込むと、アルコールランプからやかんを取り上げ、沸かしていた湯をティーポットに注いで蓋をする。殺風景な牢の中に、あきらかに場違いな香り高い紅茶の臭いが広がった。

「むっふー……」

香りを嗅いで満足げに微笑むレイチエル。

まさかのティーセットまで用意されている牢内に、すでに呆けていたエリオットはさらに顎を落とした。サイクスと牢番も顔を見合わせたけど、喉から言葉が出てこない。

たっぷり五つ数える時間をおいてから、王子はハッと我に返って鉄格子にしがみついた。

「貴様！　どこからこんなものを持ち込んだんだ！」

対するレイチェルの返答はにべもない。

「私が自分で用意したんですから、別に国庫に負担をかけてはいません」

「そういう問題じゃない！」

「私物なんですからとやかく言われる筋合いはありません」

「だからそういう話じゃなくて！？　この中にあるものはどこから出したんだと言っているんだ！」

かみ合わない会話に歯ぎしりするエリオットの前で。

何かが足りないという顔のレイチェルは辺りを見回し、木箱の一つを開けて茶菓子を取り出した。最初から持ち込まれていた、不要物を詰めている筈の木箱。

「……そこかあ！？」

サイクスが叫ぶ。

「なんだ！？」

事情が分からない王子に牢番が説明する。からくりが判り、クツキーをかじりながら幸せそうに紅茶をすする元許嫁にエリオットはめまいを覚えた。

「こ、この事態を予想して、すでに公爵家が籠城物資を持ち込んでいたというのか！？」

王子の愕然とした呟きに、平然とレイチェルが答えた。

「正確には私の手の者が、ですわね。まあ、こんなこともあるうかと準備してましたの」

二の句が継げない王子たちを尻目に、レイチェルは読んでいた本のしおりを挟んだ箇所を開いて再度読書に没頭し始めた。

レイチェル・ファーガソンは誰もが認める美人でありながら妙に存在感が薄くて、時として王子と一緒にレセプションに出ているの

を忘れるほどだった。

線の細い美貌は表情に乏しく、基本無口であり意思表示をしない。意見を聞かれても王子に合わせる。

いかにも王子の陰のような彼女は連れ歩く側からは都合のいい女で、王子様の横を狙う令嬢^{ライバル}たちからは華が無く相応しくないと口撃の対象になっていた。

輝く美形の王子の横の、邪魔にならない添え物だった美形だが目立たぬ許嫁。

自分が無く王子を立てる奥ゆかしい、だからこそ面白みのない令嬢。

そういう女だから、エリオットは大した抵抗もあるまいとあんな場で婚約破棄を突き付けたのだけれど……。

だから、思う。

……今日の前で、とんでもない場所で好き勝手やっている女は誰なんだ？

4・公爵は事態を把握する

若い者たちが集まっている今日の夜会で、レイチエルが王子に婚約を破棄されたと急報が入った。

ありえない事態に公爵邸は混乱に陥り、公爵は急遽参内する準備を整えながらも……状況を把握するために家臣を情報収集に走らせていた。

気持ちばかり焦る中、戻り始めた部下たちが次々と良くない情報の断片を届けてきた。

「今日のパーティーでレイチエルが王子から婚約を破棄されたのは確実なんだな？」

「はっ。複数の情報筋から確認が取れました。夜会の真つ最中に、ホールのだ真ん中で拘束されて絶縁を叩きつけられたと」

部下の報告に公爵は頭を抱えた。

「馬鹿王子め……！ センセーシヨナルな一手を狙ったのだろうが、場が悪すぎる。どっちが悪いとかいう以前に常識の問題になってくるぞ……」

ダンは今も、王子が失脚すると判断していた。

冷静に判断すれば貴族のマナーや慣例をダース単位で無視した破談劇は、王が収拾に乗り出せばどうあっても問題になる。

もちろん娘との婚約を断りもなしに破棄された事に怒りもあるが……だが正直、今の公爵にとっての問題はそれ等の事よりも……。

公爵は執務机をダンダンと叩いた。

「あの中身が空っぽの見てくれ男が……選りによって“鬼子”を起こしやがった……！」

公爵の長女レイチエルは小さなころから綺麗な子で、控えめなしぐさと儂げな容姿で外部の人からは内気でおとなしい美少女だと思われるてきた。何も知らなかった頃の公爵夫妻は鼻高々に自慢したものだ。心身ともに素晴らしい子だと思っていたから。

とんでもない。

段々成長して娘の自我が見えて来るにつれ、公爵夫妻の笑顔は引きつり始めた。

何しろ彼女の行動は、下手なガキ大将より質が悪い。

あの姿でスカートのまま大木に登り、いじめっ子に囲まれたら蜂の巣を投げつける。仕返し of 援軍で来た年上の子を隠し持っていた麵棒で殴り倒し、主犯の少年を池に突き落として報復した。

騒ぎを聞いた公爵が駆けつけた時には、池に落とした少年が上がつてこれないように岸に寄ろうとすると石を投げつけている所だった。

止めた父親に、当時の娘は真顔で言い放ったのだ。

『大丈夫です。上から石をドンドン投げ落とせば、しばらく浮いてきませんわ』

多分きつとかなりの確率で、愛娘はサイコパスなんじゃないかと公爵が思った瞬間だった。

とりあえず水底の男の子に石を積むことの難しさを指摘し、沈下中の水の抵抗力と不定形な石の軌道の不確定さを説明しておいた。この場でそんなことを教育するあたり、ダンもこの時静かにパニックを起こしていたのかもしれない。

娘は目を輝かせて『さすがお父様！』と褒めてくれたが、正直こ

れほど娘の賞賛が右から左へ抜けて行っただのは初めての経験だった。

そんなレイチエルの歪みっぷりに気が付いた親の涙ぐましい努力の甲斐あって、娘は成長するうちに見た目に比例した社会性を身につけて行った。

マナーやモラルをゲームのルールに例えて、誰もが公平に人生をプレイするために秩序があるのだと理解してからほぼ理想的に育ったと思う。

だけど公爵夫妻は忘れなかった。

ルールに従わなくてはいけないという思考が無くなれば、タガが外れた娘が何をするかわからない。

だから貴族子弟として必要な倫理教育を重視してレイチエルを育てていたのだけれど……そこへまさかの婚約破棄。

公爵は現場にいた誰よりも、何が起こったかを理解していた。

エリオット王子が根底条件をひっくり返しやがった。
チエスボード

現場に駆け付けようと焦燥感に駆られながら慌ただしく指示を飛ばす公爵の所へ、息せき切った従僕が報告に来た。

「詳細が届きました！」

「動きがあったのか!？」

焦りがMAXになった公爵へ、青い顔をした従者が言上した。

「状況が少し詳しく……お嬢様は殿下に宣告されても顔色一つ変えず、おとなしく拘束されて地下牢へ引きたてられていったそうです」
「……………」

公爵は一瞬動きを止め……崩れるように椅子へ腰を落とした。慌てて執事が駆け寄る。

しばし呆然としていた公爵は、ぽつりと一言漏らした。

「これは……殿下は詰んだな」

「はい」

レイチエルの成長をよく知る執事も重々しく頷いた。

もう、レイチエルが腹をくくったということは公爵では事態の収拾のしようもない。あの娘に好きにやらせてガス抜きをしてからでなくては……。

焦る意味もなくなり執務机の前に座り込んだ公爵は、のろのろとパイプに刻み煙草を詰め始めた。

とりあえず一服しよう。そうしよう。それぐらいしかやれることが無い。

一口吸い込んだ公爵は万感を込めて煙を吐き出し……ひとつ大事なことを思い出した。

「にしても……会場にはジョージもいたはずだが。あいつはこんな時に何をやっていたのだ？」

レイチエルが許嫁である以外に、弟のジョージが王子の取り巻きとして近侍していたはずだ。ここまでの重大事態になる前に、あれが仲裁するなり公爵に報告するなりしていれば騒ぎは小さく済んだはずだ。

疲れたようにつぶやく公爵に、報告を持ってきた従僕が恐る恐る追加報告を上げた。

「それが……お坊ちゃまも殿下たちと一緒に渦中の男爵令嬢に熱を上げているそうで、お嬢様を断罪するのに積極的に協力していたようです」

公爵と執事は顔を見合わせた。

「ジョージ……死んだな」

「はい」

「あのバカは姉と十六年も付き合ってきて、なんでこんな簡単なことも判らんのだ」

レイチエルが思うままに暴れていたのを見ていたはずなのに、いったい何をやっているのか。

公爵はレイチエルの怒りが弟に爆発した場合、嫡男をかばう気は無い。

そんな事をしたら、こっちに飛び火しかねない。

全てをぶち壊したバカ息子より、自分の命がかわいい。

公爵がなんとなく天井を見上げて煙草をくゆらせていると、廊下が騒がしくなつて妻が飛び込んできた。

「ああ、ダン！」

「イセリア！」

慌てて立ち上がった公爵の胸に、よろめく妻が飛び込んできた。

「レイチエルが……レイチエルが……！」

「知っている。今報告を聞いていたんだ……気をしっかり持ちなさい！」

すっかり動転している妻は目に涙を浮かべて叫んだ。

「だつて貴方……！ レイチエルが黙つて連行されるなんて……レイチエルは完全に殺る気よ！？ このままでは我が家の未来と殿下の命は吹き飛ぶ寸前だわ！」

「大丈夫だ！ レイチエルだつてもう十七歳、子供じゃないんだ。もう大人の判断力が身につく年頃だよ」

泣き叫ぶ妻に、公爵は自分も信じていない慰めをかける。しかし妻はとてもそれで気が休まった様子はない。

「ダン、貴方は判らないのよ……幼いあの子が『リジー・ボーデン

の詩』を歌いながら楽しそうに手斧を振っていたのを見つけた私の気持ち！」

「落ち着きなさい、イセリア！ 大丈夫、大丈夫だから！ レイチエルはこの十年で格段に淑女として成長した。今のレイチエルなら殿下を直接鈍器で殴らずに、もっと法に触れない手段で精神的に抉り取る方法でやり返すはずだ！」

「ホントに……？ ホントにレイチエルは大丈夫なの？ あの子は王子を殺る為なら王都を火の海にしかねないわ」

「娘を信じなさい、イセリア。あの子は頭が良くて教養もある。共倒れになるような馬鹿な真似をするわけがないじゃないか。きつと足が付かない手段で一方的に殿下をボコボコにするよ」

とはいえ、娘が何を考えているのか、本当に娘が凶器を頼らないのか、公爵には予想もつかなかった。

事態をどう収めたらいいのか……今の段階では公爵はため息をつく以外にできることが無い。

二人の周りには多数の使用人がいたが……全員この家に染まり過ぎていて、ツツコミを入れられる人間は皆無だった。

「失礼いたします」

公爵が妻の背中をさすっていると、浮足立っている邸内では違和感を覚えるほど落ち着き払った声が入室の許可を求めてきた。

見やれば、レイチエル付きの侍女で彼女の幼馴染のソフィアがメイドを従えて頭を下げている。

「おお、ソフィア。ちょうどよかった。レイチエルの件は聞いているな？」

「はい。もちろんです」

「私は政庁へただちに抗議に行ってくるが、その時にお前を同行するから用意をしてくれ。牢に入れられたレイチエルへ、身の回りの物を差し入れに行くんだ。拒まれたら私の名で押し通れ」

とにかくパーティ会場から直接牢へ入れられたレイチエルへ、着替えや当座の生活に必要な物を持って行かせねばならない。一番レイチエルに近いソフィアに準備させれば早いだろう、と思っていたのだけれど……。

「いえ、それは大丈夫です」

「もう準備できているのか、さすがだな」

「はい。もう準備して運び込んであります」

「そうか、手回しが良いな……ん？ 運び込んである？」

聞き捨てならない言葉をさらつと吐いた侍女に目を向けると、灰色の髪の少女も後ろの二人のメイドも平然と頷いた。

「お嬢様は事前にこの情報を入手しておりまして、生活に必要な物資と食料を三ヶ月分準備して王宮の牢へ運び込んでおきました」

プライベートではレイチエルよりもよほど鉄面皮なこの侍女は、眉一つ動かさず一般常識のように驚愕の事実を突き付けてきた。

「……はっ？」

いろいろな疑問が同時に脳内を駆け巡り、公爵は額を抑えながら娘の部下に訊ねる。

「ちょ、ちよつと待て……事前に情報を入手だと？ なんでレイチエルは敢えて何も手を打たなかったんだ？ それと、一人分とはいえ三ヶ月の生活ができる物資をどうやって王宮へ運び込んだ？」

レイチエルに忠実な侍女は、なにを当たり前のことを、と言いたげに回答した。

「本当に実施されるかは半信半疑だったようですが、王子の婚約破棄計画を入手した際にお嬢様は言っておられました。『あのバカとの婚約が向こうの責任で破談になった上に、しばらく何もしないでバカンスできるのね？ 素敵じゃない！』と」

「……レイチエル……」

「また王子との婚約が本決まりになって以降、お嬢様が組織していた我ら『闇夜の黒猫』は王宮内の要所へ侵食しつつありました。我らの勢力を使えば王宮内へ公務に見せかけ資材を運び込むことなど容易いことです」

「レイチエル、おまえ一体どこを目指しているんだ……！？」

公爵は娘が思っていたより平常心な事を知って安堵した。

そしてそれ以上に、娘の闇が思っていたより深いことを知って恐怖に震えていた。

なんで家の中に自分の知らない諜報組織があるのか？ しかも王宮にフリーパスで荷車を何台も入れられるほど食い込んでいて、それもうドコのスパイ網よりヤバいんじゃないのか？ そもそもそこまで行ったら王族の暗殺ぐらい余裕じゃね？ とか、いろんな思考が公爵の頭の中を駆け巡り……。

「とりあえず私は、政庁に抗議に行ってくる」

「行つてらっしゃいませ」

考えることを放棄した。

4・公爵は事態を把握する（後書き）

「リジー・ボードンの詩」はマザー・グースの一節です。

5・令嬢は王子を追い払う

拘束されている筈なのにやりたい放題のレイチエル。

それを呆然と眺めていたエリオット王子が我に返った。慌てて鉄格子の中に怒鳴り付ける。

「おいっ！　ここは監獄だぞ！？　何をくつろいでいるんだ！」

「住めば都というのはそちらの方がおっしゃった事ですけれど」

「にしたってこれは無いだろう！？　おいっ、何とかしろ！」

いきなり話を振られて戸惑う牢番。当然だ。

「何とかしろと言われても……」

「楽しく別荘暮らしをさせる為に牢屋に突っ込んだんじゃないんだぞ！？　コイツが持ち込んだものを没収しろ！」

と言われたって、それができない状況だから王子を呼んだわけで。

「そついわれましても……実は」

「な……中から立て籠もっているだと……」

鍵の事を説明されて、エリオットはまた顎が外れた。きらきら美麗な王子様が、うつろな目で見返してくるのはなかなか不気味というか間抜けというか……と牢番は思った。

「どうしましょう？」

牢番が途方に暮れて訊いてくるけど、むしろエリオットの方が尋ねたい。サイクスをちらりと眺めると、こちらはまだ呆けたまま突っ立っている。当てにならない事甚だしい。

囚人の弟が知能派だから、あいつも一緒に連れてくればよかった……とは思ったけど、今から呼んでくるんじゃない自分が無能だと知らせるようなものだ。

何とか回答を出そうとイライラと頭をかきむしり、ひねり出した結論は力押しだった。

「カギを壊せ！ 鎖を切れば開けられる！」

エリオットは木偶の坊のサイクスの尻を蹴り上げる。

「おい、騎士どもを何人か呼んで来い！ 工具も持ってこさせろ！」

「は？ ……っ、はっ！」

サイクスがドタドタ階段を駆け上がる音を後ろに、エリオットはクッションに横倒しになっているレイチエルに嘲笑を浴びせた。

「貴様がごさかしいことをする分、心証は悪くなったと思え！ すぐにお前に相応しい待遇に戻してやるからな。もう毛布一枚残してやらん、みじめな自分を想像してガタガタ震えて待っている！」

邪悪な笑みで得意げに女を身ぐるみ剥がすと宣言する、王子の姿はまるつきり小物の悪役にしか見えない。

それに気づかず哄笑する王子を元許嫁は肩越しにチラリとみると、口角を歪めてフツと鼻で笑った。

「……思っ通りに行くといいですわねえ」

サイクスが騎士を四、五人連れて戻ってきた。王子はさっそく問題の鍵を見せる。

「これだ」

「うわぁ……これを切るんですか!？」

一人が悲鳴を上げた。他の者も同様な顔つきでうんざりした顔をしている。当然だろう。

彼の指が摘まんでいる鎖は、女の小指ぐらいの太さの鉄で作られている。鎖の直径が、じゃない。素材の鉄材の直径が、だ。つまり鎖としては親指と人差し指で作った輪ぐらいの鉄輪がチェーンになっている感じ……城門のチェーンロックと言われても信じられる頑丈な代物が、たかだか地下牢の出入り口に使われている。

そこにつけてある南京錠もそれに合わせて巨大で、おそらくレイ

チエルの細腕では両手でないと持ち上がらないだろう。ご丁寧に鍵穴は鉄格子の外からでは見えない方に向けられている。

「鎖を切ると言われて梃子ばさみも持ってきたんですが……」

騎士が出したのは一般的に鉄芯などを切るのに使う特殊なハサミだ。てこの原理で押す力を増幅して、挟む力を数倍にする巨大な物。

しかし。

「この太さの鉛なら、なんとか切れるんですけど……」

「これはダメなのか!？」

「これ、素材は鉄ですよ……しかも鑄鉄じゃない、鍛造だぜ……」
念のために騎士たちが二人がかりで切ろうとする。

けど、いくら力を入れても食い込んだ痕さえ付く様子が無い。

「無理です」

「何とかならんのか!？ 他に、他に方法はないのか!」

「一応、鉄鋸も持ってきましたが……」

金属を切り裂くノコギリも用意してあったので使ってみる。そして騎士たちが替わりばんこで頑張った結果……。

「殿下、うつすら傷跡が付いたのですが……」

「うむ……三十分近くやってこの程度か……」

これは切るのに夜明けまでかかりそうだ。気が遠くなりそうなエリオットに、最後にノコギリを引いた騎士が刃を見せた。

「そして、この通りです。鉄鋸の刃が丸坊主になりました」

「……替えのノコギリは?」

「城内探してもあるかどうか……」

地下牢に沈黙の帳が下りた。

黙り込んだ一同の後ろで、思わず噴き出したのを押し殺した声がある。エリオットが振り返れば、本を読んでいる令嬢の肩が揺れている。

瞬時に頭に血が上ったイケメン王子は、彼女との間を隔てる鉄格子を蹴りつけた。

「おいっ！ 誰のせいでこんな騒ぎになっていると思ってるんだ！」
「殿下のせいでしょう？ 私を牢屋に入れたりなんかしなければ、こんな騒ぎ？ にならなかったのに」
「うっ！？」

突き詰めて言えば、そういう事になる。

視線が集まったのを意識して、エリオットはカッと頬が熱くなった。

こいつ、どうしてくれよう！

原因がエリオットにあるのは確かで、婚約破棄をしたのも断罪したのも牢に入れたのもエリオットだが……それにしても“お飾りの人形”にここまで虚仮にされて、はらわたが煮えくり返る思いのエリオットはこのまま黙って引き下がれない。

「おいっ、槍を持ってきてコイツを突き刺せ！」

「で、殿下！？」

サイクスや牢番、騎士たちが驚く中、エリオットはわめきたてる。
「殺せと言っているわけじゃない。適当にケガさせればコイツも立て籠もつてはいられない。自分で鍵を開けて出て来る！」

「それは、そうですが……！？」

サイクスや騎士たちが顔を見合わせた。

そもそも王子がいきなり婚約破棄を宣言したのも、その命令で投獄したのも正規の手続きとはいいがたい。王宮は地下牢まで含めて王のものであり、権限のない王子が私物化していると言えないでもない。少なくともこれ以上は、視察の旅に出ている国王が戻らないと何も判断できない。

この上、正式に婚約破棄が認められたわけでない王子の許嫁を傷つけるというのはどうか？ 何か犯罪をやったわけでもない（王子の彼女を虐めてはいるけど、そんなので投獄・処刑はどう考え

てもあり得ない」のだから、下手したら王子の命令に従ったほうが処罰される可能性がある。

そうになった時にとても王子が助けしてくれるとは思えない。サイクスや騎士たちが無言で押し付け合っていると、しびれを切らした王子が怒声を上げ……途中で停まった。

「おい、いつまで待たせる気だ、コイツをちよつと刺せばいいだ、け……」

「？」

王子の言葉が途中で停まったのを訝しんだ一同が王子の方を見て……その視線の先を見て、同じように固まった。

檻の中の令嬢はいつの間にか立ち上がっていた。

そして明らかに慣れたフォームで、クロスボウ弩弓を構えてこちらに向けていた。

「ぶ、武器も持ち込んでいたのか……！？ 牢に武器を持ち込むなんて、非常識だぞ！」

「今さら何を言っているんですか。それにこれは武器ではありませんせん」

「え？ 違うの？」

「護身具です」

「同じだ、バカ！」

レイチエルはとりあえずエリオットに照準を向けているけど、誰にでも対応できるように余裕を持った構え方をしている。そして外の騎士達は対抗できる武器が無い。

思わず一步下がった男達を見て、レイチエルは皮肉気に笑った。

「知恵と忍耐の足りないエリオット様ですから、こういう事態も想定しておりましたわ。ちなみに町場で女の子を追いかけて遊んでいた殿下と違いまして、私は父や叔父上の狩りに同行するのが好きで

した。野鳥も結構落としているんですのよ？」

そしてにつこりと……背筋が寒くなるような綺麗な微笑みを見せた。

「三年ほど前に宿泊していた村が野盗に襲われまして……もちろん公爵家の兵が瞬時に制圧しましたが、私もお手伝いして三匹ほど討ち取りました。つまり……敵対者ならば人間に撃ち込むのにためらいはありませんので、心してかかってきてくださいね？」

やべえ。

サイクスたちはそれ以外言いようがない。

今時、騎士でも実戦の経験はそうは無いだろう。だから騎士だって兵士だって、敵と戦う事はできても止めを刺すにはそれなりに心の準備がいる。流れるように人を殺せるベテランなんか数えるほどだ。

今の世の中、そういうものなだけど………という訳だが今ここに、バトルグループ実戦の洗礼を終えた高位貴族の令嬢が一人いる。

彼女が『殺しますよ？』というならホントにやるんだろうなあ、ぐらいにはエリオットやサイクスも空気が読めるようになった。

レイチェルが可愛らしく小首を傾げた。

「こちら側に何もしないのでしたら、そこでバカ面揃えて見学するくらいは許してあげますが。私に危害を加えようとしたり牢を破ろうとするようでしたら、私、自衛権を行使しますからね？」

レイチェルが笑顔のまま顎でクイツと階段を指した。

「もう用が無いなら、お引き取り下さいね？」

レイチェルに言われ、足がすくんで動けないエリオットを騎士たちが慌てて引きずっていく。主人を守って撤退に見えるが、単に上役が残っていたら逃げられないから連れて行くだけだ。ちなみに牢番は真っ先に逃げた。

サイクスに背中を押され階段を上がりながら、動揺から立ち直ったエリオットが叫んだ。

「そんなに牢に入っていたのなら好きなだけ居るがいい！ そのかわり、こちらからは何も入れてやらんからな！？ 出たいと言っても開けてやらん！ 泣いたって出してやらないからな！？」

元許婚者の捨てゼリフに、レイチエルは一度閉じた本をまた開きながらあくびで応えた。

「そういうゼリフは、せめて面と向かって言っただけほしいですねえ」返事は期待していない。レイチエルの言葉が終わった頃には、チキンハートの王子様はすでに逃げ去った後だろう。

レイチエルは明日から始まる楽しい自堕落生活に思いをはせながら、本を抱えたまま眠りに落ちた。

6・令嬢はグルメを満喫する

エリオットは言ったとおり、レイチエルに食事が出されるように手配しなかった。

優位の筈なのに武器で脅され、逃げ出した悔しさからの嫌がらせももちろんある。

だが、一番の目的はそれじゃない。食事抜きに弱ったレイチエルが屈服して頭を下げるだろうと、持久戦に持ち込むことにしたのだ。

レイチエルに食事が与えられない代わりに、牢番が毎食牢屋の前で食事をする。本来与えられるはずだった囚人食を目の前で嫌味に美味しく食べて見せて、レイチエルの飢餓を煽る作戦だ。

いくら余裕綽々のレイチエルでも、食事さえもらえないとは思えない。勝ったつもりの所へ食事抜きは恐怖。これで少しは懲りるが良い。そうエリオットは自信を見せた。

そんなわけで。

牢番は鉄格子の前に一つ置かれた机の前に座り、自分で運んできた食事を解説しながら自分で食べていた。

「いやあ、お貴族様用だと黒パンも味が違うなあ！舌触りもなんだか滑らかだし、まだ新しいから酸味も臭いも少ないな！」

メニューもヒドイが牢番もグルメポーターには成れそうもない棒読みゼリフだ。それでも牢の中の令嬢に効いたのか、レイチエルが自分の食事を嘆く声が聞こえてきた。

「オートミールを持ってきたのはいいんですが、ミルクが粉末から

戻したものとやっぱり一味足りませんね……レーズンがあったので、まだマシですけど」

「こいつは鶏胸肉のつけ焼きか！ 冷めるとはいえ良く味が染みてるな、うん。いやいやこれは、囚人にはぜいたく過ぎるんじゃないか？」

「私の方も味が染みてると言えば染みてるんですけど……この鴨のロースト、ソースに漬ければなしたからお肉が固くなってしまっていますわね。まあ、缶詰の限界でしょうか」

「……デザートまでついてるたあ豪気だね！ うん、このオレンジちよつと酸味がきついのがまた何ともいい！」

「あ、この白桃のシロップ漬けはなかなかいいですね。生のフレッシュな爽やかさは無いですけど、くどいまでの甘さが別物のスイーツみたいです」

折り畳みの円卓と椅子を出して持参の缶詰で食事をしていたレイチエルは、無言で見つめる牢番と目が合うとニコツと笑った。

「やはり保存食だと味がいまいちになりますね。牢番さんは満足なお食事だったようで羨ましいですわ」

「はっはっは！ どうだ、羨ましかったら早い所王子に謝って……で、ドチクシヨオオオオツ！」

蹴り上げた机と一緒に飛び散った、金属の盆と食器がガシャンガシャンとけたたましい音を立てて石畳に転がる。ちよつと涙目で牢番は鉄格子の中に叫んだ。

「心にもないことを言うんじゃない！」

「あら、牢番さんがせっかく美味しそうに食べていらっしやるので話を合わせようと気を使っただつたのですけれど」

「ホントに貴族でヤツは、人の神経逆なでする技術だけはスゲエな！？」

「あ、お昼はメニューなんですか？ 牢番さんの献立に合わせて私も取り合わせを考えないとならないんでえ」

「いいよ！ 嫌がらせが効いてねえって口で言えよ！？ 嫌がらせに嫌がらせで返す必要はねえんだよっ！」

「まあ、いけませんわ！ 貴族たるもの、同じリングで戦いませんと」

「正々堂々に見せかけて、机の下で小突きあう様な陰険な戦いに巻き込むな……」

「それがあなたのお仕事でしょう？」

何を言っても堪えない令嬢に、牢番はちょっと切れ気味に指を突き付ける。

「いいか！？ おまえ、このままで済むと思うなよ！？」

「まあ怖い」

「お前の持ち込んだ保存食はそのうち尽きる！ そうなってから飢えて頭を下げたって、王子が取り合ってくれると思うなよ！？」

と叫びつつも……牢番の目は牢内にうずたかく積まれた木箱の山に吸い寄せられる。

……これ、何か月分あるんだろう……？

牢番の報告で、食事の見せびらかし作戦は中止された。

「くそっ！ くそっ！ くうそおおおおっ！」

美形の王子様が、絶対しちやいけない醜態を晒して怒り狂う。そんな居たたまれない現場で、取り巻きである騎士団長令息のサイクスと公爵家嫡男のジョージは傍らで息をひそめて眺めていた。ついでに巻き込まれた侍従が数人、壁際に気配を消している。

今のところ、どう見てもレイチエルの方が上手だ。

地団太を踏むエリオット王子だが、ありえない事態の連続に無能でない筈の彼も次の手が思いつかない。牢屋の中でハンガーストラ

イキをされるならともかく、兵糧攻めが効かないほど備蓄食料が有り余っているなんて非常識もいいところ過ぎる。

「レイチエルめ……ひもじいと泣くどころか、むしろ嫌がらせをスパイスに食事を美味しくしてやがる！」

「牢番の報告ですと、メニューを寄せて来るほど余裕があるそうで……」

「水は止められんのか！？ さすがに飲み水が自由に使えなければあいつも好き勝手できまい！」

「止めるには上水道の流れる経路を破壊する必要があります。下手にさわれば王宮の半分は水が止まります」

「クソがアアアアッ！」

初手からカウンターを食らって発狂しそうな王子様。ちょっと耐久力が弱い。

「どうします？」

サイクスの問いに、エリオットが吐き捨てた。

「もういい、たまの巡回以外は放っておけ！ 下手に構うとヤツを楽しませるだけだ！」

王子にしては珍しく考えてるな、とジョージは思ったが……口に
は出さなかった。そんなジョージへ王子がこめかみに血管を浮かせて向き直る。

「ジョージ、ファーガソン公爵家をお前が押さえられんのか！？」

とぼつちりが回ってきて、ジョージは内心首をすくめた。まあ姉
がこれだけ王子の神経を逆撫でしているからには予測はしていた
けど。

「これからはともかく、運び込まれた物資を今から運び出させる方
法はありません。まあ、父が何と言おうと公爵家からこれ以上支援
はさせませんが」

「うむ。レイチエルがこれだけの準備をできたのも、公爵家の財力
と人数が桁違いだからこそだからな。公爵家をお前が押さえて敵に
回ったと知れば、さすがのレイチエルも氣力を失うに違いない。確

「実にやれよ」

「はっ！」

これだけの準備をレイチエルは公爵家本体の力を使わず、自分の手駒だけで行ったなどとは二人の想像の範囲外にある。

おまけにエリオットもジョージも、この時予想もしていなかった。公爵夫妻がすでに、嫡男ジョージの方を見限っていたなどとは。

それから、何日かして。

昼過ぎに牢番が巡回で降りていくと、地下牢の中のレイチエルが珍しく自分から声をかけてきた。

「牢番さん」

「おっ？　なんだ。少しは頭が冷えたか」

「頭を冷やすべきは殿下の方だと思いますが」

「……なんだよ？」

全然堪えてない様子のレイチエルを見れば、彼女は甘い香りのする缶詰を開けてスプーンをくわえていた。今デザートを食べていたらしい。

「牢番さんは、三食ここでご飯を食べるのではなかったんですの？」

「ああ、それなら取りやめになった。お前にダメージを与えるどころか、こつちがバカみてえだって話になつてな」

「それなんですよ」

レイチエルが可愛らしく困り顔で小首を傾げた。

「一人でご飯を食べるのも味気なくって」

「ほう……図太いわりに、かわいいことを言うじゃねえか」

「やっぱり牢番さんの吠え面を見ながらでないと、勝った実感がしなくてご飯が美味しくないですね」

「やかましいッ！　おとなしく本でも読んでろ！」

「そう、それ！」

「.?!」

7・令嬢は芸術を爆発させる

暗闇に月光が差し込み、窓の形に細長く床が照らされている。光が当たる所は新聞の文字さえ読めそうなのに、そこから外れたすぐ横の暗闇は何が置かれているかも判らない。

静かな空間の光溜まりのすぐ脇で、クッションに埋まっていたレイチエルは身じろぎして身体を起こした。

「うーん……昼間に寝すぎたのかしら」

目が冴えてしまつて寝られない。

誰も怒らないから嬉しくてついつい昼寝をし過ぎてしまった。一人暮らしに浮かれ過ぎたかもしれない。

レイチエルは寝るのを諦めて立ち上がった。換気窓からちょうど月が見える。

「……いい月ね。今日はちょうど満月かしら」

冴え冴えと白く光る真円の月にしばし目を細めたレイチエルは、もう一度毛布をかぶる代わりに良いことを思いついた。

木箱を積み替えて、窓の下まで階段を作る。

「よいしょつと」

準備した荷物の中から高そうなキャリングケースを取り出し、作った木箱の階段を昇る。最上段に座ると窓に顔を寄せ、夜風を楽しんだ。

「月に向かって奏でるのも情緒があるわね」

レイチエルはケースから愛用の楽器を出し、夢見るような表情で一撫ですると唇に当てる。

星降る夜空に、軽妙な音色が響き渡った。

エリオット王子は寝巻の上にナイトガウンをまとっただけの姿だった。足元も土で汚れたスリッパで、寝室を飛び出してそのまま地下牢まで急いできたのが丸わかりだ。

最高潮に苛ついた顔で睨みながら、エリオットは静かに尋ねた。

「レイチエル、俺に何か言うことは無いか？」

鉄格子を挟んで楽器を持ったままのレイチエルは、同じく着ているナイトガウンの前を合わせながら恥ずかしそうにチラッと王子を見た。

「殿下……こんな深夜に乙女の寝室に忍んでくるなんて、褒められたことじゃないですよ？」

一拍、二拍の沈黙を置いて。

エリオットがスリッパのつま先で鉄格子を蹴りつけた。

「それじゃねえよッ！？ 言うことあるだろうが、他にさ！ 迷惑かけてごめんなさいとか！深夜と判っていてパンパカパンパカとラッパを吹くな！」

「殿下……これはトランペットという名前がありましたね？ 同じ吹奏楽器ですけど狭義にはラッパとは別物でして……」

「知っているわ！ そんな事はどうでもいいんだよ！？ だいたいこんな真夜中にけたたましい音を出した理由が、満月を見てセンチメンタルになったからだと！？」

「はい」

「そういうシチュエーションで、なんで吹いたのが『シング・シング・シング』と『茶色の小瓶』なんだよ！？、どういう感性をしているんだお前は！？」

「あら……殿下、意外に教養がおりになるのね」

「馬鹿にするな！ いいか、次にこんな事をやってみろ！？ 今度こそ騎士団動員して、貴様をハリネズミにしてやるからな！？」

「そこは見栄でも自分がつて言いましょうよ……」

ぷりぷり怒って帰っていくエリオットを見送り、レイチエルはホクホクした笑顔でトランプットをケースにしまった。

「届く確率は五分五分といった所だったけど、風向きが良さそうなので挑戦した甲斐があったわねえ」

賢者も駄目にするクッションをポンポンと軽く叩いて整え、満ち足りた顔で横たわる。

「あー……殿下の見事な吠え面を堪能できたので、今夜は良く寝れそうだわ」

朝食後になんとなく壁を眺めていて、レイチエルはハッとペンキを持ってきていたことを思い出した。

「そうだったわ。殺風景だろうから壁を塗ろうと思ってペンキも用意していたんだった」

昨夜の演奏でちょっと芸術を楽しむ心持ちだ。レイチエルはいそいそとペンキ塗りの道具が入った箱を探しにかかった。

木箱の隙間詰めに入っていた古新聞を地面に敷き、その上で良くかきまぜたペンキの缶をこじ開ける。とりあえず白で下塗りをした石壁を眺めたレイチエルは首を傾げた。

「んー……壁紙みたいに塗るのもなんだかもつたないわね」

当初の予定では全体を好きなパーミントグリーンに塗って、後は細かく所々に花を描こうと思っていたけれど……白一色の壁を見て、それがなんかもつたないか思えてきた。

「よし、大作に挑戦してみましようか！」

インスピレーションが降りて来た。外に出れないから、景勝地のイメージで景色を書いてみるのもいいかもしれない。

執務机に肘をつき、しかめっ面で書類を眺めるエリオットにジョージが恐る恐る声をかけた。

「どうしました殿下……寝ていないんですか？ 目の下にクマができていますが……」

「ああ……」

げっそりした顔のエリオットが俯いて、机に置いた手の甲に額を乗せた。

「クソッ、レイチエルめ……！ 布団に入ってもメロディが頭の中で延々リピートされて一向に眠れなかった……」

「は？」

「いや、こつちの話だ……」

エリオットがなんとか背筋を伸ばした時、サイクスが入ってきて扉を叩いた。

「サイクス……ノックは部屋に入る前だ」

「ああ、そっか」

サイクスがやり直す為に出て行こうとするのを、イライラしながらエリオットが止める。

「マナー講座は家でやれ！ 何か用事があつたんじゃないのか!？」

「そうそう。いや、なんか地下牢から異臭がすると苦情が来ましてエリオットとジョージは顔を見合わせた。」

「……まさか、お前の姉がすでに腐乱死体に……?」

「それは殿下の願望でしょう。夜中に会ったんでしょう？ 半日で臭いは広がりませんよ」

「いや、そういう生ものつばい臭いじゃなくて。なんか、もっと刺激臭らしい」

「……?」

地下牢までやって来た三人は様変わりした壁に開いた口がふさがらなかった。

「お、おまえ……これ……」

昨日までただの石壁だった地下牢の側面の壁には、今や花咲く草原と雄大な峡谷、そしてその背景に万年雪をいただく白い山脈が広がっている。遠近法や陰影、一点透視を活用した立体的な風景画は写実的で、息を呑むリアルさだった。

しかし。

「ここ、地下牢なのに……」

こんな誰も見ない場所にこんな絵があっても……。

地下牢から流れ出る異臭はペンキの臭いだった。レイチエルが一日がかりで大量のペンキを使用したため、そのケミカルな臭いが地下空間に充満している。

「しかし、凄い臭いだな……レイチエル嬢は臭くないのか、これ」サイクスに聞かれ、花畑の仕上げをしていたレイチエルが振り返った。

「最初は凄かったんだけど、半日も嗅いでいると鼻が馬鹿になっちゃって全然判らないわ」

「最初に嫌にならなかったのかよ……」

「始めたら気にならなくなったんだけど……」

仕上げを終えたレイチエルはできるだけ壁から離れてじっくり眺め……。

「もしかしてなんだけど……」

「もしかして？」

少女は首を傾げた。

「寝室にこの絵はなかったかしら」
「最初に気づけよ！」

鉄格子を挟んでレイチエルとサイクスがワアワア言い合っているのを見ていたジョージが、ふともう一人が静かなのに気が付いた。

「あれ？ 殿下？」

振り返ったジョージが見たものは。

「殿下！？」

床の上に、グロッキーになって倒れているエリオットの姿が。

「殿下ーっ！！」

慌ててジョージとサイクスが抱き上げるが、すっかり白目を剥いている。

「寝不足の所へこの臭いだもんなあ」

「今は原因はどうでもいいだろ！？ 早く外へ！」

男性陣がバタバタと出ていく中。レイチエルは一つの結論を出した。

「ま、殿下に一発かませたから良いにしますか」

7・令嬢は芸術を爆発させる（後書き）

現実の曲名は出すべきでないと思うのですが、レイチエルがおかしなチヨイスをしたのがイメージしやすいように敢えて使わせていただきました。

8・令嬢は夕食を狙撃する

回廊を歩いていたらエリオット王子は、裏庭から内門の方へ雑木林を抜けていく若い男に気が付いた。そんな男はいくらでもいるけれども、たまたま彼の服装が廷臣に見えないので気が付いたのだ。

「おい、あいつ変じゃないか？ どうみても王宮の使用人に見えないぞ」

言われたサイクスがもう内門に差し掛かっている男を眺めた。

「あれは……下町辺りの軽食堂のスタッフに見えるなあ」

「なんでそんなのが城にいるんだよ？」

サイクスのつぶやきにジョージが呆れた声を出したが、エリオットはサイクスのおかしな意見に、笑い飛ばせない“何か”を感じていた。

「なんだ……？ なにか、おかしな物が……うつ！？」

ちよつと考えて“何か”の正体に気が付いたエリオットが駆けだす。

「地下牢に行くぞ！」

「えっ？ どうしたんですか殿下！」

慌ててついてくる二人に聞かれ、エリオットは見えてきた鉄扉を指さした。

「あの男の来た方向を考えろ！ 絶対レイチエルのからみだ、これは！」

「あつ！」

息せき切って地下牢の前まで駆け降りた三人が見たものは……。

「……見ててもあげませんよ？」

そこにはホカホカと湯気を立てる皿の前に、食前の祈りを捧げ終わってナイフとフォークを手に取ったレイチエルがいた。

彼女の前には、明らかに地下牢の中で作れない手の込んだ料理が並んでいた。作りたてらしく、美味しそうな香りを室内に漂わせている。

「お、おまつ……なんだそれはっ!？」

裏返った叫びを上げる王子に言われ、レイチエルは食卓を見下ろした。

「なんだも何も……殿下だって、どれも食べたことあるでしょう？ キドニーパイと、鳩の香草焼と、パンプキンのポタージュにミントのジュレ。ごく普通の昼食ですよ」

「メニューを聞いているんじゃない！ 貴様、なに外で作った食事なんて取っているんだ！」

王子を気にせず食事を始めていたレイチエルは、鳩肉を飲み下してから口を開いた。

「何か問題でも？」

「問題だろ！ 貴様に飯など出さないと宣言しただろうが！」

「ああ、腰を抜かしてサイクス様にお尻を押してもらっていた時ですわね？」

「ぐっ……」

ナプキンで口を拭って、レイチエルは軽くグラスを傾けワインを飲んだ。

「確かに、食事など出さないから飢えてしまえとか言っていましたね」

「そうだ！」

「でも、それはそちらが出さないという話ですよ？」

「……え？」

レイチエルはナイフを取り、サクサクとパイを切り分け始めた。

「囚人食を出さないというお話は伺いましたが、別に自腹で出前を取ってはいけないとは言われておりません」

「なっ……!？ ば、馬鹿を言うな！ 囚人が外部から出前を取るなんて聞いたことが無い！」

「牢屋で囚人が出前を取ってはいけないと、刑法のどこの章のどの

条項に入っていますか？」

「そ、そんなのは知らん！　だがそもそも常識で言えば……！」

「王の決めた婚約を論拠の怪しい証拠で破棄した殿下が、常識とかどの口で言いますか」

「……」

「一般常識を言うのなら、囚人を収監しておいて食事を出さないというのはどうなんですかね？」

「くっ……貴様の今の態度を、不敬罪で告発して死刑にしてもいいんだぞ！？」

「それならまず、処刑場まで牢から出して引っ張っていきませんかねえ」

「ぐっぐっ……」

言葉に詰まる王子を尻目に、レイチエルは優雅にランチを続けた。

「ふう、出前を禁止してしまったわ」

王子が牢番に命じていた。出前は入口ではねられてしまうらしい。法律の抜け穴を探すのが好きなレイチエルとしては、事後立法はずるいと思うのだけれど……まあ、それはともかく。

「にしても相変わらず殿下は抜けてますね。うちの愚弟もまったく……出前を禁止するとか言う前に、普通は真っ先に外部との連絡手段を吐かせるものじゃないですかねえ」

道理である。

「やっぱり出来立ての食事は美味しいなあ……またフレッシュなお肉食べたいなあ……」

レイチエルは先ほどのデリバリーされたランチを思い浮かべた。

「いけない、なんかワンクッション置かないと缶詰に戻れなさそう」
ぜいたくを言っではいられないけど、作り置きでない食事はちょ

つと刺激が強すぎた。もう少しだけ味わいたいところだけでも……。
「……そうだ。スローライフの基本は採集生活ですよ、ね？」
レイチエルは換気の為に設けられた細長い窓を眺めた。

あまり整備されているとは言えない荒れた裏庭を、豪華な服装の老人と壮年の男が歩いていった。

「しかしエリオットにも困ったものなの……選りによつて陛下たちが長期空けている時にこのような事件を起こすとは」

「王に委任されているとはいえ、王子が起こした事件となるとやはり陛下に裁可を仰がねばなりませんからなあ」

王の叔父にあたる王室顧問のヴィバルディ大公と、宰相のオーガスト侯爵はひと気のない所で今現在の懸案事項について相談……というか愚痴のこぼし合いをしていた。

オーガスト宰相は辺りを見回した。

「しかし大公。また珍しい所を散歩コースにしているのですな」

荒れ果てたと言つてもいい裏庭は、ただスペースがあるだけで貴族が見たがるような手入れした庭園などではない。

丸々と太つて好々爺然とした大公は、悪戯を見つかったように首をすくめて顔をほころばした。

「なははは。ここはここで、綺麗に整備された庭とは違う趣があるのだよ」

大公はぶつくりした指で伸び放題の雑草をかき分け、そつと向こうを覗き込んだ。

「見たまえ宰相。より自然に近いこの庭には、表向きの庭園よりもたくさん野鳥が来ていてな……ほれ、最近の儂のお気に入り池のほとりに今降りた大きな鴨じゃ」

同じように草むらに身を隠して覗いた宰相も感心した。

「ほう……あれはなかなか大きいですね。毛並みも美しい」

「うむ。僕はアレに密かにエンリケという名をつけてかわいがっておつてな……」

そうお気に入り鳥について大公が解説を始めた時。

シタアンツ！

「ギヤアアアアアアア！」

「何ごと！？」

二人の目の前で、何かに気が付いて飛び立とうとした“エンリケ（仮称）”が急に大声で叫びを上げ、失速して地面に落ちた。周囲の鳥たちがパニックを起こして大わらわで飛び去る中、二人が開けた池のほとりへ転げ出してみると……。

ズリッ。

ズリッ。

瀕死で痙攣している“エンリケ”が、自力ではありえない方向へ少しずつ進んでいた。

よく見ればエンリケの胸を先端に返しの付いた矢が貫通していて、矢尻に結ばれた細い紐を誰かが引っ張っている。

無言で延々続く紐を追いかけて、近くの古ぼけた建物の壁にたどり着く。見えにくい地面から十センチほど上に横長のスリットが開いていて、二人に遅れて到着した“エンリケ”がそこから中へ引きこまれていった。

無言で大公と宰相が顔を見合わせていると、穴の中から若い女のはしゃいだ声が響いてくる。

「わあ、結構な大物だわ！ いいね、いいわね、食べでがありそう！」

声からなんとなく誰かを推定した宰相がしゃがみ込んで声をかけた。

「もし、ちょっといいかな？ 君は一体何をしているんだ？」

「え？ 私ですか？」

ちよつと戸惑ったような返答の後、少女は何をしていたのかを説明してくれた。

エリオットと側近たちが廊下を歩いていると、向こうからヴィバルデイの大叔父が子供のように泣きながら走って来た。後ろからなだめるように宰相が追っている。

「ん？」

何が何だかわからないエリオットたちが立ち止まって眺めていると、エリオットに気が付いた大公が大泣きしながら胸倉をつかんできた。

「エリオット、貴様ああ！」

「え、俺？ 俺が何か！？」

「貴様が……貴様のせいで……」

「何！？ 大叔父上、俺、じゃなくて私が何かしましたか！？」

不摂生な老人など引つpegすのは簡単だが、国王夫妻が不在の今、城代を任されている王族のトップを粗略に扱うわけにもいかない。サイクスもジョージも王の叔父に触るわけにいかず、どうしようかと顔を見合わせた。

「うつつ……貴様のせいでエンリケが……エンリケが……」

「え、エンリ……誰！？」

「エンリケがレイチエル嬢に食われてしまったんじゃあー！」

「レイチエルうううううー！」

エリオットたちが地下牢に駆けつけた時、牢の入口で牢番が途方に暮れた顔で座り込んでいた。

王子たちを見て慌てて立ち上がる牢番の横から、もくもくと煙が立ち上っている。

「おいっ、これはいったい何なんだ!？」

「それが……」

牢番は煙を噴き出す戸口を情けない顔で振り返る。

「嬢ちゃんが焚火をしてまして」

「焚火!？ 地下牢でか!？」

「火力は調整しているから酸欠にはならないそうです……」

「そんなことはどうでもいい! 牢屋の中で焚火って、何を考えているんだアイツは!？」

牢番が頭をかいた。

「新鮮な鴨肉が入ったから、バーベキューをするそうデ」

「あんの野郎オオオオオ!」

地下牢まで降りてみると煙は天井付近に滞留して階段上の戸口から抜けていくため、意外と地下空間自体は煙くなかった。

牢の中では石畳が復活し、中身を使って空になった木箱を叩き壊した薪でレイチエルが小さな焚火をしていた。鉄板が乗せられ、音を立てて肉が焼かれている。状況をわきまえないサイクスが、匂いにつられてよだれをたらしかけた。

エリオットは色々ツツコミたい環境を無視して、真剣に肉をひっくり返すレイチエルに指を突き付けた。

「レイチエル! 地下牢で焚火やバーベキューをするな!」

王子を見ようとせず、焼肉に集中するレイチエルの返事は短かった。

「そんな規則はありません」

「当たり前だろ！？　どこの世界に牢屋でキャンプファイヤーをする馬鹿がいるんだ！」

地団駄踏んで怒鳴り散らすエリオットを、肉を見つめて頃合いを計るレイチエルがちらりと見やった。

「そうですねえ……　こういうのはケース・バイ・ケースですから。食べ物を与えられなくて飢えたら、誰でもやるんじゃないでしょうか」

「そんな事があつたとは、古今東西聞いたことも無いぞ」

「まあ、前段階の話で牢屋に弓があることが珍しいですからね」

「つまりおまえだけだ、こんな真似をするのは……！」

ものつすごい嫌そうな顔でエリオットが尋ねた。

「貴様、大叔父上に飯が与えられないから自分で獲つてると言ったらしいな」

「ええ、たしかそんなことを言いましたね」

「じゃあ、食事を出せば勝手な振る舞いをしないんだな！」

最大限の譲歩！

エリオットは少しでもこの性悪女の思い通りにするのは我慢がなかったが……　大叔父にメチャクチャ怒られて泣き喚かれて、再発を防ぐために断腸の思いで兵糧攻めの中断を決断した。

くそう、レイチエルめ……　今のうちに好き勝手言っているがいい。だが、今の散々我がままを言い散らかしたのも含めて、父上が帰ってきたら貴様の罪業を全て告発してやる。

散々馬鹿にしてくれているレイチエルは、もはや死刑でもいいんじゃないかと思いついたエリオットだった。彼はまだ、レイチエルが本腰でないのを知らない。

初めはとにかく追い詰めて屈服させるつもりだったが、そういうやり方ではレイチエルに好き勝手されるとこちらに甚大な被害が出る。主にエリオットの神経に。

もうとにかく隔離したことで良いにするしかない。コイツを黙らせられるんなら、古パンぐらい投げてやる。

寛大な提案をした偉大なエリオット王子に、ヒトの気も知らず美味しく食事を終えたレイチエルが初めて向き直った。

「殿下に食べ物をいただくなんて……なにが入ってるかわからないから要りません」

9・令嬢は牢番を買収する

読書ばかりだと肩が凝るので、レイチエルは昼間は刺繍などもやってみたりする。

しばらく無心にハンカチを縫っていたレイチエルは持っていた針を置き、キリが良い所までできた刺繍を眺めた。
縁取りだけ出来た花を見ながらつぶやく。

「うーん……静かすぎますね」

刺繍の事ではない。

一か月近くも前に、つまり王子が密謀を相談し始めた頃からレイチエルは婚約破棄の情報を押さえていた。

だけどいざという時の準備まで進めておきながら、レイチエルが阻止に動かなかったのは……その方が“面白そう”だったから。

ボンクラ王子と腰巾着どもが、どこまでやれるか見てみたかったし。

牢屋に押し込まれば、その間王妃教育をサボることができるし。何か自分の思いつかないトラブルが発生しそうでワクワクしていたし。

そんな考えで王子の陰謀に乗ってはみたものの……思った以上にエリオットの底は浅かったみたいだ。一週間経つのに、兵糧攻め以外は全然手を出してこない。

「これでは、せっかく甘んじて恥をかいいたのに……つまらないわ」

もつと王子が色々汚い手を繰り出してきて、それをガンガン打ち返そうと気合いを入れていたのに。

冷めているお茶を一口すすると、それでも香りが鼻を抜けて行つた。

レイチエルはニコリと笑った。

「そうですね。待ちの姿勢は私らしくなかったかもしれません。今まで王子の方から仕掛けてくると思っていましたが……うん、こちらからガンガン行きましょう」

脱獄は夜中が多いので、牢獄の巡回は夜にもやる。

「つつても、今王宮の牢屋にはお嬢一人しかいねえしなあ……あれが脱獄するとはとても思えねえ……」

とはいえ、仕事は仕事だ。

牢番がヒタヒタと足音を立てて地下牢に降りると、照明を暗めにして公爵令嬢は床に座っていた。起きてはいるようだ。クッションにもたれかかって、小さな窓から空を眺めている。

「何しているんだ？」

純粹に疑問に思った牢番が尋ねると、月明かりに照らされた美貌が振り返った。

「あら、牢番さん。いい夜ね……今ちょうど月が見えるから、ちょっとお月見などを」

そういうとレイチエルは指先でつまんだ小さなガラスのタンブラーをクツとあおった。流れてきた香りに牢番は怪訝な顔になる。

「おいおい、公爵令嬢がウイスキーかよ……」

ウイスキーは強い酒だ。しかもショットグラスを傾けているということはストレートだろう。男ならたまに貴族でも愛飲者はいるが、およそ社交界には縁が無い労働者の酒だ。

「あら、香りでわかるなんて結構好きなんですの？ おひとついか

が？」

「おまえ、すでに酔ってやがるな……て、ええっ!？」

いい心持ちで上機嫌に瓶を振るレイチェルに、呆れかけた牢番は……彼女の手の瓶を二度見して驚愕した。

「おいっ、それ『聖ヴァレンチヌス』の三十年物じゃねえか!？」

「あら、詳しいんですね」

「とんでもない代物を飲んでやがるな……俺の給料二ヶ月分より高いんだぞ、それ」

「父の保管庫から封を切つてないのを持ってきたので大した話でははい、グラス」

「いや、立場的に俺がもらうわけには……いや、でも『聖ヴァレンチヌス』三十年……」

「おつまみもありますよ」

令嬢が出した盆には、スライスしたコンビーフやレーズンバター、ピクルスにスモークチーズ、レバーパテを塗ったクラッカー……。

「ささ、なみなみと……」

「おおお……これが、あの三十年物……!」

好きな所へ持つてきて、伝説の逸品を貴方の分ですと差し出されて受け取らない牢番がいるだろうか（いや、いない）。

つい受け取つて魅力に耐え切れず、キュツと盃を干せば茶色の瓶が突き出される。

「良い飲みっぷりですね。さ、駆けつけ三杯ですよ」

一瞬で飲んでしまった逸品をもったいなく思った所へ、なみなみと注がれる琥珀色の香しい液体。

二杯が三杯に、四杯に。舌が慣れてくればレイチェルが次の一本をお勧めする。とうとう仕事を忘れて気持ちよく飲み始める牢番は、途中からレイチェルが口もつけていないのに気が付かない。

「やっぱりウィスキーはストレートで喉を通つた余韻がたまりませんよね」

「わかるか！？ この鼻に抜ける芳香がたまらねえんだ！ 嬢ちゃんいける口だな」

「いえいえ牢番さんこそ。あ、チョコレートいかがですか」

「おおつ、悪いね！」

完全に泥酔してしまった牢番は、酔って無警戒になったところへレイチエルの甘言を流し込まれる。たつぷり銘酒を御馳走になって、楽しく呑んで、お土産に未開封の一本を持たされて……。

「いやあ、話してみれば嬢ちゃんなかなか話が分かるな！」

「うふふふ、これでも人当たりは悪くないつもりなんですけどねえ。でもエリオット様ときたら、俺が俺がなんですもの。話が通じないんじゃないくて、できないんですよ」

「わかる、わかるなあ。ありやあどう考えても王子様は頭が悪いよなあ。うん、嬢ちゃんが悪くない！」

楽しい飲み会の記憶は、うまく丸め込まれているんじゃないかという猜疑心を押しつぶした。レイチエルが囁きかけた言葉はそのまま牢番の脳裏へインプットされる。お開きになる頃には、アルコールで濁った牢番の思考能力には『王子』馬鹿で悪、レイチエル『可哀そうで善』の図式が焼き付いていた。

「そろそろ夜も更けてきましたね。お帰りの時は足元気を付けてくださいね。せつかくのウイスキーを落とさないでね？」

「おおう、任せとけ！ あ、そうだ！ 城外とのやり取りには便宜を図るから、嬢ちゃんもまたいいのを頼むぜ」

「ええ、判っていますわ。お手紙や面会をフリーにしていただければどんどん差し入れをもらええると思いますわ」

「頼もしいねえ。よし、そこら辺の事は俺が何とかすらあ」

「お願いしますね」

千鳥足で階段を上がっていった牢番が、大事な土産を抱えて外へふらふら出て行った後。

地下牢の前室の光の当たらぬ隅から、すっと立ち上がる気配がし

て牢の前に闇が伺候した。

「お嬢様、あんな木っ端役人などを言い含めなくとも。我々ならば大抵の物は……」

クッシヨンの形を整えて寢床を作っていたレイチェルがフツと笑う。

「城門の連中と同じですよ。廷臣が王子より私の肩を持つという形が大事なのです。特に私の考えですと、エリオット様を面罵するのに彼らの同情と協力が必要になります」

「はっ、出過ぎたことを申しました。お屋敷の方は先日のお話の通り、準備を致します」

「よろしくね」

闇から再び気配が霧散するのを横目に、レイチェルは毛布をかぶって灯りを消した。

10・令嬢は暇をつぶす

良く晴れた空をレイチエルは格子の間から眺めていた。

「いい天気……雲雀がぁんなに空高く飛んで」

暗い牢屋に閉じ込められていて、たまに自由な外が恋しくなる。
たてこもって

「かといって外には出れませんしね……」

出れないというか出ないというか。

レイチエルはふと、紙飛行機など飛ばしてみるのも面白いかと考えた。外に出れない自分の代わりに、思いを込めて空高く飛んでくれたら……。

紙を探すと、適当にメモをした裏紙の束があった。どうせ要らない物だからこれを使おう。

「紙飛行機というのも……意外と奥が深くて面白いわね」

折り方、形で飛び方が全然違う。スマートに整形しても遠くまで飛ばなかったり、薄い紙でも風に乗って塀の彼方まで飛び去ったり。折り方を変えて色々な紙飛行機を夢中で飛ばす。あちこちに白い紙が飛び去り、一度落ちた物が風に吹かれてまた地上を離れるのも興味深い。

用意した紙が無くなるまで、レイチエルは小さな窓から大空へ挑戦し続けた。

エリオット王子がふと空を見上げると、なにやら紙ゴミが舞っていた。

そんなものは別に彼が気にするようなものではないけれど、気に

なつたのは立て続けに違う形の物が飛んできたこと。紙飛行機っぽい物から筒形に丸めただけの物まで、あきらかに誰かが折っている。風に乗って近くに飛んできた物を拾うと、何やら文字が書かれているのが見えた。

「ん？」

開いてみると、流麗な筆跡で走り書きされていた。

『スクープ！ 王子が長髪オールバックなのは頭頂部のハゲ隠しだった！？』

思わずメモを落としてしまった。また風に乗る前に急いで拾う。

「なんだ、これは！？」

慌てて他の紙も拾い集める。

『イケメン王子と白癬菌の十年戦争〜水虫との絶望的な戦い〜』

『城下の娼館に専用客室 来店挨拶は“お帰りなさい” 呆れた王子の爛れた私生活』

『宮殿騒然！ 全教科赤点の衝撃 お勉強べんきょうできない王子様に大臣絶句！』

一瞥して意識が飛びそうになったエリオットは、風に手元を攫われそうになって慌てて紙束を掴みなおす。

「なんだこの捏造ゴシップは！？ これまさか、そこら中に飛び散っているのか！？」

見回せば白い物があちらにも、こちらにも。

「おいおいおいおいおい！」

さらに城壁の向こうから、城下の子供たちが適当な節回しで歌うのが聞こえた。

「馬に乗った王子様あ

一歩進んで滑り落ちい
二歩進んだら転げ落ちい
三歩進んで二歩下がるう
あゝあゝ、そもそも乗り方判らないいゝ
だってエリちゃん馬鹿だからあゝ」

転がり落ちるように階段を駆け下りる足音が地下牢に響いた。

「レイーチエールウウウウウウ！？」

槍を構えたエリオットが鉄格子から牢の中へ槍を突き刺す。

「貴様ああああ！ 死ねえ！ 今すぐ死ねえ！ 直ちに死ねえ！」

何度も打ち込まれる槍先を、奥の方でクッションにごろ寝したまま本を読んでいたレイチエルがちらりと眺めた。

「殿下、馬上槍^{ランス}は衝撃力はあっても攻撃範囲は狭いです。こんな事を女に教えてもらわないと判りませんか？」

「ちつとは怯えろ！ くそふてぶてしい女だな！？」

「取柄が顔しかないのに、その言葉遣いもまずいと思いますけど」

「まずいと言ったら、貴様のやらかした事以上にまずいことがあるか！？」

エリオットはかき集めた紙切れを鉄格子へ叩きつけた。

「なんだこれは！？ 俺を誹謗中傷したビラなど作ってバラマキおつて！ どこまでも汚い女だ、こんな嘘を並べ立てて俺を貶めようとはな！」

「片方の当事者の証言だけで人を断罪したお方がよく言いますね」

…」

レイチエルは突きつけられたメモの山に視線をやってから、エリオットを見た。

「別に私は殿下を誹謗中傷する意図などございません」

「じゃあこれは何なんだ！？　こんな物を撒いて、どう弁解するつもりか聞かせてもらおうか！？」

レイチエルは身を起こすと座って本を閉じた。

「どこに殿下を誹謗中傷する内容が書いてあるのですか？」

「どこって……　どれを読んだってそういう内容しか書いてないじゃないか！」

レイチエルは牢の中にまで舞い込んできた一枚を指し示した。

「よく読んで下さい。これ、『王子が』としか書いてないじゃないですか。王子は世界に何百人いると思います？　これを自分のことだなんて、殿下は被害妄想気味なんじゃないですか？　お医者様に診てもらいました？」

「誰のせいでストレスを貯めこんでいると……！？　城外の子供たちが『エリちゃん』などと著しく敬意の無い歌を歌っていたぞ！？　人名が入っているじゃないか！」

「『エリちゃん』が殿下を指すと？　エリスだってエリントンだってエリツインだっているじゃないですか。まったく殿下は自意識過剰なんだから」

「この場で！　王子で！　エリだぞ！？　条件が合うのは俺しかないだろ！　ふざけるな！」

レイチエルが眉をしかめた。

「最近知恵がついて来たわね……　かわいくない」

「貴様、なんだその上から目線は！？　すでに不敬とか言うレベルを通り越しているぞ、貴様の言動は！」

「私はすでにやらかしているそうですから、ちょっと増えたくらいでは罪状は変わりません」

エリオットが牢の中を睨みつける。

「じゃあ認めるわけだな、俺を侮辱したと！？」

レイチエルは檻の外から威嚇して来るチンパン王子を無視して、本を開いた。

「だから、別に誹謗中傷したわけじゃないですってば。確かに暇つ

ぶしで、紙飛行機は作って飛ばしました。でも、そこらにあった反故紙を使っただけです」

「反故紙！？　あの内容で！？　何を書いたらあんなメモが出るといふのだ、貴様！」

「たまたまアングラ系の出版業者で、コピーライターの内職をやっていたものですから。あれはゴシップ紙のタイトルの候補ですよ」

「公爵令嬢がどこで何のバイトをしているんだよ！？」

「殿下のバカっぷりもここまで来ると頭が痛くなりますねえ……牢の中で内職しているって部分にはツツコまないんだもの……」

王子はレイチエルに一矢報いた！

レイチエルはぶつぶつ言いながら、木箱の中にあつた本を全部取り出していた。

「うーん……やっぱり持ち込んだのは全部読んじやいましたか」

面白そうな小説とかを片っ端から用意したのだけれど、自由時間が多すぎて全部読んでしまった。読書は二巡目も味があるけれども取り掛かるにはまだ早すぎる。

「刺繍もちょうど終わっちゃったし」

（勝手に）持って来たジョージの一張羅に、カッコよく（無許可で）刺繍を入れてあげたのだ。

黒のハーフマントに金系銀系で、フェニックスとドラゴンの戦いを精細に縫い上げた。これを羽織ればジョージのインテリぶった不機嫌眼鏡ヅラと相まって、もうズバピタで似合うだろう。きつと周りの人々も「うっわ、全能感に酔ってる痛いヤツ」とか「幾つだよアイツ……まだ『俺は神に選ばれた』とか思ってるワケ？」とか囁いて褒め称えてくれるだろう。

「これでジョージは人気者ですね。弟の為に姉は頑張りました」
きつと泣いて喚いて感謝してくれるに違いない。後で誰かにこっそりクローゼットへ戻しておいてもらおう。

というわけで、趣味がどれも一段落してしまったので暇な夜を過ごす手段がない。

「楽器も狩猟も禁止されちゃったし……」

敢えて破るのも面白いけど、今王子がうっとおしいので夜中に押しかけて来られるのは勘弁だ。

「まったく、年頃の娘の寝室に深夜に騒ぎに来るなんて。殿下は憤みが必要です」

原因がレイチェルでなければもったもな事をつぶやくと、何をしようかとぐるりと見まわした。

ふと、レイチェルの目に便箋が飛び込んできた。反故紙は紙飛行機にして飛ばしてしまっただけど、白紙はまだまだ積んである。

「そうだわ……小説が無いのなら、書く方に挑戦してみしよう」

自慢じゃないけどレイチェルは創作は得意な方だ。前にちよつと本を作ったこともある。長文は書いたことが無いけれども、幸い題材と時間は今たっぷりある。

「うーんと、主人公は小国の王子でベルモット王子。バカで欲望に忠実で難しいことを考えるのが苦手です……と。落とし穴に嵌まり、馬には馬鹿にされ、女の子を見ると追いかけたくなります」

キャラ設定を書き連ねていくと、ストーリーもサブキャラも次々湧いてくる。箇条書きにまとめていくだけで、なかなかの大作の予感がした。

「うん、いいですね！ 小説が無ければ書きちゃえばいいんですよ！」

レイチェルはあるだけの紙とインクを用意すると、手元に照明を引き寄せペンを握った。

数日後の夜。

闇に紛れ鉄格子の前に湧いて出た女は、机に向かってペンを走らせるレイチエルにそつと声をかけた。

「お嬢様、緊急ということでは急ぎ持つてまいりましたが……こんな物、なんに使うのでしょうか？」

格子に近寄り、持参した荷物を牢の中へ差し込む。茶色の油紙にきつちり包まれた便箋を四つ五つ、ボール紙の箱にダースで収まったインク瓶を二つ三つ。二、三千枚もの便箋と十分な量のインク。普通は個人で使う様な量じゃない。

「公爵家の物じゃないでしょうね？」

「はい、街で既製品を買い求めました。誰に渡しても出所は判りません」

レイチエルの確認に首を振った女に、レイチエルが大量の紙の束を渡した。すでに書き終わったものだ。読みやすい流麗な字が几帳面に綴られている……けれど、とにかく量が多い。

目の下にクマを作ったレイチエルは中身を確認している部下に笑いかけた。

「アングラで正体を隠しながら頒布するのが上手い出版業者があったわよね？」

「はっ、心当たりはありますが……？」

「そこに原稿を流して、さっそく市内にバラまいて。こっちの取り分もあげるから、価格を抑えてとにかく部数を刷らせて王都中に売り込みをかせさせるの」

レイチエルはちょうど書き終えたエンディングまでを追加で部下に渡し、目の付け根を揉んだ。さすがに今日はもう寝よう。

「はーっ……これだけ根を詰めると久しぶりにクタクタですね……」
中身を確認していた部下が首を傾げた。

持ち込みの小説を闇ルートで出版してほしいと訪ねてきた正体不明の女を相手にして、マウス&ラット商会の代表ロビンソンはハンカチですだれハゲの頭を拭きながらにこやかに笑いかけた。

「では、出版の条件は承知しました。ええ、うちは何しろ表向きは印刷屋と全く関係ない商売をしていますからな、出所を隠すのはお任せ下さい。うちが関与しているのさえ判らないようにばらまいて見せますよ……ところで」

ロビンソンは原稿の二ヶ所をめくるとそれぞれ同じ意味の箇所を指さした。

「一作目の最初の方だと王子はベルモット、騎士はハンクスになっていますが、後の方になるとエリオット王子に騎士サイクスになっています。書いた方は当て書きをされていたんですかな？ 多分どちらかはモデルの名前だと思うのですが、どちらに統一しましょう？」

ザ・庶民のロビンソン氏は自国の王族とはいえ雲上人の名を知らなかった。そして使いに來たメイドはレイチエルに染まり過ぎていた。

「たぶんエリオットにサイクスで良いと思います」

エリオットは最近サイクスがよそよそしいのに気が付いた。いつでも微妙な距離を取っている気がする。

「サイクス、どうかしたか？」

「いいえ殿下、お気になさらず」

曖昧な笑顔でお尻を押さえて距離を取るサイクスに、エリオットは首を傾げた。

10・令嬢は暇をつぶす（後書き）

「紙飛行機」という言葉は多分日本語訳です。歴史的には飛行機の出現以前はペーパーダーツとか言われていたようです。サイクス意外に読書もしてる。

11・王子は議論に振り回される

「数日ぶりに様子を見に来たら……おい、レイチエル、これはどういうことだ!？」

もうお馴染みになったエリオット王子の怒声に、アイマスクをめぐりながらレイチエルがちらりと見た。

「もう殿下……女性の寝室に来て怒鳴り散らすなんて、お里が知れますわよ?」

「俺はこの国の王子で、出身を隠すような田舎者ではないわ! だいたい貴様はここが寝室と主張するが、ならば居間はどこにあるというのだ!？」

「じゃあ牢を二部屋構造にして下さい」

レイチエルとやり合う王子の肩をジョージがつついた。

「殿下、議論がすり替わってます」

「そうだった……レイチエル、俺が訊きたいのはそこじゃない!

この牢の中身はどうなっていると言っているんだ!」

「えー……前から一緒じゃないですか。もういいにして下さい。私眠いんですよ」

「全っ然同じじゃない! 貴様、牢を開けて出入りしているだろう!」

「私は出てませんよう」

眠そうに言いながら、レイチエルはアイマスクを付けなおして首まで羽毛布団に潜り込んだ。

牢の中では大量の木箱が乱雑に積み重なって山になっていたのが、綺麗に積み直されてスペースが改善されている。それはいい。レイチエルが暇にあかせて片付け直したのかもしれない。だが。

「貴様、この間までクッションで寝ていたよな！？　その天蓋付きのベッドはどこから出てきた！？」

「ん……前からありましたよお」

「じゃあ起毛の絨毯とフットマン付きのリクライニングソファは！　煮炊きもできる豆炭ストーブは！？　なにより窓際のライティングデスクはそもそも扉から入るサイズじゃないだろう！？　どうやって持ち込んだ！？」

「んん……うるさいなあ……元からありましたってば」

「嘘つくんじゃないっ！！」

よほど眠いのかマスクの上から目をこするレイチエルが、ベッドの外にぶら下がる紐を引いた。シャーッと滑車が走る音がして、鉄格子の内側にスルスルと緞帳が下がる。

緞帳には一言大書されていた。

《営業時間外》

「……………ええー……………」

エリオットの執務室に十人近い少年たちが集まっていた。

サイクスやジョージみたいな有力貴族の子弟が揃った彼らは、エリオットの取り巻き兼マーガレット嬢親衛隊だ。いつもサイクスやジョージばかり発言しているけれど、実は金魚の糞よろしく毎日何人かはエリオットについて廻っている。それが今日は用事の有る無し関係なく全員召集された。

イベントでもなければ全員集合は珍しいけれど、なにしろ今起きている事態は舞踏会どころじゃない。

上座でエリオットが苦虫を噛み潰したような顔で宣言した。

「断罪した筈のレイチェル・ファーガソンがやりたい放題だ。前より酷い。なんとかやり込める手段はないか、議論したい」

堂々と情けない事を言う王子様にツツこめる常識人はここにいない。

エリオットが厳しい顔で腹心を振り返った。

「そもそもジョージ。お前が公爵家を押さえると断言した筈ではなかったか！？ あの牢内の有り様は何だ！」

「そ、それが……我が家の内部で、あのような準備をしていた様子が無かったのです、殿下。家の者も特に仕事ぶりのおかしい者はおりませんでしたし」

机の上の秀才は、街に拠点を持っているという発想が出てこない。牢番はなんて言っているんだ？ アイツ職務怠慢だろう」

今日は同行していなかったサイクスがジョージに質問した。

「それがな……あの男は他にも仕事はあるので巡回の時ぐらいしか牢にいない。今日来てみたら室内が模様替えされていて驚いたそうだ」

「はん、間抜けな奴だ」

牢番も脳筋のコイツにだけは言われたく無いだろう。

「隙をつくのはあの女の得意とする所だからな！ ……クソツ、レイチェルめ……！」

エリオットが鬼の形相で机を叩く。

「普通、貴族令嬢が牢屋にぶち込まれて居直るなんて考えられるか！？ 二、三日放り込んでおけば泣き叫んで謝ってくると思ったのに……あの黙って従うだけが取り柄のつまらん女が、まさかこう豹変するとは！？」

「確かに変わり過ぎですよー……」

ほとんどの人間が前のイメージしかない。馬脚を現したとか言うレベルじゃない令嬢の変わり具合に、中には女性不信気味の者もい

る。

「俺は虐げられるマーガレットを救うために元凶のアイツを社交界から追放したのに！　それがなんで寝ても覚めてもレイチエルレイチエル……今ではアイツが次は何をしでかすのかと思うと夜も寝られん！　四六時中アイツの顔が脳裏にこびりついて離れんのだ！」

幾分職業病っぽくなってきた王子に向かって、したり顔のサイクスがウインクしながら指を鳴らしてキザなポーズをとる。

「殿下、ソイツは……恋ってヤツですよ」

顔面に花瓶を投げつけられて呻くサイクスをほっておいて、エリオットは手下たちに向き直った。

「なんでもいい、何かヤツをギャフンと言わせる策はないか」

もう今の段階で失敗がきまってそんな王子の言葉に、少年たちは顔を見合わせた。

「煙でいぶしたら？」

「すでにやられた」

「臭い物を持ち込んでやるとか」

「すでにやられた」

「他人を巻き込んで嫌がらせをしてやるとか」

「すでにやられた」

「悪評を広げてやるとか」

「すでにやられた」

エリオットがギロリと少年たちをねめつけた。

「貴様ら……俺を馬鹿にしに来たのか！？」

「いいええっ！？　まさか何でもかんでも失敗しているとは思わず

……」

めっそも無いと首を振る彼らは気が付かない。否定の言葉がエリオットに追い打ちをかけているなんて。

そんな彼らを一人の男がたしなめた。

「いいかおまえら、殿下が失敗したんじゃない」

傷心の王子様を守るように横に立ったジョージが、彼らの言葉を

否定した。

「向こうにしてやられたただけだ」

「いちいち訂正するなっ！」

尻を蹴られたジョージが顔面から床に突っこんで転げまわった。

「しかし、そもそもの話ですが」

伯爵令息が手を上げた。

「ファーガソン様、牢に入っただけでいぶん性格が変わったように思います。事前の予測が外れているのも致し方ないのでは？」

「あつ、それは言ってる」

王子の斜め後ろを黙ってついてくるお人形さんみたいな令嬢だったのが、牢内だけとはいえはっちゃけ過ぎなイカレた女になっている。

会議の場が一気に賑やかになった。提案より分析の方が楽だ。

「実は替え玉で、本物はすでに王子に殺されているとか」

「それだったら、なんで今俺たちがこうして会議をしているんだ！？」

「実は影武者で、本物は高飛びしているとか」

「偽者の方がイかれててキャラが濃いつてなんだよ……」

話が作戦会議から令嬢の真贋に移りそうになって来た中で。子爵家の跡取り息子が手を上げた。

「本物かどうかは置いといてさ。それより気になるのが……なんていうか、レイチェル嬢がなんだか前より色っぽくなってきたくないか？」

「言ってるっ！」

下っ端たちが一斉に頷いた。

「！」

呆れて脱線する会議を見ていたエリオットも、実は前からそんな気がしていた。

髪型も前と変わらず、メイクもほとんどしてないと特に変化はな

いの……表情がよく変わり、いつでもラフな室内着を着ているだけでグツと妖艶な雰囲気が増していた。

少年たちが興奮ぎみに話し合う。

「なんというか、ちょっとしたしぐさに色気が滲むというか……」

「そうそう！ 表情が豊かになったせいかな？ こう、白黒のスケッチ画に色が付いたような華やかさというか……」

思春期男子らしい会話が続く……のだけれど。

「けどあんなに変わるってことは……よっぽど殿下の婚約者が辛かったのかな」

「ああ……婚約が破棄になった途端に明るくなったもんな……」

「許嫁の縛りが無くなったら活き活きしているよなあ……」

話がまた変な方向へ曲がり始めた。気の毒そうに囁き合い、チラツと眉をひそめて上司を伺う手下たち。

「貴様ら、どっちの味方なんだ！？」

額に血管を浮かべたエリオットが怒鳴り付けると、一同言葉もなく首をすくめる。

「アイツの変身は明るくなったとかいうレベルじゃないだろうが！ むしろ蛇のような正体を今まで巧妙に隠していたとみるべきだ」
エリオットが左右を見回した。

「まったく貴様ら、今さらレイチェルの何にたぶらかされているんだ」

「はっ、すいません……」

「アイツが明るくなつたとか言うのはどうでもいい！ レイチェルを見ていて何か気づいたことは無いのか？」

一番接触しているのはアンタだろ、なんていうツツコミは王子様には入れられない。皆が思い思いに考え込んでいると、侯爵家の令息が手を上げた。

「一つ気になることが」

「なんだ？ 言ってみろ！」

「はっ」

少年は皆の顔を確認するように眺めまわした。

「レイチエル嬢……実は結構、スタイルが良くないか？」

一瞬黙り込む一同。しかし対策会議の雰囲気は確実に、友人旅行の消灯後に切り替わった。

「……いやでも……ファーガソン嬢は元々あれぐらいのプロポーションじゃなかったか？」

沈黙に耐え切れなくなった一人がそつと言えば、問題提起した侯爵家令息が首を振る。

「淑女が公の場に出るときは、普通はコルセットをしているのは知っているであろう。レイチエル嬢も当然そうだが、今は牢屋をプライベート空間と見立てて室内着しか着ていない。つまり、今レイチエル嬢はコルセットを……していない」

そこだけ声を潜めた侯爵家のボンボンの言葉は、最低音量に関わらず最大の衝撃で列席者を揺さぶった。顔見知りの美人令嬢の下着事情とか……思春期男子の考えうる最大のリアルなエロスのツボである。

伯爵家の令息が鼻を押さえる。

「なにそれ、エロい……！」

「これぐらいで何を言っている、問題はそこからだ！ レイチエル嬢は今、私室にいるつもりで最大限に油断した服装をしている。そこを前提条件として、いいな？」

自分たちしかいない部屋なのに思わず顔を寄せあった少年たちは、お互いの顔を見合わせあった後、こくりと頷いた。

「つまりなんのメイクアップもしないで、あのスタイルなんだ！ わかるか！？ ウエストをコルセットで締め付けてもおらず、胸を寄せてあげてもいない。人に見せるつもりが無いんだからあの忌まわしき偽装パッドも入れてはいないだろう！ 彼女はボディメイクをしないで、あのボンツ、キュツ、ボンのエス字ラインをキープしている！」

「なんてこつた!？」

卓を囲む皆にどよめきが走る。世紀の大発見に再び顔色を無くす少年たち。今判明した衝撃の事実について、彼らは隣席の同志と早口に囁き合った。

いつの間にか引き込まれていたエリオットも呆然と呟いた。

「なんとという明快な推理だ……さすが代々学者を輩出するボインスキー家の嫡男!」

「殿下、うちの家名はボランスキーです」

「いや、いやいや待て待て!」

この話題に一人乗り切れなかった男、ジョージ・ファーガソンが感動と興奮の渦に水を差した。

「貴公らまさか、スタイルがいいからとマーガレットから姉上に乗リ換えるつもりではないだろうな!？」

一瞬で現実に取り戻されたエリオットその他は慌てて否定する。

「いや待て、それとこれとは別問題だ。俺は別にスタイルでマーガレットを支持するわけではない! もつとこう、精神的なつながりというか、癒しというか……」

サイクスも頷く。

「うむ、その通りだ。俺は別にマーガレット嬢にスタイルは求めていない。彼女のストレート、というか寸胴、というか、その、なんだ、スレンダー……ではないな……まあ、現実的な体型もそれはそれでありだと思う」

「いや、俺は身体じゃなくて心の問題をだな……」

どこか話の流れを曲解したサイクスの力強い「それじゃねえよ」理論に、エリオットがボソボソと文句をつけた時……。

「ファーガソン殿。確かに愛しのマーガレット殿は理想的な体型という点では貴殿の姉上には劣るだろう。しかしだな」

「おお、言ってやれボインスキー!」

「ボランスキーです」

さきほどあれだけレイチエルのボディを賛美したボランスキーが立ち上がった。

彼は拳に力を込めて力説する。

「元庶民だけあってマーガレット殿は確かに身体を“作って”いない。服の上からでも判るほど寸胴で目立たぬくびれ、無くはないけど大きくもない胸、太くもないけどスラリとは言えない手足」

「え？ それ貶してんじゃねえの？」

「しっ、黙ってるサイクス」

「だがしかし！ そこがいいのです！ それがいいのです！ 生まれてからの貴族令嬢は美しく見せる為には身体をむりやり絞り上げ、時には見た目をごまかし形ばかり整える。私は言いたい。それでいいのでしょうか、と！？」

伯爵家令息が語気荒く反論する。

「しかし貴殿、さきほどあれほどレイチエル嬢を褒めていたではありませんか！」

侯爵家令息はその反論に、むしろ“我が意を得たり”と頷いた。

「レイチエル嬢とマーガレット殿に共通する点は何でしょうか？」

「共通点？」

高位貴族の令嬢で当たり前に王子の許嫁で、華はなかったがプロポーション抜群の美人。

庶民からたまたま貴族の末席に転がり込んだ、天真爛漫で天然の魅力にあふれた幼児体型オコサマな可愛い美少女。

見た目も性格も体型も違い過ぎる二人を比べて、見当たらない共通点に頭を悩ませる人々に。ボランスキーは神託の如く重々しく宣言した。

「二人とも自然であることです。例え全てを脱ぎ捨てても、彼女たちのスタイルは変わらないでしょう。神の与えたもうた人間の身体は、無理やり締め付けたり化粧でごまかしたりする物ではないのです！ そう、私は言いたい。女性の美とはナチュラルであれ、と！」

「おおおおおおおおお！！！」

エリオットの招集した対策会議は“ナチュラリスト宣言”を採択して盛況のうちに幕を閉じた。

参加した人々は口々に「コルセット廃止の流れを作るべきだ」「詐欺メイク禁止を上奏しよう」などと興奮しながらエリオットの執務室を後にした。

エリオットも胸のつかえが取れた思いで上機嫌に書類を整理する。

「うん、今日の会議は実に有意義であつたな。これで問題は解決し……問題？」

ふとひっかかったエリオットは額に手を当て、考え込んだ。

「……今日の会議って、最初の議題なんだっけ？」

12・令嬢は奉仕活動をする

サイクスが歩いていると、向こうから神父に連れられた小さな子供たちがぞろぞろやってきた。

「おにいちゃん、こんにちわ！」

「おう、こんにちわ！」

「おじちゃん、こんちゃ！」

「ぶっ殺すぞガキヤ」

行列と行き過ぎて、はたと考えた。

あれ？　なんで孤児院の子供が城内を歩いてんの？

振り返ってみると、子供たちはぞろぞろと一つの扉へ入っていくところだった。すでにお馴染みの、レイチエルが入っている地下牢への扉。

「……おい、またなんか始まったぞ」

サイクスの通報を受けて、またもや緊急出勤させられたエリオット王子たちは急いで地下牢への階段を駆け下りた。そこには……

「むかーしむかし、ある所に、花の王国と呼ばれる小さな国がありました」

鉄格子を挟んで地べたに座る子供たちへ、レイチエルが絵本の読み聞かせを行っていた。

薄暗く日の光が差し込む石造りの無機質な部屋の中で。木箱の山

と大峡谷の壁画に挟まれ絵本を開く少女と、ワクワクしながら一心に少女の手元を見つめる数十人の幼児たち。そしてあいだに鉄格子。

「なんなんだ、この空間!？」

思わず叫んだエリオットを子供たちが振り返り、しかめっ面で唇に指を当てて“静かに!”というゼスチャーをする。

「……俺が悪いのか？」

納得がいかない顔でエリオットが横のジョージに聞くが、ジョージにしたってそんな事を聞かれても答えようがない。

「なんか、奴隷商の倉庫みたいだな」

頭に浮かんだ発想を呑気に口に出すサイクスをエリオットが睨んだ。その発想で言ったら役どころはエリオットが奴隷商でサイクスは管理係兼用心棒、ジョージが番頭と言った所だろうか。

それではエリオットが悪でレイチェルが悲劇の主人公になってしまふ。そんなろくでもないストーリーは認められない。

とはいえさっぱり状況が判らないシチュエーションに、自分たちだけでは答えが出てこない。中断させられた子供たちのブーイングを背に浴びながら、ジョージがレイチェルに聞いてみた。

「……姉上、これはいったいどういう状況なのですか？」

嫌そうに聞いてくる愚弟に、朗らかに答える見た目聖女なレイチェル。

「まあ、貴方に聞かれるとは思わなかったわ。いや私ね、毎週慈善奉仕で孤児院を廻っていたのよ？でも今はこんな身の上だから、中止せざるを得なかったんだけど……嬉しいわよね、子供たちが会いたいって面会に来てくれたの」

言外に『おまえ姉の何を見てたの!？』という非難と『王子のせいで慈善活動がストップしたんだぞ!？』という非難と『いたいけな子供たちに気を使わせやがって!』という非難がコンボで含まれている器用な返答に、王子たちはうつ、と詰まる。

そんな彼らを置いて、レイチエルは慈母の笑みで子供たちへ向き直り、絵本の続きを読み始めた。

「花の王国には一人の王子様がいました。

金髪の美しい王子様で、女の子はみんな王子様に夢中です。

でも、王子様は見た目はカッコいいのですが……たいそうおバカで、どうしようもない女好きだったのです。

家来にいくら言われても、お勉強もお仕事もしない王子様。

市民にバカにされても、ふらふらふら浮気ばかりの王子様。かわいい女の子を追いかけてばかりで毎日遊んでばかりです。

仕事をしない王子様。家来はみんな大弱り。

家来も市民も冷たい眼で見ているのに、色ボケ王子様は判りません。

怒った市民はとうとう王子様を捕まえました。

みなさんでお説教をしました。が、それでも懲りない王子様。

何が悪いのか判らない王子様を、とうとう家来も見放しました。

さあ、王子様の運命は？」

レイチエルの問いかけに、目をキラキラさせて聞いていた子供たちが一斉に。

「王子様は首ちょんぱっ！　王子様は首ちょんぱっ！」

子供たちの楽し気な合唱に、レイチエルもにつこり笑って。

「そうです、王子様は広場に引きずり出されて首ちょんぱ！　ダメな王子様はギロチンで死刑になりました！」

「わあああああ！」

「ちよつと待てえええええっ！？」

エリオットは鉄格子の向こうとこつちでキョトンとしているレイチエルと子供たちの間に割り込んだ。

「お前はこういう本を読み聞かせているんだ！？」

「なにかおかしかったですか？」

「なんでおかしいかと思えるんだ！？　陰惨な内容すぎるだろう

！　しかもあてこするような内容の本をよくもまあ探してきやがって……」

「あら」

レイチエルは曇りのない笑顔でほほ笑んだ。

「殿下はなにか、身につまされる覚えがあるんですか？」

「くっ……！」

明らかに判ってやっているレイチエルの張り付いた笑顔と、よく判っていない子供たちの訝し気な顔。事情を理解していない子供たちの前で罵倒するわけにもいかず、わなわな震える指を鉄格子越しにレイチエルに突きつける。

「俺の事はどうでもいい！　この本どう考えても教育に悪いだろう！　もっとマシな本は無かったのか！？」

「あら、よくある物語の本を読んでいただけじゃないですか」

「よくある内容か！？　浮気だのギロチンだの、子供に読ませる内容じゃないだろう！」

レイチエルが手元の本をひっくり返した。どう見ても子供向けの絵本だ。

「別に普通じゃないですか。勧善懲悪を目的にしたフィクションですよ？　子供に読み聞かせるにはちょうどいい題材ですよ」

「チヨイスに悪意がある！　どう考えても俺にあてつけてるだろう！」

カンカンのエリオットに対して、のらりくらりとへらへら笑うレイチエル。

「まあ殿下、浮気をされていましたの？　それはギロチンものですねえ」

「貴様、よくもぬけぬけと……そもそもお前がマーガレットに嫌がらせをしたからだろうが！　逆恨みを恥じろ、魔女め！」

頭に血が上って最後の方は大声になってしまった。レイチエルを怒鳴り付けたエリオットがハッと気が付くと、後ろで子供たちが囁いている。

「何あのお兄ちゃん、怒鳴ってばつかで嫌な感じ」

「御本の王子様に似てるよね」

「あー、そういえばこのお兄ちゃんも金髪だよ？」

「浮気して遊んでばつかなの？」

「やーい首ちょんぱ」

多分聞こえよがしなんていう悪意もないのだろう。思ったことを言っているだけな分だけ、余計にグサグサ突き刺さる。

「くそう！？ 貴様ら、俺はちゃんと仕事しているからな！？ 遊び歩いていないからな！？」

「子供に何を言い訳してるんですか……」

「言い訳じゃない！ ホントだぞ！？」

「お兄ちゃん、焦ってる」

「お兄ちゃんも首ちょんぱ？」

完全にアウエーな空気に押されて、エリオットたちは後ずさる。

まさか子供たちの方とやり合うわけにもいかない。

絵本を楽しんだ子供たちはレイチエルを取り囲み、楽しそうにはしゃいで大きなビسケットを受け取っている。なんで牢に入っている方が差し入れを渡しているんだろう、とエリオットはぼんやり考えた。

何を言うにも子供たちの前では分が悪い。エリオットたちは出なおす事にした。

正義の味方は自分たちなのだ。それが子供たちを蹴散らして、目の前でレイチエルを締め上げるわけにもいかない。

苛立ちを込めて床を踏みつけながら出て行こうとしたエリオットたちへ、レイチエルが絵本を差し出した。

「殿下たちもこういう本を普段から読んで、読み聞かせの練習をさ

れるといいですよ?」

言外に奉仕活動ぐらいしたら? という皮肉をひしひし感じるが、もう幼児の視線に晒されたくないエリオットは絵本をひったくってさつさと地下牢から出て行った。

執務室へ向かいながら、エリオットはしきりに悪態をつく。

「くそつ、レイチエルめ! 毎度毎度厭味つたらしい事ばかりしやがって! 俺が何も慈善をしていないかのように子供たちの前である事ない事……」

「子供があんなにいと怒鳴れないですよねえ……殿下“ええかつこしい”ですもんね」

「うるさいっ!」

エリオットがサイクスを殴る横で、ジョージが絵本を眺めた。

「こんな童話聞いたことが無いな……どこの国の物語なんだ?」

ページをパララツと早送りし、奥付を見た。

“ E王子へ愛をこめて 作・絵 R・F ”

「これ、姉上のお手製だ……」

「畜生、何がよくある物語だ!? 思いっきり俺への当てこすりじゃないか!」

13 少女は令嬢に面会する

なんでこんなところに、という来客にはもう慣れてしまった牢番だった……今日のはまた毛色が違うな、と彼は思った。

赤毛のロングヘアをツインテールにまとめた可愛らしい少女が、地下牢へ面会をしにやってきたのだ。

王子だの貴族のボンボンだの出前の兄ちゃんだのが今まで来たけど、女の子は初めてだ。

……こう並べてみると、むしろ珍しく無いのかもしれないが……。「お嬢ちゃん、ここは無関係な人は立ち入り禁止でね……」

どうせ押し入るんだろうなあ……と思いつつも言いかける牢番を少女が手で制した。

「わかっています！ レイチェルさんにマーガレット・パウソンが面会に来たとお伝えください！」

「やっぱり聞いてねえよ……」

「なんですか？ ほら、早く！」

なんか最近若いのに顎で使われてばかりだ、なんてことを考えながら牢番は仕方なく地下牢へ降りる。

少女は意気揚々と後ろをついてくる。

「……お嬢ちゃん、『お伝えください』って言葉の意味、わかってる？」

「わかってますよ？ さあ、早く案内してください！」

「もうやだ、こんなのばかり……」

地下牢の前まで来ると、マーガレットと名乗る少女は鉄格子へ駆け寄った。

「レイチェルさん、マーガレットです！ お久しぶりです！」

誰だかよくわからん女の子はめっちゃ張り切った大声で朝の御挨拶を叫んでいるが、牢番はそれだけで冷や冷やして来た。

理由は何故か知らないが、最近牢の住人は朝が遅いのだ。現に今もベッドに入ったままだ。それを叩き起こすって……。

そして短い付き合いの中で思ったが、あのトンデモお嬢は多分自分のペースを乱されるのを嫌う（いつも主導権を握っているので、乱されるのが想像つかないが）。このマイペースな女に無理やり起こされてどうなるか……。

知らず知らず牢番は鉄格子から距離を取った。

牢番の恐怖をよそに、レイチエルはわりと穏当に起きだした。

「むう？」

深くかぶっていた羽毛布団から頭を出し、グシグシと目をこする。上半身を起こしてぼんやりと自分を呼ぶ少女を見た。

「レイチエルさん！ 私です、マーガレットです！」

「？」

言われてもまだしばらくはボーっとした顔をしていたレイチエルだったが、目の焦点が合うとカツと見開いてベッドから降り立った。「もう、やっと目が覚めましたか！？ ねぼすけさんなんだから！」赤毛の女がテンション高く叫びながら鉄格子にしがみついて揺さぶると、レイチエルもそこに駆け寄った。

それを見て「あ、友達なんなか」と思った牢番は、多分誰からも非難されないと思う。

牢番がそう思って安堵した瞬間だった。

「グフォッ！？」

鉄格子を器用にすり抜けたレイチェルの飛び膝打ちが、赤髪のツインテールの鳩尾にめり込んだのは。

「ハンギヤーツ!？」

面会の少女は訳の分からない雄叫びを上げて吹っ飛んだ。

床をゴロゴロ転がった赤毛娘が痛みにもたうち回る。あちこちぶつけても気にせず腹を抱えているからには、相当に膝の一撃が効いたみたいだ。

「な……なに、を……」

息も絶え絶えに少女が呟いた問いかけに、レイチェルがハツとした。

「あ、すみません。つついー発入れなくなる良いおなかをしていたので……」

「何よそれ!？」

歯を食いしばってやつと身を起こした少女に、レイチェルが鼻息荒く解説する。

「いや、ホントですよ? あなた、凄いイイ感じなんです! こう、思わず殴りたくなる頼ったとか、叩いてほしいと言わんばかりのお尻とか。もう全体的に私をぶつてと言わんばかりのオーラが湧きだしているんです! 私、直接手は出さないようにもう十年以上気を付けていたんですけど……つつい誘惑に負けて膝を入れてしまいました!」

赤毛娘が牢番を手招きする。

「な、なんだ?」

おそろおそろ近寄った牢番の襟首を少女がねじり上げた。

「ちよつと、アイツなんなの!？」 出会いがしらに“アイサツ”か

ますとか、あれホントに貴族のお嬢様！？ スラムの“本職”だつてあんな滑らかにできないわよ！？」

「そんな事を俺に言われても……」

赤毛の少女は下町育ちなのか、最初のキャピキャピしたテンションが嘘のようにキツイ語調で牢番を締め上げて来た。

「あれ、ホントにレイチエル・ファーガソンなのよね！？ 公爵家令嬢の！？」

「俺だつてよくは知らねえけど、そうなんじゃねえのか」

ボソボソ話していると、まだ興奮しているレイチエルが牢の中からしきりに少女を褒める。

「見れば見るほどあなた凄い！ 十年、いや二十年に一人の逸材です！ 間違いない、あなたには誰もかなわないサンドバッグの才能があるわ！」

「サンドバッグの才能って何！？」

褒め方がおかしいが。

鉄格子にしがみつくとレイチエルが少女にかわいくお願いした。

「十発だけでいい、お願い、往復ビンタさせて！」

「一発だつて嫌よ！」

お願いの内容がまたおかしいが。

「じゃあ五発！ 五発だけでいいから！」

「人の話を聞けえ！？」

「いや、お前が言うなよ」

そんなやり取りをしていて……生まれたての小鹿みたいにプルプル震えながらやっと立ち上がった少女の顔に、ふとレイチエルは首を傾げた。

「ところであなた……どこかでお会いしましたっけ？」

赤毛娘がまた牢番を手招きする。

「な、なんだよ……」

嫌そうに近寄った牢番の襟首を少女がギリギリとねじり上げた。

「な・ん・な・の・あの女は！？ あたしを知らないってどういう事よ！？」

「いや、俺は知らんがな……」

「それを置いといたって……いや、置いといてこそおかしいでしょ！？ 初対面と思ってる相手に言葉も交わさないうちからいきなり腹パン食わせるとか、頭の中どうなってるのよ！？」

「だから俺に言うなよ……」

レイチエルはレイチエルで、牢の中から猫なで声で買収にかかってきた。

「ね〜え〜、欲しい物買ってあげるからあ？ ね、ちょっと殴らせて？」

「誰が殴らせるか！」

「そうよね……やっぱりこう、スナップを聞かせて叩かれる方がいいわよね？ 頬つぺたの柔らかい肉に食い込む感覚が楽しめるもの……」

「あなた、わかってるう」
「やり方の好みなんか知るかつーの！ なんでこんなホンモノが今まで野放しだったのよ……」

やっと足腰がしつかりしてきた赤毛娘がレイチエルをビシッと指さす。

「本当に忘れてるんだか虚勢を張ってるんだか知らないけれど、あなたこのままじゃお先真っ暗なんだからね！ エリオット様に謝るんなら今のうちよ？ 私はそれを言いに来ただけなの！」

鉄格子の向こうでレイチエルがまた首を傾げた。

「謝るって……先にサンドバッグを使っちゃってごめんなさい？」

「誰か！ 自警団を呼んで！？ ヤバいのがいるわ！」

「いや、嬢ちゃんはまだ牢屋に入っているし」

充分に鉄格子から距離を取りながら、少女はレイチエルに向かって叫んだ。

「ふんっ、あんたがそういう態度ならもうそれでいいわ！ エリオット様のお妃になるこの私を甘く見ない事ね！？ あとから後悔し

ても遅いわよ！」

足音高く石段を上がって出ていく彼女を、レイチエルと牢番は見送った。

「結局のところ、彼女は誰だったのかしら？」

「お妃になるとか言ってたから、王子様の関係者じゃねえのか？」

「どこかで見たような気はするんだけどなあ……名前もなんだか聞いたことがあるような」

レイチエルはちよつと考えたが思い出せないらしく、すぐに思考が他の事に切り替わったようだった。赤毛の少女が消えた方角を眺める。

「ああ、そんな事より叩いてみたい……なんか懐かしい感覚に火が点いちゃった。この際、殿下でもいいから叩かせてくれないかしら」

「この際の相手が大物過ぎねえか……？」

「あらそう？ 大したことないわよ。昔、池に沈めかけたし」

「沈めかけたって……王子を！？」

驚いて聞き返したけど返事が無い。

牢番が振り返ると、レイチエルはベッドに戻ってアイマスクを付けているところだった。

「起きたばつかで、また寝るのか？」

「ええ。今の感触を忘れないうちに夢で見ようかと」

「よつぽど気に入ったんだな……誰だか知らねえが、あの姉ちゃんも災難だな」

エリオット王子の執務室に、王子最愛の人にして取り巻きたちも思いを捧げるマーガレットがやってきた。やってくるなりくしゃみをする。

「どうしたマーガレット。風邪かい？」

「いえ、そうじゃないと思うんですけど……なんか悪寒が……」

「そうか、奇遇だな……何故か俺もさつきから……」

14・公爵は状況に困惑する

娘が牢屋に押し込まれているとはいえ、ファーガソン公爵家は相変わらず忙しい。

通常身内に犯罪者が出れば、貴族と言えど当然あらゆる活動は自粛・謹慎すべきところ。ただレイチェルの場合は王子による一方的な断罪があっただけで、公爵家はそんな罪を認めていない。まだ最終の国王裁定が下ったわけじゃないので、むしろ冤罪を主張するためにバンバン打って出ている。

嫡男のジョージは向こう側だけでも、今現在の当主は父親のダンである。息子が何と言おうと引き下がるつもりはなかった。

そんなわけで引きも切らず報告・来客の雨あられの中。

たまたま途切れた一瞬の空白を突くように、公爵の執務室へレイチェルの侍女ソフィアが伺候した。

「失礼致します、旦那様」

いつかの時みたい、二人ついて来たメイドが廊下で控えている。ソフィア一人が進み出て、指導係のお手本のように綺麗なお辞儀で頭を下げた。

「お嬢様の件なのですが」

「おお、レイチェルの近況か」

公爵はハンコを押す手を休めて娘の部下を見た……正確には妻の部下の筈だけど、娘に付いている使用人たちは忠誠心の向き処がどうにも個人に向いているように思えて仕方がない。

公爵の内心の葛藤を知ってか知らずか、ソフィアはいつも通りに平静な顔で頷いた。

「はい」

「うむ。どんな様子だ」

「報告によりますと、お嬢様はお元気です」

報告を終わって一礼する娘の侍女。

彼女のつむじを、公爵はたっぷり十秒ほど眺めた。

「……それだけか？」

待ってもこれ以上出てこない事を理解した公爵の拍子抜けした声に、ソフィアは生真面目に頷いた。

「はい。要約すれば」

「いや、いやいや！ お前、それは要約し過ぎだろう。それでは何にも判らん」

「お嬢様がお元気なのはわかるかと思いますが」

「それだけな！？ 他は全くだな！？ 詳細が上がっているならそっちを出せ」

「はあ……では、のちほど届けさせます」

どこか納得のいかない様子のソフィアは後ろを振り返った。

「リサ、監視係ウォッチャーからの日報を旦那様の元へ」

「はっ」

「メイア、主治医のモントン先生を至急お呼びしなさい」

「はっ……ソフィア様、お呼びするのは心臓外科の大先生ですか？ 心療内科の若先生ですか？」

「何を馬鹿な事を言っているの！？ 旦那様が、お嬢様の活動記録をお読みになるのですよ？」

両方呼ぶに決まっているでしょう。常識で考えなさい」
「はっ」

メイドに指示を出し終わったソフィアがこちらに向き直って一礼した。

「旦那様、日報をお読みになるときは脈拍が安定している時を選んで、ベッドに横になってからお読みください」

侍女の言葉が耳から耳へと駆け抜けていく中、公爵は一つの事が

気になった。

……常識って、なんだろう？

「待て。レイチェルが無事に元気に過ごしているのならそれでいい……今、私が倒れるわけにはいかん……」

……アレが何をしてどんな結果を引き起こしたのか、リアルタイムで起きている今は聞かない方が精神の健康上いいのは間違いない。そう考えて、公爵はこの話題を打ち切った。

優先順位を考えた結果である。

決してパンドラの箱を開けるのを先延ばしにしたわけじゃない。

……ホントだよ？

咳ばらいを一つしてモヤモヤを振り切ると、公爵は今頭を悩ましている懸案事項を娘の侍女に相談してみることにした。

「あー、それよりもだな……そろそろ陛下たちも視察旅行からお戻りになられる。そうなれば殿下と御前で白黒つけることになるだろう。今のうちに対策を練らなければならないが……」

だから何か意見はないか？ と続けようとした公爵の言葉の前に、ソフィアの報告が挟まった。

「両陛下でしたら、しばらくお戻りになれません」

「……は？」

視察の日程も知らない筈の一侍女が、いきなり何を言い出すのか？ 家臣が何を言っているのかわからない公爵に、ソフィアが淡々と説明した。

「お嬢様がエリオット殿下と婚約されたのは王妃様の強い希望によるものでした。ですので婚約破棄から現在までの経緯をまとめた物を、両陛下が視察中に立ち寄るナウマン伯爵家中の伝手を頼って手

元にお届けしました」

「……いつの間に……」

ソフィアは日数どころか、経由地も押さえていた。さらに連絡手段まで。何それ怖い。

「あわせて、『猫は楽しく遊んでいる』と書いたメモを付けておきましたところ、御一行の旅足が伯爵領内のフラツカー温泉郷で停まって動いておりません。状況を整理して方針を決めるまで、都へ戻らないものと思われます」

そこまで言って無表情な侍女は何かを思いついて付け足した。

「もしくは、お嬢様のガス抜きが終わるまで巻き添えを恐れて足踏みしているか。ですね」

侍女の推測を公爵は笑った。ちよつと空笑い気味で。

「い、いや……いくらレイチエルがやらかしても陛下たちに延焼するなんてあるわけ無い。巻き添えを恐れるなどと、そんな馬鹿な、ははは……」

「いえ、しかし現実に大公殿下が……失礼、なんでもありません」

「大公殿下が？ 大公殿下が何！？ ヴィバルディ大公の事か！？」

「気にしないで下さい。終わった事ですから」

「メチャクチャ気になる！？ レイチエルは何をしたんだ！？」

「大丈夫です。大したことではございません」

「ホントに大丈夫なのか！？ レイチエルはいったい何をした！？」

「私の口からは、ちよつと……」

「全然大丈夫じゃないじゃないか！？」

「ところで旦那様」

すでにパニツク寸前の公爵へ、何の脈絡もなくソフィアがパンフレットを差し出した。

「ご心労もたまっている所ですし、奥様と温泉旅行はいかがでしょ

うか？」

「誰のせいだと……今この状態でか！？」

「はい。温泉などに行っていると、たまたま湯治中にばったり両陛下と出会うということもあり得ます」

ソフィアが何気なく言った言葉にハツとする公爵。

「……現場から離れた所で善後策を協議してこいと言うのか？」

「たまたまです。たまたま」

侍女は表情の読めない顔で続ける。

「なにしろ、陛下たちの御一行がスケジュールを逸脱しているのをまだ王宮は知っておりません。今の時点で旦那様たちが同じ温泉郷へ出発しても、両陛下の一行と偶然出会うのは誰も予測できません」
テーブルの下で、娘の手はどこまで伸びているのだろう……公爵は今さらながら背筋が冷たくなる思いだった。

娘の成長が期待していない方へ著しい事案発生中。誰か助けて。

だけど娘のお膳立てで踊るには、まだ確認しておかなければならないことがある。

「……こちらの状況はどうするつもりだ？ 私たちがいなくなったらジョージが我が家の采配を握ることになるぞ？」

公爵夫妻がいなければ、当然代理は嫡男であるジョージが行うことになる。そうなれば、レイチエルの支援に公爵家本体の助力は全く期待できなくなる。遠出を勧めるからには、やはりそこもレイチエルは考えているのだろう。

問われてもやはりソフィアは想定内なのか、慌てることもない。

「むしろ旦那様がない方が、都合がいいこともございます」

「と言うと？」

「旦那様と奥様がちよつと小旅行に出かけられても、短い期間なら代理を置かなくてもおかしくはございません。ご親族から代理が置かれず、お坊ちゃまはまだ未成年。となると家政を取り仕切るのは……」

公爵と侍女はお互いの瞳を見つめ合い……そしてぐりと首を回して壁際で空気になっていた執事を見た。視線の集まった執事が、心臓発作を起こしたような顔をして書類をぶちまけたが……気にしない、気にしない。

「……なるほど」

「はい。立場は使用人、けれど旦那様から全権を委任されているとあらば……」

「私の決めた方針は逸脱できないし、ジョージが命令も出来ないわけだ」

「お坊ちやまが何を言おうと、『ご指示に反します』『旦那様に確認を取ってください』で済ませることができます。そしてお坊ちやまでは旅行中の旦那様にクレームを入れることも難しい」

「うむ、御役所対応とはこうあるべきだな」

万事解決したみたいに笑いあう主従に、泣きそうな執事が声をかける。

「あの、本当に私が一人で応対するので……？」

「心配するなジョナサン。屋敷の中にはソフィアもいるし、ジョージがあんまり煩かったらマーサに言って部屋へ放り込ませればいい」
恐持てのメイド長は昔ジョージの乳母をしていた。大きくなるうがジョージの首根っこを掴まえるぐらいわけではない。

酷いことになったと肩を落とす執事を置いておいて、急に気が軽くなった公爵はウキウキと妻を呼びに出て行った。

「イセリア、すぐに温泉旅行に出かけるぞ！」

「まあダン、いきなりどうしたの！？ 今それどころじゃないですよに！」

「それどころじゃないから出かけるんだ！」

「？」

床にぶちまけた書類を拾い集めながら、執事は侍女を恨みがましい目で見た。

「私が心労でポツクリ逝ったら、労災は申請できるんだろうな？」

「さあ？ 旦那様に確認を取ってください」

14・公爵は状況に困惑する（後書き）

むしろ執事が状況に困惑する。

15・令嬢は少女と親交を深める

マーガレットが牢の入口まで来てみると、牢番はおらず監視は無かった。

「牢番さーん？ 牢番さーん！」

呼んでもいない。

人が行き来する通路まで出て警備兵に確認したら、王宮の牢にはレイチエル一人しか入っていないので牢番がパートタイムとわかった。たまの巡回の時しか牢にはいないらしい。

「そうなんですかあ」

教えてくれた衛兵に丁寧な礼を言い、マーガレットは牢まで戻った。

「んー、鍵はついてないですねえ」

特に鍵もついていない鉄扉をよっこいせと押し開きながら、マーガレットは幸先のいい成り行きに思わずほくそ笑んだ。

「あの間抜けな牢番も気が利くわね！ ノーチェックでクソ女に嫌がらせし放題じゃない」

先日の初訪問でまさかの速攻を食らい、同席した牢番にはうっかり取り乱して地を見られてしまったけど……特に噂にもならないので、言いふらしはしなかったようだ。

「でもまあ、度重なれば牢を見に来たエリオット様やサイクスに喋るかもしれないし。いないに越したことは無いわよねえ」

ウキウキしながら地下牢へ降りる。

根性の女マーガレット、やられたらきっちりやり返します。

また執筆で夜更かしして寝坊したレイチエルは、ちょうどランチでポテトのパーティージュとビスケット、フルーツカクテルを賞味し終えた所だった。

階段を降りて来る来客ひまじがいるので牢番さんかと思ったら、先日一度来てくれたサンド・バッグさんだった。ずっと会いたいと思っていたので、訪ねて来てくれてとても嬉しい。

「まあ、いらつしゃいませミス・バッグ。いらして下さるのをお待ちしております！」

「はっ！？ 歓迎されるのはいいけど……バッグって、誰？」

赤毛の少女は訝し気に眉をひそめ、一応他にも人がいるのか後ろを確認する。

まるで他人と間違えられたみたいな言動に、レイチエルもおかしいなと首を傾げた。

「え？ 貴方ですよ、サンド・バッグさん」

「はあっ！？ 私のこと！？ なんなの、その名前は！」

「え？ だから貴方ですよ。世界一の殴られ系ボディの持ち主にして“美人過ぎるサンドバッグ”の呼び声も高いサンド・バッグさんでしょう？」

「あんたの妄想の中であたしどうなってるの！？ 牢屋に閉じ込められて現実と空想の境が判なくなっただの！？ 美人過ぎるサンドバッグっていったいどういう代物よ！？」

怒鳴りまくった可愛らしいツインテールの少女は、怒りの形相もものすごくレイチエルに向かってビシッと指さした。

「ちゃんと覚えなさいよ！ 私はマーガレット・ポワソン、ポワソン男爵家の長女よ！ あたしに嫌がらせを続けてエリオット様の寵愛を失ったあんたに代わり、次の王妃になる女よ！ どう？ わかった？ 自分の立場を理解した？ 悔しかったら喚いていいのよ？ 吠え面かいてわんわん泣いて見せなさいよ！」

今のところどう見ても、自分が吠え面かいて喚いて見えるマーガレットさん。

レイチエルは瞳を閉じて、ふむと考えた。

ちよつと考えると目を開けて、憤る赤毛の少女ににっこり笑う。

「まあ、そんなどうでもいい事はいったん置いて。とりあえず一発殴らせて下さる？」

「どうでもよくないわよ！？ あたしの名前よ！？ 王子様との婚約よ！？」

地団駄踏む令嬢に、どう説明しようかとレイチエルは迷い……ストレートに告げた。

「特に興味はないので」

「興味持てよ、このクソ貴族がよ！？ だから育ちのいい奴は嫌いなよ！」

「そんな事より、あなたの平手映えがするムツチリもち肌に興味津津なの！ 顎に一発当てたらすごい勢いで回りそうな細い首とか、フックを食らわせたなら音が鳴りそうな鳩尾とか、もう私は貴方にすごい興味があるわ！」

「だったら名前ぐらい覚えろやあ！？」

頭に血が上ってレイチエルに詰め寄ろうとしたマーガレットが一歩踏み出し……次の瞬間横へ跳ね飛んだ。ギリッギリの一瞬差で、マーガレットの足があった所に投げてあった投げ縄が牢の中へ引っ張られる。

「チッ！」

「あぶなっ！？ この野郎、サラッと罷仕掛けてやがる！」

「もうちよつとで捕まえられたのに……意外に感じがいいわね」

囚人が外の人間を捕まえようとする矛盾。

すっ転んだマーガレットがゆっくりと立ち上がり、膝のほこりを払った。

「ふ、ふふふふ……そうね。あたしはあんたを甘く見ていたようね……おバカなサド女と見せかけて、あたしを捕まえて人質にする

のを狙っていたってわけね？」

「いえ、そもそも叩いたりイイ声で啼かせてみたいので捕まえたいんですが」

無言の二人の間を、換気窓から吹き込んだつむじ風が通り過ぎて行った。

黙っていたマーガレットが肩を竦めてニヒルに笑う。

「……といいつつあたしを人質にして、交換条件にエリオット様に釈放や再婚約を要求するつもりなんでしょ？ わかっているんだから」

「いえ、牢には好きで入ってますし殿下と再婚約なんて悪夢もいい所なので希望しません。でも……そうですね、貴方を開放する交換条件なら、貴方の身柄を要求しましょうか」

「は？ え？」

「ですから。貴方も牢に入れてもらって私の好きにしていいいんなら捕まえた貴方を開放しようと言っているんです」

「……ちよつと待つて。あんたの理屈が判らない」

頭を悩ませるマーガレットを前に、レイチエルが鉄格子の中でため息をつく。

「まあ、そもそも捕獲に失敗したので交渉ができないんですが」

「……だよねえ！ そうよ、そもそもあたしは捕まっていんじゃない！ あー、焦ったあ！」

とホツとするマーガレットが次の瞬間飛び込み前転で宙を飛び、石畳をゴロゴロ転がった。マーガレットが消えた空間で投げ縄が虚しく宙を掴む。

「チッ！」

「ああああんた！ いい加減にしなさいよ！？」

レイチェルが、そう言えばとつぶやいた。

「サンドバグさんは何か用があったのでは？ 私も色々忙しい身なんで、そんなに付き合つてられないんですけど」

「あんたのせいで全部吹っ飛んだのよ！ 言う暇なかったのよ！？……だいたいあんた、牢屋の中で忙しいって何！？ シラミつぶし？ ネズミ捕り？ 公爵家のお嬢様が虫やネズミに悩まされるとか……ハハハ、笑っちゃうわね！ あたしもさんざん苦しんだのよ、イイとこのお嬢ちゃんがいい気味だわ！」

元平民、というか貧民出身で男爵家に庶子として拾われたマーガレットは、遥か高みにいる筈の公爵令嬢の零落がおかしくてたまらない。腹を抱えて爆笑していると、レイチェルがキョトンとしている。

「え？ 別にここには虫もネズミも出ませんけど？」

「は？」

「というか、持参した荷物の中に除虫香があるから出ないだけなのかしら」

「……出ないの？ こんな所で？」

レイチェルが凄じ可哀想なものを見る目でマーガレットを眺めた。

「ポワソン男爵家は……お出でになるのね？」

「そんな目で見るなあああ！ 昔の話よ！？ 今のおうちじゃないの！ 今はたまにしか出ないんだから！」

錯乱したように喚いたマーガレットが、ハッと重要な事に気が付いた。

「……あんた！ あたしの家名覚えてんじゃない！？ ふざけやがってえ！」

「さすがに聞いたばかりですしね」

レイチェルは悪びれず、誠実そうに微笑んだ。

「でもね、別に悪気はないんです。ほら、親しい友人はあだ名で呼

びたくなるじゃないですか……」

「あなた……」

マーガレットは腰をかめるとそこにあった牢番用の椅子を拾い……力いっぱいレイチエルに向かって投げつけた。当然鉄格子に阻まれて落ちるけど。

マーガレット

ポワソン男爵令嬢は天を仰いで絶叫する。

「悪気が無くてサンドバッグなんてあだ名をつけるかああッ！
！」

「まあ！ 私の誠意が通じなくて残念ですわ……」

「あなた一回脳みそ洗って、破れている所を医者に繕ってもらえ！」

「斬新なご意見、いたみ入りますわ。前向きに検討のうえ、善処させていただきます」

「治す気全くないのね！？」

理性が振り切れる寸前で、カバンの重さにマーガレットは自分の目的を思い出した。

「そうだったわ！ あなたのせいで、わざわざこんな所まで何しに来たんだったか忘れる所だったじゃない」

かわいい顔をニタリと歪め、マーガレットは担いできたカバンを下ろした。

「うふふふ、今日はね……地下牢で寂しくひどい食生活をしているレイチエルさんへ、いゝい物を差し入れに来たの」

マーガレットはカバンから出したタオルヘミントの香り袋を挟み、顔の下半分を覆った。くぐもった声でレイチエルに笑いかける。

「エリオット様にお金をもらってね、市場で新鮮な果物を仕入れてきたのよ。とっても栄養価が高くて健康にいいんだって」

マスクに続いて分厚い手袋を装着し、カバンの中から嚴重に密封された楕円形の物体を取り出す。

「特に熟したのを選んでもらったの。日の当たらない地下牢で保存食しか食べてないあんたの体にはきつと効くわよ」

マーガレットが小刀で包装を切り裂き、中身を取り出した。強烈な腐敗臭が部屋一帯に素早く広がる。匂いが続いて、黄灰色の棘だらけの物体が現れた。

「南国の果物で、ドリアンって言うんだって。ちょーつと匂いが強いけど、強い香りは熟している証拠だから。うふふ、新鮮な果物をたぐっぶり味わってね？」

マーガレットは持つて来たドリアンを、レイチエルには手が届かない牢番の机に置いた。

「そのままだと固い殻に包まれているから、牢番さんに割ってもらってね？ それまでどこか行かないように、ここに置いておくから」
そういうとマーガレットは、マスクの下でニヤニヤと嫌味な笑いを浮かべてレイチエルを見た。

エリオット様は屈服させようとするから、手ぬるい事をしてうまくいかないのだ。

とにかく徹底的な嫌がらせ。レイチエルが謝るかどうかなんて関係ない。

この女が苦しめばそれでいい。何も考えずに叩けば、結果的に降参するかもしれない。

そう考えながら目をやった公爵令嬢^{レイチエル}は、平然とドリアンを見ていた。

「うわー、懐かしいなあ。昔、海外視察に出た時に見ましたね」

興味深そうに腐臭のする果物を眺める様子に、怯む様子は見当たらない。

「……あんた、この臭い平気なの？」

「タマネギとか腐るとこういう臭いしますよね。まあ、現地の人はこちらが良いそうですけど」

「……」

レイチエル、まさかの耐性有り。

悔しさのあまりマスクの下で歯ぎしりするマーガレットの前で、レイチエルが牢の奥の方で木箱を開けてゴソゴソと何かを探し始めた。

「えーっと、確かこの辺りに……あつたあつた」

レイチエルは大きめの缶詰を持って戻って来た。

「ポワソン様、お礼にこちらを差し上げます」

「ん？ 何これ？」

レイチエルが差し出した缶詰は外国製の物のようだった。

「以前エリオット殿下と海外へ視察に出た時に、殿下が気に入られていたものです。まあ、缶に入った姿は見えていないかもしれないですけど。ちょうど持っていたんで差し上げますね」

「なんか珍しい物なの？」

「うちの国では滅多に見ないですねえ」

「へーえ……」

ものすごい貴重な物らしい。しかも国内では手に入らないエリオット様の好物。

マーガレットはずしりと重いそれを受け取った。

「さっそく開けてみるーっ！」

「喜んでいただけ何よりです」

マーガレットが風のように去って、レイチエルは一人取り残された。

「どこかで見たとような気がしたと思いましたが、夜会で殿下に張り付いていたコバンザメのご令嬢でしたか」

エリオットに興味が無い上に婚約破棄は推移しか気にしていなかったため、エリオットの相手が誰かを確認していなかった。今考えればとんでもない凡ミスだ。

正直エリオットが婚約の破棄を宣言、レイチエルを投獄するというストーリーだけが必要だったので……ボンクラ王子以外はモブだったのだ。

「ポワソン男爵家のマーガレット様……二回話した感触ですと、男と女で態度が変わる肉食性女子。興奮するとすぐに素が出てしまう単純な所がありますね。ターゲットにもらった物を真に受けて持ち帰るなど、考えが浅い所も」

レイチエルは顎に手を当て、ウンウンと頷き……。

「総括すると、肉食系アホの子ですわね」

暗くなり始めた牢の中でレイチエルが一人で考えていると、灯りが揺れて牢番がやって来た。

「なんだ！？　おい嬢ちゃん、起きてるか？　このヒデエ臭いはなんだよ！？」

お馴染みの口調の牢番に、レイチエルはちよつと笑って愁眉を開く。

「さきほど面会にいらっしゃったご令嬢がお土産に持ってきてくださったんですけど、腐っていたみたいで……」

近くまで来た牢番は、自分の当直机に問題のブーツが置いてあるのを見て凄く嫌な顔をした。

「コイツはひでえ臭いだ……持ってくる前に気が付かなかったのかよ！？　誰だ、そんな間抜け野郎は」

「先日来て下さったサンドバッグさんです」

「ああ、あいつか……」

妙に納得した顔の牢番は、腐っている（と思っている）ドリアンをボロ布で包んで持って出て行った。

彼を見送ったレイチエルはできるだけ大きな板を探し、換気の為に一生懸命扇ぐ。

次期王妃として厳しい教育を受けていたレイチエル。ポーカーフエイスの出来は一級品である。

執務室で側近とお茶をしていたエリオット王子の所へ、大きな缶詰を抱えたマーガレット嬢がやって来た。

「エリオット様、これもらったんです。開けてみませんか!？」

「マーガレット! ん? それなんだい?」

最愛の少女の来訪に笑顔で立ち上がったエリオットは、彼女が抱えている珍品に目を止めた。

「エリオット様が外遊の時にお気に召していたって言っていました!」

「外国で食べた物か? うーん、なんだろう……」

何度か視察に出たことはあるけど、そんなに気にいるほど印象に残った食べ物があっただろうか?

缶詰を手にとったジョージがラベルを読んでみる。

「えーと……シユール・ストレミング? ストローミング? 絵を見る限り魚料理みたいだけど……」

説明書きはさっぱりわからない。ジョージから受け取ったサイクスがパンパンに膨れ上がった表面を軽く叩いた。

「缶詰つてのは見たことあるけど、こんなに膨れ上がるものもあるんだな」

彼らに発酵の知識はない。

「殿下、どんな料理ですか?」

「それが、さっぱり覚えていない……そもそも缶詰などまじまじ見るのはこれが初めてだ。どんなものだろう?」

首をひねるエリオットとジョージをサイクスが笑い飛ばす。

「そんなの開けてみればわかるじゃないか。これなら俺のナイフで

蓋を切れそうだ」

「そうか。よし、開けてみてくれ」

エリオットとマーガレット、ジョージがのぞき込む中で、左手で缶を押さえたサイクスが右手で大きくナイフを振りかぶった。

ふと気になったエリオットが、横でウキウキと缶を見つめるマーガレットに尋ねた。

「これは誰にもらったんだ？」

「レイチエルさんです」

「サイクスッ！ 待……」

エリオットが制止の叫びを上げかけるのと同時に、サイクスのナイフが缶詰に深く突き刺さった。

16・侍女は主へ届け物をする

「いいか、ネズミ一匹通すなよ!? 確実に封鎖してレイチエルを締め上げる!」

エリオット王子の指示を受け、地下牢のある建物の周囲に騎士たちが配置された。騎士団から交代で数名ずつを派遣させ、物陰に隠れてレイチエルが外部と連絡を取る現場を押さえさせる。

「どう考えてもレイチエル嬢は牢屋を開けて新しい物資を受け取っている。じゃないと一新された家具の説明がつかない。外部から運び込んでくるヤツを押さえ、目の前で兵糧攻めを実感させるんだ」サイクスが騎士たちに作戦を説明する。牢の中にいるレイチエルに敢えて聞かせている。

騎士たちはそれぞれ入口や換気窓が見える植栽の影などに隠れ、うつかり近づいた連絡要員を捕縛する計画だ。目の前で頼みの綱が捕まれば、さすがのレイチエルもがっくり来るだろう。

「まったく……相変わらず公爵家には動きが無いという話だし、どうなっているんだ」

エリオットが苛立ashedし気に呟く。公爵家は救出の動きを見せるどころか、逆に公爵夫妻はのほほんと旅行に出かけてしまった。

「ヤツらは現状把握ができていいのか!? 娘が犯罪を犯して捕まっているんだぞ!? 普通は差し入れの一つも持つてくるもんだらうが!」

「殿下、姉上に補給したいんですか? したくないんですか……?」ジョージに指摘されてエリオットは憮然として応えた。

「もちろんレイチエルに支援物資が届くなど論外だ。しかし菓子の一つも届けたいのが親の情というものだろうが。まったく、公爵は何をしているのだ!」

「……私が城下の店から父の名で配達させましょうか?」

「うむ、それを目の前でバリバリ食ってやる」

「あ、ちゃんと嫌がらせは考えてたんだ……」

外で聞こえるように大騒ぎしているのを聞いているのかいないのか。レイチエルは今日もアイマスクを付けて、ベッドに潜り込んでスヤスヤ寝息を立てていた。

今日も今日とて忙しく、自分の仕事と主の代理仕事を片付けている執事の所へソフィアが顔を出した。

お嬢様付きの侍女はよそ行きの外套を着て頭巾を被っている。外出するつもりのようだ。

「ジョナサンさん、お嬢様に面会してきます」

「ああ、そうですか。館の一同が皆心配しているとお伝えしてきて下さい」

サインする手を止めて顔を上げた執事ジョナサンが頷く。が、次の言葉に固まった。

「合わせて二、三日出張してきますので、私とメイアはその間戻りません」

主がいないのに、侍女が出張って何だろう？

ちよつと考えたが、特に何も言わずジョナサンは署名を再開した。
「承知した。お気をつけて」

お嬢様関連で細かい事を気にしても仕方ない。

外出したソフィアは王宮には向かわず、ほど近い街区にある商店へ通用品から中に入った。

事務所に顔を出して商会の代表から報告を受ける。

隠れ蓑の表商売。裏でやっている遠隔地との連絡。お嬢様への補給物資の準備。お嬢様から特に頼まれたこと。全て問題ないのを確認すると、さっそく荷車を出すことにした。

ソフィアの到着で既に出発準備を整えていた荷車に、護衛と一緒に荷台の奥へ乗り込む。裏庭の木戸から馬車が出ると、商店は全く普段の光景と変わりなくなった。

王宮の門衛はそれなりに忙しい仕事だけでも、慌ただしいのは大体昼までだ。誰だつて内に入ってから用事があるわけで、そんなに遅い時間には訪ねて来ない。午後もある程度の時間になると、入城を乞う来客も搬入の荷車もほとんどいなくなる。

そんな所へ、特に特徴もない小型の荷馬車がやってきた。

「停車！……えーと、どの部署への納品か？」

年配の門衛が応対した。行き先の部署を聞く門衛に、御者台に座っていた初老の男が帽子を持ち上げ挨拶しながらにこやかに答えた。「はい、キャットフードの配達です」

「了解した、通れ！」

通行許可証を渡しながら門衛が合図し、他の門衛が進路妨害用のバリケードをはずす。そちらにも会釈する御者を乗せ、荷馬車は王宮の中へと入っていった。

最初の門から通達が行ったらしく、後の門はフリーパスで荷馬車はそのまま通り抜けた。

地下牢の前までやってきた車は切り返して、扉に後ろを向けて停車する。

馬車の荷台からソフィアが降りた。御者と護衛が幌を開け、さっそく荷物を降ろし始める。

そこへ、近くの植え込みから騎士が走り出た。

騎士はソフィアの前まで来ると立礼をする。

ソフィアは落ち着き払って尋ねた。

「犬”は?”」

「この時間の当番は全て“猫”で固めています。他の者は周囲の警戒を。牢番の今日の巡回は三時間後です」

気が付けば、さらに数人王宮の使用人が集まって荷下ろしを手伝っている。搬入は彼らに任せ、ソフィアは地下牢へ降りた。

すでに上の状況を察したレイチエルは、南京錠を外して巻き付けた鎖を抜いていた。牢の扉自体の鍵も、器用に鉄格子の外へ伸ばした手でピッキングしている最中だ。

「お嬢様……扉を開けるのは合鍵を使ってください」

ソフィアが苦言を呈すれば、レイチエルが気にしてない様子で平然と答える。

「たまには使いませんと、技術が錆びてしまいます」

「変に傷がつくと手口を悟られます。鍵穴を鑄つぶされたらどうするんですか」

「この鉄格子がそのままスライドして壁に収納されたら面白いと思わない?」

「それは次回にしてください」

「私、また入るの……?」

お嬢様を押しつけたソフィアが牢番しかもっていない筈の合鍵で扉を開ける。ちなみにレイチエルも持っている。けど使わない。それがピッカーの矜持（嘘）。

「生活上、何か不都合はございましたか?」

「特になかったですね。クッションからベッドに換えてからよく寝られるし……執筆もはかどるわ」

「マウス&ラット商会からもらってきた見本を馬車に積んであります。後で確認してください。……一か月も入っていないのに、なんでも十巻まで書けるんですか？」

「ふふ、キャラが生きると勝手に動いてくれるのよ」

レイチエルは扉をくぐって約一か月ぶりに前室へ出てきた。

「んふーっ！ 久しぶりのシャバの空気だぜ！」

「鉄格子一枚じゃ、さっきまで呼吸していた空気と変わりませんよ。時間が無いのでさっさとこちらに座ってください」

ソフィアはレイチエルを牢番用の椅子に座らせると、用意してきたブルネットのウィッグを被せて櫛を通す。レイチエルが元々ロングヘアなので、より濃い色のウィッグをうまく透けないように馴染ませていく。人に会えるように髪型も整えた。

「こちら、王立劇場のボックス席のチケットです。演目は『王子と乞食』^{リング}。今日明日はお坊ちやまが家にいらっしゃいますので、“緑

の若葉亭”でリビング付きツインの客室を取っておきました。地下牢へ帰る時の身支度用に、宿にメイアを待機させております。屋敷に用事があればメイアを通してリサへ指示してください」

すでに外出着を着ていたレイチエルは鏡で髪を確認しながら、嬉しそうに顔をほころばせる。

「アレキサンドラに会うのも久しぶりね！ あちらのお父様の赴任について行ってからだから、もう一年以上経つのね……」

「向こう様からも、ぜひともお会いして詳しい話を聞きたいと伝言がございました。マルティナ様からも、間に合わないのを謝する手紙が」

答えながらソフィアは頭巾と外套を脱ぐ。

灰白色の髪はすでにチョコレートブラウンに染められ、主と同じ髪型にセットしてあった。服もレイチエルの部屋着を着てきている。普段は雰囲気や服装でごまかしているけど、実はこの二人、身長も

体型もよく似ている。

「服ぐらいこちらで着替えればよかったのに。サイズは大丈夫？」

「時間の余裕が読めませんでした。胸に余裕があるのがム力つきます」

「貴方もそこそこあるのに、そんなこと言っちゃだめよ？ サンド・バッグさんが化けて出て来ちゃう」

「あのご令嬢、ピンピンしてますよね……」

御者が搬出入の終了を知らせてきた。

レイチエルがソフィアの頭巾と外套を被る。ソフィアは牢の中に入り、見落としが無いか確認した。

「……そう言えばお嬢様、ゴミらしいゴミが前回も出ていましてしたね。食べた後とかどうしているんですか？」

「ん？ 置いとくと衛生上よくないでしょ？ だから窓から裏庭に投げ捨てていたら、どこから苦情が入ったらしくって……前室のゴミ箱に放り込んでおけば、牢番さんが分別回収してくれるようになったわ」

言ってきたのは多分、裏庭をこよなく愛するあの人。

「そうですか。それはようございましたね」

基本的に問題が解決していれば些細なことは気にしない似た者主従。

レイチエルが外から鍵をかけ、ソフィアが中から鎖を巻き付け南京錠を付ける。この時だけは、いつも余裕を見せているソフィアが落としてかけて持ち直した。

「お嬢様、この鍵よく持ち上がりましたね……」

「それぐらい持ち上がらなかったら、クロスボウ弩弓なんて構えたまま世間話なんてしてられないわよ」

王子を脅したのを世間話と言っちゃう系令嬢は、多分世界にただ一人。

レイチエルもざつと前室に忘れ物が無いか確認する。

「こここのところ夜更かしして生活時間を変えているから、布団をかぶっている分には牢番さんは声をかけて来ないわ。たまに来る殿下たちの応対が問題だけど……大丈夫よね？」

牢の中のソフィアが喉を何ヶ所か押さえて咳払いする。そして。

「見た目はメイクでだいぶ近づけているし、照明を絞っていればあの人たちでは違和感も感じないんじゃないかしら……だって殿下もサンド・バグさんもアレだし？」

レイチエルの声と口調で答えた。

レイチエルはニコツと笑って満足の意を示すと、御者を促して石段を登り始める。

「それじゃソフィア、明後日のこれぐらいの時間にね」

「はい、パジャマパーティーを楽しんでください」

「話題が殿下とジョージってのも、なんですけどね」

地下牢から外へ出たレイチエルは、一か月ぶりに見る満天の空を眺める間もなく荷馬車に乗り込む。

すぐにガタガタ動き始めた馬車の中で、頬杖を突きながらレイチエルは目を細めた。

「さーて……まずは手足からもいでいきましょうか」

16・侍女は主へ届け物をする（後書き）

皆様からご指摘のありました部分を修正いたしました。ありがとうございます。

一度公開したものを書き直すのはしないようにしているのですが、今回は法律に引っかかってくると言う事で、急遽変更させて戴きました。

17・侍女は招かれざる客に対応する

「さて、どうしましょうか……？」

ソフィアは布団をかぶったまま呟いた。

レイチェルと交替して地下牢に入ったソフィアは、昨夜は遠慮なくお嬢様のベッドを使わせてもらった。仮住まいの簡易ベッドとはいえ公爵令嬢が満足するよう設計・製造された逸品だ。

掛け敷き布団は広げておけば寝ていた間に含んだ汗など水分を自然に放出してくれる高級ダウン。

プライベートに配慮して天蓋や紗のカーテンもついており、床からマット底面までを広くとって湿気を放出しやすとした牢屋での使用に優しい親切設計。はつきり言ってソフィアたちが普段寝ている上級使用人個室の備え付けより、このベッドは遥かに快適睡眠を約束してくれる。

つまり何が言いたいかというと。

お嬢様に近侍して十一年。

ソフィアは初めて寝坊しました。

てへっ、と言ってみるけど……口に出すとバカっぽいね、これ。

まあ何もなければ、ただのんびりレイチェルの振りをしてダラダラ時間を潰すだけだったので問題ない筈でした。

レイチェルが持ち込んだ本は大量にあるし、お茶葉もクッキーも補充したばかりだし。稀な来客に神経を使う以外は休暇みたいな二日間……の筈だったのです。

その筈だったのに。
寝坊して熟睡している間に、エリオット王子たちが来てしまうとは。

エリオットたちが来てから目が覚めたというより、エリオットたちに叩き起こされ……ソフィアは途方に暮れていた。

（念のためにカーテンを降ろしてあったから良いものの……化粧を落として寝てしまったのは失策でした……）

シルエットはかなり似ているレイチエルとソフィアではあるけれど、さすがに明るい所で至近距離で間違われるほど顔が似ているわけではない。

だから“お嬢様に似て見える一見ナチュラルメイク”を開発したのだけれど……そもそもメイクする前に来られてしまったては役に立つはずもない。

直接見られるわけにいけないので、ベッドを出ずになんとかこの状態で追い返さなければならぬ。

カーテン越しに透けて見えるシルエットが偉そうにほざく。

「なんだレイチエルめ、姿も見せんとは今日は一段と態度が悪いな」

お前のせいだボンクラ王子め。ハゲろ。

ソフィアは内心悪態をついたけど、王子の悪口を言いいまくる前にやらねばならない事がある。

この状況を何とかしなくてはならない。

いつもと違うと思われるのは、影武者を置いた意味が無くなる。

「乙女の寝室に押し入ってきて大した言い草ですね。おハゲになったらいかがですか？」

お嬢様に日夜ついているのだ。素が出ている時の喋り方も完璧だ。悪意と嘲弄が余裕に乗ったニュアンスで、ソフィアの喉からレイチェルの声が転がり出てくる。うん、完璧。

半分透けて見えるカーテンの向こうで、なんとなく王子に見える物体が身じろぎした。

「な、なんだ……？ 今日はいらい直接的だな？」

戸惑った様子を見るに、ちょっとお嬢様と違ったようだ。まずい、修正しなくては。

「私は今機嫌が悪いのです。朝からいきなり叩き起こされて、気が立っているのです」

「朝って……もう午後もいい時間だぞ？ 貴様何時から寝てるんだ」
しまった。こっちが社会常識を疑われる発言になってしまった。

「私が寝た時間から逆算すれば、今は朝です」

「貴様、とうとう世界の基準が自分になったか……？」

余計にこじらせた人間になってしまった。どうしよう。

カーテンの向こうで王子？ が首を振る。

「ええい、そんな事は今どうでもいい！ レイチェル、貴様この間はよくも何も知らぬマーガレットを騙してくれたな！？」

「……マーガレット？」

聞いた気がする名前だけど、焦ったソフィアの頭では名前と顔が一致しない。確かに最近王子関係で見る名前なんだけど……誰だったでしょう？

思わず呟いたソフィアの声が聞こえていたらしい。王子らしい人影が目に見えて怒り始める。

「貴様……俺やマーガレットをあんな目に合わせておいて、なんだその心当たりがないみたいな言い方は！？ あの腐った缶詰をまともに浴びたおかげで、ジョージやマーガレットはまだ寝込んでいるんだぞ！？ 俺も昨日やっと起きて来たんだ！ 弟やか弱いマーガレットをあんな目に合わせて、貴様は良心が傷まないのか！？」

あんな目……腐った缶詰……缶詰？ ……あつ！

「ああ、サンド・バッグさん！」

「はっ！？」

「思い出しました！ やだなあ殿下、本名で言ってくれないと誰かわからないじゃないですか」

「え？ いや……俺、サンド・バッグなんてヤツ知らない……」

「自分の彼女の名前でしょう？ 忘れちゃダメですよ。これだから殿下は」

「彼女……？ ……って、マーガレットの事か！？ 本名がマーガレットだ！ サンド・バッグってなんだよ！？」

そう言えばそうだった。どうでもいい情報なので間違えていました。

ソフィアとしては和やかに話してやったつもりだったのに、どこか気に障る所があったらしい。王子がさらに怒り出した。

「ええい、かさねがさね貴様は……！？ そもそもレイチエル、人が本気で怒っている時に布団に入って顔も見せんとは何事だ！ 出てきて正座せんか！」

「ちっ」

バカ王子が正論を言ってくるとは……かといって、まさかソフィアが出ていくわけにもいかない。向こうの言い分を封じつつ、お嬢様が優位の状態で話を打ち切らないと……。

「舌打ちしたな！？ 貴様、一国の王子に向かって、なんだその態度は！」

「……」

ソフィアは沈黙で応じる。こうした方がこの後に繋がられる。

「聞いているのかレイチエル！ 俺が怒っているのだ、さっさと出て来い！」

予想通り激昂した王子が重ねて命じてくる……けど、怒った勢いで鉄格子を揺すつてくるのはどうかと思います。お嬢様に聞いていたけど、ホントにサルみたいだわ。

ソフィアは布団を抱き寄せたまま上半身を起こした。向こうからはソフィアの身体が布団に隠れているのだけは判るだろう。

「……殿下」

「なんだ!？」

「ホントに女ごころが判らない方ですね……」

「……なんだと!？」

ソフィアがわざとらしくため息をついて思わせぶりに言うと、怒りつつも気になるらしく……エリオットがおとなしくなる。

そこへお嬢様を真似て……甘い毒を流してやる。

「殿下がそこにおられて、ベッドを降りられる訳がないじゃないですか……私、寝る時はなにも身につけませんの……」

「……!」

エリオットが……いや、牢屋の前全体が震撼した。この部屋の騒めきぶりからすると、王子の後ろに空気みたいに取り巻きが控えていたらしい。

「で、殿下……!？」

「う、うろたえるな!？ レ、レイチエルの策略かもしれんぞ……」
策略というのはあっているけど、残念、お嬢様ではない。

妙にかしこまって咳払いをしたエリオットが重々しい口調で確認してくる。

「はっはっは、私は騙されんぞレイチエル。そんな事はあるまい。な?」

平静を装っているけど、動転して一人称まで変わってますよ、殿下。

だから、さらに追加を投入してやる。

「あら、御存じないんですの殿下? 我が国の貴族女性ならば、一般的な習慣ですよ?」

「！！」

もう隠しようもなくパニックになる、エリオットと愉快的仲間たち。

「で、殿下！？ てことは、あの子もその子も……！？」

「まままま待て、おおおおお落ちてけけけけけ！」

「ししししし、しかし！ 僕ら、こんなマル秘情報知ってしまったらさらさら……もう、もう宮廷で顔を上げられません！」

「いや待て落ち着け！ 我らにやましいことは無いのだ、平常心で行こう！ 平常心、OK？ いいか、そこらのご令嬢を見ても想像してはいかんぞ！？ いいな！？」

彼らのあまりに初心な反応に、コイツら意外と遊んでないなあ、などと思いながらソフィアは最後のトドメを刺した。

「まあ殿下、御疑いですか？」

「え？ いや、別にそんな事も無いけどお！？」

「私の言う事が信用できないようでしたら、“マーガレット”様に“確認”されてはいかがですか？」

ソフィアが言い切る前に、無言の暴風が吹き荒れた。

彼らは言葉の持つセクシャルなイメージに吹き飛ばされ、思わず想像したヤツを他の者が叩き、だけどソイツも連想してしまい……エリオットは言葉一つで空中分解し、彼らは停まらない妄想で悶絶し、みずから戦闘不能に陥った。

彼らが自らの妄想力に打ちのめされ、放心状態になったのを確認したソフィアが柔らかくエリオットを促した。

「あの、殿下？ お話を伺う前に、私、服を着たいのですが……」

「あ？ ああ、ああわかった！ うむ、我らは外に出ているから終

わつたら呼ぶがよい！」

やましくないとか言いながら、想像しただけで後ろめたくなっている王子様。

壊れた首振り人形みたいにぶんぶん頭を振ると、後ろの取り巻きたちを追い立てて自らも出ていく。

「換気窓から覗いても駄目ですよ？」

「わかつている！ わかつているぞ！」

バタバタと石段を登っていく音が消えると、ソフィアはホッと息を吐いた。

「あー、緊張しました…… なんとかバレずに済んでよかった」

当然ソフィアは寝巻を着ています。だって使用人だもの。

そしてお嬢様の朝の着替えは無数に手伝ってきましたが、裸だったことは一度も無いですね。と心の中で言ってみる。

うん、そんな習慣自体が我が国の貴族社会に無いし。

そしてソフィアはせっかく王子たちが着替えの為に出て行ってくれたので……二度寝した。

もちろんエリオットたちを呼び戻すつもりは毛頭ない。

翌日帰って来たレイチエルは楽しかったらしく、つやつやした顔をしていた。

「宿屋を取って良かったわ。積もる話をいつまでもお喋りできたの。家だとばあやにベッドへ放り込まれるもの」

「それはようございました」

「屋台で串焼きを買い込んで、ルームサービスでエールを持って来させて乾杯したの。あんな夕食初めて……楽しかったわ」

「お二人とも貴族として、それどうなんでしょう？」

今日は物資の搬入は無いので、レイチエルとソフィアは情報の申

し送りという名のお茶会をしている。もちろん他の者に警戒させながらなので、ササっと手早く済ませるけれども。

「だけどソフィア、もうちょっと穏当に収められなかったの？」

「そうですか？ 王子と喧嘩にもならず、静かに退散させられたと思っただけですが」

「それはそうだけど……私が裸で寝ているって殿下たちが思い込んでしまったじゃない。他人に喋られたら、ちょっとしたスキャンダルよ」

「ああ、それでしたら」

ポットを持ったソフィアが、普段に似合わぬイイ笑顔で答えた。

「醜聞が出るのは私じゃないので、いいにしました」

「貴方のその全方位に冷たいところ、嫌いじゃないわよ」

「あゝ……久しぶりの外泊も街歩きも楽しかったけど……」

ややぬるくなったお茶をくーっと一息に飲み干したレイチエルは、満足したようにリクライニングチェアで大きく伸びをした。

「やっぱりくつろげる我が家が一番ね！」

「えっ！？ ……お嬢様、ホントに？」

18・令嬢はお客さんを接待する（前書き）

すいません、うちのルーターがおかしくて時間までにアップできませんでした。

18・令嬢はお客さんを接待する

エリオットも王子として、日々色々こなさなくてはならない仕事も行事もある。このところ書類仕事も視察も激増していて、なかなか忙しい日々はあの頭にくる地下牢の事を忘れさせてくれた。そんな彼が強制的にムカつくアイツを思い出さざるを得なくなつたのは、たまたまティープレイクに窓から外を眺めていたら発見してしまったからである。

煙が立ち上っている。どうみても見覚えの有り過ぎる建物のあたりから。

「ああ、今日はいい天気だな……」

「見えます？ 殿下、なんか煙が」

「たまにはマーガレットを連れて、丘へ遠乗りなんか良いかもしれんな」

「あれって地下牢のあたりだよな？ なんだろう、薪でもくべているような……」

「思えば最近仕事詰めで身体もなまっている。よくないな」

「あれ？ こりや肉の焼ける臭いだ……おいおい、コイツはなかなか食欲をそそるな」

「よし、今日は郊外へ出かけよう！ マーガレットが来たらすぐに出るからな、厩舎に馬の準備をさせておけ！」

「殿下、聞いてます？ またレイチエル嬢がなんかやってますぜ」
「サイクス、殿下がせっかく見えないふりをしているのに……」

半ば義務感でいやいや地下牢まで足を運んだエリオットが到着す

ると、地下牢の入口で若い男が二人、バーベキューコンロの片づけをしていた。服装を見るに見習い料理人のようだ。

エリオットはそれを見無視して牢内へ足を向ける。

「あれ？ 殿下、あいつらを問い詰めないのか？」

サイクスが驚いて袖を引くのに対し、エリオットは苦虫を噛みつぶした顔で首を振る。

「どう見ても下っ端だ、あれは。何かがあるのは下がメインだ。それに原因は確実に下にいるからな」

「姉上は牢から出られませんからね」

「だけど殿下。片づけを今すぐ止めないと、俺らの分を焼く前に帰っちゃうぞ？」

「貴様の優先順位は飯か！？ 飯だな！？」

地下牢の前では、恰幅のいい料理人が鉄格子の中に向かって料理の説明をしていた。

「こちらが本日のメイン、牛フィレ肉のレアステーキ 監獄風になります。私は普段は肉が綺麗に見えるように鉄板で焼くのですが、鉄格子をイメージして敢えて網焼きと致しました。ソースに肉汁を使用できませんが、炭火で直に炙ることで燻られた香ばしさがついて野趣溢れる仕上がりになったかと思えます」

一切れ口に運んだレイチェルが弾んだ声を上げる。

「美味しい！ このソースは以前お店で食べた物とは違いますね」

「はい。今回はお美しいファーガソン様をイメージして、ビターチヨコレートを煮溶かしてソースの柱としております」

「まあ、御上手なんだから！」

和気あいあいとステーキの感想を述べあう客と料理人に、エリオットが声をかけた。

「そろそろこつちの話も聞いてもらえるかな？」

あれ？ 何の用？ と言わんばかりのキョトンとした顔にももう慣れた。エリオットと側近は視線を交わし合い、軽く頷いたジョー

ジが前に出た。

ジョージは傲然と見下ろし、レイチェルの前の皿を指さした。

「姉上、その料理なのですが……どうやって皿を牢内に？」

「聞きたいのはそこじゃないだろ！？」

料理人が一礼した。

「先に入れた皿を助手に持たせておき、肉はトングで載せて中で仕上げを致しました」

「あ、そう来たか！」

「だからそれはどうでもいい！」

ジョージを押しつけ、エリオットが叫んだ。

「レイチェル、貴様に俺は言ったよな！？ 出前を取るなと」

レイチェルが口の中の物を飲み込み、素直に頷く。

「はい、お聞きしましたね」

「そうか。では、これはなんだ？」

レイチェルは手元の皿を見た。

「まあ殿下、これは出前ではありませんわ」

「ほう？ では何だというのだ」

レイチェルが邪気の無い笑顔で答えた。

「ケータリングです」

「同じだ馬鹿野郎！」

エリオットが目を血走らせて周りを見回す。

「だいたい毎度のことだが、牢番は何をしているんだ！」

そう言った途端に、自分の机に座っている牢番と目が合った。

彼の前には同じ料理がサーブされて、口いっぱい肉をほおばっているところだ。

王子と目が合ったので急いで飲み込み、にかつと笑って親指を立てた。

「大丈夫っす！ 不審な物は入ってやせん！ あっしがきちんと毒見してますんで！」

「お前のそれは毒見じゃなくて味見だ！？ コイツの料理に何が入

つていたって構わんわ！ 肉一枚で買収されおって……！」

「いえ殿下、あつしは肉の一枚や二枚で買収されるような男じゃありやせんぜ。きちんとコース料理を最初からいただきやした」

エリオットが牢番を手討ちにしようか悩んでいると、ステーキを片付けたレイチエルがフォークを置いた。

「殿下。私は別に、ただ出ま……ケータリングを取っているんじゃないんですよ？」

「いま貴様、出前と言いかけたよな？」

「今度ファーガソン家のパーティがあるので、出される料理の試食をしていたんです」

エリオットのもつともな指摘は無視された。

「僕がいるのに……」

ジョージの悲嘆も無視された。

直後にエリオットが、レイチエルの答えを聞いて爆笑したからだ。「貴様がパーティ料理の試食！？ 自分が出れないのに！？ なんだ、協賛の垂幕だけでも出しておくか！？ それとも遠くから成功を祈っていますと挨拶文だけの出席か！？」

さんざんやらかしてくれたレイチエルだが、さすがに家のパーティには出ようもない。自分の出れないパーティの下準備をせっせとしている滑稽さ。この間抜けな状況を、レイチエルは自分でわかっているのだろうか？

久しぶりにレイチエル関係で痛快な出来事だけに、エリオットの高笑いはなかなか止まらなかった。

勝ち誇るエリオットを眺めながら、レイチエルはそつと皿の下に隠した通信文を思い返して微笑んだ。

趣向がお気に召したようで、私も嬉しいです殿下。

当然、貴方もご出席で宜しいですよ？

綺麗に着飾ったマーガレットの可愛らしさに、エリオットはじめて彼女の取り巻きたちは相好を崩した。

「美しいぞマーガレット。花の妖精のようだ」

「まあ、殿下ったら！」

恥ずかしげに睨んで見せる様子も実に可愛い。

完成した大人の美貌というより、成長途中の瞬間ハツとさせる危うい魅力が溢れている。幼げを残した彼女の美しさに、デコルテを見せるイブニングドレスは派手過ぎるかと思ったが……むしろアンバランスさがいい！

コレだけ似合うなら贈った甲斐があつたな、などと考えてエリオットがニマニマしていると、横に締めりのない笑顔（要するに同じ顔だ）をしたボランスキーが来た。

「素晴らしい美しさですよ、殿下」

「ああ、マーガレットは実に可愛い」

「はい、実に。特に肩紐の無いチューブタイプのドレスにしたのはお手柄でございますよ」

「いいだろう？ 俺も試着に付き合っただが、敢えてフリルやリボンを抑えて大人っぽいシンプルなデザインもいいかと思ったんだ」

チヨイスを褒められて自慢げなエリオットに、ボランスキーがポイントを上げて褒め上げる。

「ええ。ずれ落ちないように締め付けたことで、控えめな胸が強調されて実にいい！」

「……ずいぶん視点が独特だな？」

「そうですね？ 普通だと思っけどな……王国ペタリズム協会会長として、マーガレット嬢にはペタ・オブ・ジ・イヤーを進呈したい！」

「……そんなに、無いと言うほどではないと思うんだが」

「ああ、殿下ほどのの方が何をおっしゃいますか！？ ペタというのはさやかながら主張していなくてはいけないんです！ 絶壁やまな板なら良いってもんじゃない！ この微妙なラインを理解していただかないと殿下、ペタリストとしては二流どまりですよ！？」

「いや、それ一流になったら何かが終わってる気がする……」

と、エリオットは鼻息荒いボランスキーを見ながら言った。

「貴様、家名がボインスキーなのになあ……」

「ボランスキーです、殿下」

新しくもらったドレスを堪能していたマーガレットが、最後にポーズを決めてからエリオットに駆け寄った。

「エリオット様、本当にありがとうございました！」

「これぐらいなんでも無いさ、マーガレット。君を美しく飾れて俺も嬉しい」

想い人に抱きつかれて鼻の下が延びまくるエリオット。

の幸せが一瞬で砕け散る一言。

「よし、じゃあこれで、私レイチェルさんに自慢してきます！」

エリオット様に、とっても優しくしてもらってるって！

「……マーガレット。なんにもあんなヤツにわざわざ見せなくたって

……」

マーガレットのプランに消極的な意見を述べたエリオットに、衝撃の返答が。

「でもエリオット様。せっかくレイチェルさんがパーティをしてるんですもの、そこにこのドレスで乗り込んで、エリオット様に愛された主役は誰か、思い知らせてやりたいのですわ！」

“登城中に寄ったら、地下室に次々着飾った来客が入っていった”
そうマーガレットが伝えた情報を受けて、エリオットたちは現場に急行していた。

「くそつ、昼間に気が付くべきだった……」

「そうっすね……レイチエル嬢がおかしな事やって、殿下に被害が出ない筈は無いんだよなあ」

「どういつ判断基準だ、それは!？」

地下牢の入口は扉が開け放たれており、中から眩いほどの灯りと楽しそうな騒めきが裏庭にまで漏れていた。

「くそつ、どここのバカが地下牢でパーティなんて……!」

「だって、レイチエル嬢だもんな」

「姉上ですからねえ……」

階段を駆け下りれば、そこには。

昼間のような明るさにまで室内を照らす、横に広いシャンデリア。夜会というにはラフではあるものの、それなりに着飾った紳士淑女たち。

無かった筈のテーブルがいくつも置かれ、ボーイがどんどん料理をサーブしている。

そして端っこでいつもの薄汚れた作業着に蝶ネクタイを付け、樽からワインをサーブしている牢番。

……牢番。

「おい。貴様!」

「あ、これは殿下」

「殿下じゃない! おまえ何やってるんだ!？」

「アルコール係です。試しに飲んで見ましたが、赤も白もすっげウマいですよ。ロゼもありますけど瓶で一ケースなんで、早めに飲まないと無くなります」

「そうじゃねえよ!? 貴様は地下牢の管理が仕事だろうが! なんでコイツらが入る前に止めないんだ!」

「いや、だつて……」

そう言つて牢番は周りを見回し……。

「こんなお偉いさんたちがほとんどん集団でやってきて、あつしに止められるとでも?」

「そう言つ仕事なんだ、追いつせばいいだろう!」

「でも、招待状があるつて押し切られちゃいまして……なんか、言葉が片言の人も多いし」

「はあっ!?!」

やたらにハイな人混みをかき分けて、エリオットは楽しそうに談笑していたレイチエルの所へたどり着いた。

「おい、レイチエル! なんだこの騒ぎは!?!」

「あ、どうも殿下」

レイチエルも着飾っていた。紺色のイブニングドレスに、控えめながらパールアクセサリーを付けている。

こんな物を最初から牢屋に持つてくるはずがない。

人を殺せそうな目線で睨むエリオットへ、レイチエルは普通に知人に話しかけるようにおつとりと答えた。

「よく考えたら私、まだ引越パーティをしていなかったんですよ」

「引越パーティ!?」

「でも、私も今、こんな身の上でございますでしょ?」

「それは忘れてないんだな……」

「なので普通の貴族や政治家の方は、王子の手前パーティに来にくいかと思ひまして……今日の招待客は、懇意にして下さつて諸外

国の大使や聖職者、商人の方々に限定しました」

「氣遣いが中途半端!？」

エリオットがぐるっと見回せば、確かに見知ってはいるけど自国の人間じゃない者ばかりだ。正装した聖職者も多い。普通の夜会服で王国語をしゃべっている者もいるが、顔を全然知らないのも多分あれが商人だろう。公爵家と懇意ならば、だれもが相当な豪商と思われる。見知っているらしいジョージの顔色が凄いいことになっていた。

叫びだしたいのを必死に抑えているエリオットを尻目に、レイチエルは次々と招待客の挨拶を受けて親密そうに盛り上がっている。一人鉄格子の向こうにいるのに誰も気にしていない。むしろエリオットたちの方が地平線の彼方にいるかのような疎外感を覚えていた。

「レイチエルめ……!」

外国人に財界人に宗教界。つまり、今ここにいるのは王子の権力では黙らせられない者ばかりだ。牢番が押し切られたのも訳はない。そんな連中がこの状態を見て、レイチエルとエリオットのどちらの肩を持つか言うまでもない。向こうはパーティでスマートに立場を訴えているのに、自分が杓子定規な対応をすれば逆効果だ。

歯ぎしりで音が出そうなエリオットの前で、レイチエルと豊かな白髭のジジイがなんだか盛り上がり、楽しそうにグラスを打ち合わせた。

「プリズンイエーイ!」

「イエーッ!」

ハイテンションに雄叫びを上げる二人に思わず食ってかかるエリオット。

「おい! 牢屋の何が楽しいんだ、コラ!」

「待って! ダメです殿下、抑えて! あの人枢機卿です、喧嘩売っちゃ駄目です!」

必死に止めるジョージに引つ張られ、エリオットは悔し涙を飲んで

引き剥がされた。

「くそう、コイツらになんとかレイチエルが悪いと訴えられないものか……」

「あとでそれぞれに立場を説明しに人を派遣するしか……しかしこの人数、誰が来ているんだか覚えられるかな……」

盛り上がるパーティ会場の片隅で、ワイン樽に隠れながらボソボソ相談しているエリオットとジョージの様子に。

ふんっ、と鼻息を荒くしたマーガレットが立ち上がった。

「エリオット様、あたしが説明してきます！」

「マーガレット！？」

「だっておかしいじゃないですか！ 正義の味方のエリオット様が、悪い筈のレイチエルさんにしてやられるなんて！」

「してやられる……」

その通りだけど、マーガレットに言われると……。

へこんでいるエリオットをジョージが慌てて介抱している間に、マーガレットはずんずん歩いて行って端にあつた箱の上に立った。

「みなさん、聞いてください！」

マーガレットのパーティ中とは思えない呼びかけに、何事かと来場者の視線が集まった。

「みなさん、なにを言われたか知りませんが、ホントは悪いのはレイチエルさんなんです！ エリオット様は私を助けるために、敢えて婚約者のレイチエルさんを断罪して牢屋に入れたんです！ 騙されしないで！」

一瞬、シンとした会場。

物音のしない中、箱の上で胸を張ったマーガレットがふんぞり返る。

数秒で音が戻った。

エリオットの歓迎しない方に。

「ワハハハハ！」

「イツツァ・ナイスジョーク！」

「プリズンイエーツ！」

酒が回り過ぎて何かの余興だと思った観客たちに拍手喝采され、なんだかよく判らないけどヘコヘコ周りに頭を下げて回るマーガレットの様子が余計に説得力を無くしている。

しまいには、マーガレットも騒ぎに引きずり込まれて一緒に乾杯していた。

「プリズンイエーイ！」

「イエーイ！」

料理をお皿に山盛りにしながら目をキラキラさせてマーガレットが戻ってきた。

「エリオット様、やりましたよ！」

「ああ、そうね……」

全然効果が無かったとも言えず、萎れるエリオットをマーガレットは口いっぱいに御馳走を頬張りながら不思議そうに見つめた。

ジョージが気付いた。

「あれ？ サイクスは？ 一緒に来たのに」

牢番が新しいワインを注ぎながら会場の真ん中を指す。

「騎士の兄ちゃんなら、最初からパーティで盛り上がってますぜ」
「昼間食べそびれた料理と美味しいワインに、テンションのあがったサイクスはこの誰かも知らないおっさんと盛り上がっていた。」

「いいなあ、毎日やらないかな」

「ワハハハハ ミーツウー！」

「俺もだ！」

サイクスと隣の大国の大使はグラスを打ちあわせた。

「プリズンイエーッ！」

18・令嬢はお客さんを接待する（後書き）

ご連絡

：16と17でジョージの状態が矛盾してました。ごめんなさい。
気が付きませんでした。

あとでマーガレットだけに書き直します。

：多数の方に「いいにする」とはなんぞやとご指摘いただきました。
慌てて確認を取りました。

「いいにする」は「良しとする」に語意の近い、静岡県・山梨県にしかない方言でした。いわゆる甲駿遠地方、別名「関東にも東海にもハミ子にされてるブラザー」独特の言い回しのようです。

生まれてこの方数十年、標準語もしくは全国区の言葉と信じて疑いませんでした。びっくりしています。友人知人に聞いたら誰もが同じでした。ちょっと周りがパニックになってます。

単純に「良しとする」にしてしまうと語感が変わるかもなので、連載が終了しましたら文意を考えて置換を致します。

19・令嬢は弟をかわいがる（前書き）

ザマアします。一つ目まで長かった……。

ちよつと一部の方には居たたまれないかもしれません。心を決る部分がありますので警告しておきます。

19・令嬢は弟をかわいがる

日差しが一番明るく差し込む、のどかな午後の時間。鉄格子を挟んで内と外にそれぞれ小さなテーブルが置かれ、鏡写しに二人の令嬢が座ってお茶を楽しんでいた。

「引越しパーティは大成功だったわ、アレキサンドラ。お膳立てを手伝ってくれてありがとう。凄い助かったわ」

嬉しそうなレイチエルと向かい合うのは、緩やかなウェーブの金髪とサファイヤのような澄んだ蒼の瞳が印象的な少女。彼女はレイチエルの謝辞に口角を吊り上げ、凄みを滲ませた微笑みで応えた。

アレキサンドラ・マウントバッテン侯爵令嬢。レイチエルが素を見せる友人であり、家族同然の付き合いをしている特別な仲間だ。

見た目地味な色合いで清楚な風貌のレイチエルに対し。アレキサンドラは色調が派手なだけではなく、顔つきも自信に溢れた華美な顔つきをしている。ドレスではなくパンツスタイルで剣でも佩いていれば、姐御と呼ばびたくなるような……レイチエルとはまた違うタイプの美女だ。

「対外的な事なら任せといて、レイチエル。それこそ私のできる事なんてそれぐらいだし」

父が外務の上級官僚のおかげで、アレキサンドラは外国公館の上層部に顔が広い。引越しパーティに多数の外国大使が参加したのも、またその後に王子の醜聞が広がらなかったのも彼女の水面下での根回しのおかげだ。

「しかし殿下を叩くのも面白そうね。こんな面白いことになっているなら、もっと早く帰ってくればよかった」

挑戦的な表情でニヤリと笑う様子が実にサマになっている。地下牢の殺風景な石壁が背景になっている事と相まって、まるで冒険物

語の女主人公のようだ。

逆にレイチエルは柳眉をハの字にして、困ったように小さく微笑んだ。

「それもいいんだけど、あんまり叩きすぎるとねえ……向こうがストレスをため込んでおかしい爆発をしちゃっても困るのよね」

「なるほどねえ……で、どうするの？ もう勘弁してあげる？」

そんなことはないと言った上で、アレキサンドラは空々しく尋ねた。一方のレイチエルは親友の質問に、気弱そうな笑みで肩を竦めた。

「うん、仕方ないよねえ……だから、あっちが破裂する前にさっさと潰すわ」

「ホントはのびのび楽しみたかったのにね」

「もったいないけどね……殿下が理性を飛ばして後先考えない行動に出る前に、再起できないように叩かなくちゃ」

「じゃ、私も頑張って応援するね」

「ふふ、お願い」

二人の乙女は可愛らしく含み笑いをしながら、ティーカップを軽く打ち合わせた。

ジョージ・ファーガソンは馬車から飛び降りるように下車すると、迎えに出た執事にカバンを乱暴に渡して玄関をくぐった。

広い廊下に靴音を派手に立てて自室に向かう。

「くそっ、どいつもこいつも……」

不肖の姉を追い詰める計画は遅々として進まない。

軽い嫌がらせは効かない。派手なものになると危害を加えることになって正当性が怪しくなる。姉の神経を参らせて、なおかつ第三者からやり過ぎと判断されないボーダーラインを探さなくてはならな

い……そんなものが存在するのか、どうにも自信がないけど。

おまけに王宮の廷臣どもは関わり合いを恐れて弱腰だ。

裁定を王が下すまで無関係でいたらしく、姉の周りに手を付けるのをなんだかんだと言って協力しない。せいぜい騎士団に牢の周りでスパイの侵入を警戒させるぐらいだ……しかも、姉は外部と連絡しないと不可能なパーティまで開いていると言うのに、警備は未だにネズミ一匹捕まえてこない。

公爵家からの支援も止めさせようとしているけど、これも効果のほどは判らない。

見た目邸内にそういう動きはないけれど、姉の元に支援物資が行っているのは確実なのだ。表立ってジョージに反対する者はいないけど、面従腹背の気配をひしひしとを感じる。

正直に言えば手詰まりだった。ジョージ達の眩しい太陽、マーガレットに仇成す敵がはつきり見えない。

もう今日は寝てしまおうと思いつながら、ジョージは自室の扉を開けた。

「!？」

自室に一步入り、部屋の中を眺めた時のジョージの心象はとても言葉では言い表せないものだった。

ジョージは悲鳴を上げなかった自分を誉めてあげたいと思った。少なくとも、腰を抜かさなかったただけ立派だと思う。

彼の部屋の中ではリビングの机と椅子などを使って、お洒落な書店のように綺麗に本や絵などが飾られていた……ジョージが隠していたはずの物が。

官能小説に、セクシー女優のあらもない姿絵。

人に見せられない方の日記に、書きかけで渡すつもりもないファンレター。

その他にもエトセトラ、エトセトラ……。

ジョージが掃除のメイドに見つかからないように、あちこちへうまく隠していた（つもりだった）秘蔵の品々が一堂に会していた。

「な、な、な……」

慌ててかき集めて隠し場所を考える……飾られている以上無駄なのだけれど、持ち主としてそうせざるを得ない。

とにかく人目に触れないように、適当なカバンに詰めてベッドの下にでも一時退避させようとする。

「……くそつ、誰だ……!？」

自分の行動を気に入らない、姉のシンパの使用人の仕業だろう。

こんなことをしかしそうな者は誰だ？ 使用人たちの顔をいちいち思い浮かべながら机の上の本を焦って掻き集める。

と。

本に押さえられていたらしい見慣れぬ封筒が姿を現した。女物の、ピンクの封筒だ。

「……なんだ？ 嫌な感じしかないけど……」

でも、見なければ始まらない。

ジョージは封筒を開けた。中には便箋が一枚きり。

そしてそれを広げ……一瞥して、今度こそ絶叫した。

もう夜になった地下牢の前室。

鉄格子の前で、ジョージは牢に向かって土下座していた。

「姉上、すいませんでしたっ！」

ガタガタ震える弟の様子に、寝ようと思ってベッドを整えていたレイチェルが首を傾げた。

「あらジョージ、どうかなさったの？」

「マーガレットが虐められていたと言う事を姉上のせいと決めつけて、申し訳ありませんでした！」

「まあ。急にそんな事を言うなんて、なにかあったのかしら？」

なにを言われようと、ジョージは姉に頭を下げるしかできることが無い。

「……どうか、どうか姉上……手紙にあったことは内密に……」
必死に頼む弟に、レイチェルは何があったのかと尋ねた。

「どうしたの？ ジョージったら、公爵家の跡取りが地面に膝をつくものではなくってよ？ 手紙の事って言う……」

レイチェルはいったん言葉を切って、傾げていた頭を逆側に倒した。

「五歳の九月におねしょしたパンツを私が洗ってあげた事？ それとも七歳の二月に花火に怯えて立ったままお漏らしした事？ でも、そんなの小さなころの“微笑ましい”エピソードよね」

レイチェルは怯える弟を見つめながらニコツと笑った。

「そういう小さい頃の事でないとすると……十三歳の五月に性に目覚めて姉のクローゼットで人目に付かないようにドレスを撫でまわしていた事？ それとも十五歳の六月に誰もいないのを確認してから私のベッドに寝転んでシーツの臭いを嗅いでいた事？ でないとすると……十六歳の七月、つまり去年にランドリーへ出す前の私の下着を盗んで宝物にしていた事？」

「すいませんでした！ 姉上、すいませんでした！ すいません、すいせんっ！」

怯えるジョージはとにかく謝り倒すしか、できることが無い。

ジョージが見つけたピンクの封筒。

そこには、ジョージの他人に知られたら生きていけないエピソードが断片的にいくつか列記してあった。

書いたのは間違いなく姉。見覚えのある綺麗な筆記体が淡々と、一つだって周囲に漏れれば身の破滅の出来事を年表のようにそつてなく書いてあった。

誰もいないのを確認してから、の筈の出来事。

もはや自分自身でさえも、言われるまで覚えていなかった出来事。姉どころか自分付きの使用人でさえ見ていなかったはずの事が、赤裸々に事務的に並べられている。

そしてそれだけ覚えていたならば……。

ジョージだって記憶にある、書いてある内容の“間に入る”出来事を知らない筈がない。

つまり、ピンクの封筒の手紙は、ジョージの黒歴史の全部じゃない。

震えるジョージの様子に戸惑ったように、あくまで清純派を装った姉が困った様子を見せた

「あらあらジョージ、そんなにおびえなくても。姉はただ、いつ殿下に処刑されるかわからないから取り留めない思い出をお手紙に出しただけなのですよ？ “懐かしい”、”微笑ましい” 思い出が色々あったなあと思ひまして……その辺りをちよつと弟と分かち合おうかと思っただけですのに」

そしてとても華麗に……口元だけ優雅に、家庭内絶対強者はニタアツと笑った。
おねいちゃん

「ジョージももうお年頃ですもの。素敵なマーガレットさんと恋仲

になつたら、姉との細かい思い出なんて忘れてしまふでしょう。姉も獄中でいつ果てるかわからない身、もう独り立ちした立派な弟にちよつとでも覚えていてもらえれば……たとえこの身が露と消えても、貴方の心の中で姉は生き続けられますから」

「そ、それは……！」

この姉が絶対に、エリオットごときに黙つて処刑される筈はない。それは判つてるけど、今この場で指摘できるほどジョージは己の立場が分からない馬鹿ではなかった。

とても処刑を心配していると思えない素敵な笑顔で、魅惑のお姉様は微笑んで見せる。

「あ、でもジョージはマーガレットさんに夢中で姉の事なんて覚えているスペースは無いですね？ では、私の覚えている限りのことを書いたこの冊子を……そうね、お父様かお母様にお渡ししておこうかしら？ お二人の結婚式の時にでも、成長記録の一環でエピソードを幾つか紹介してもらうのはどうかしらね？ そうすれば草葉の陰から姉も、良い事をしたと安心してジョージの行く末を見守れます」

「お願いします姉上！ どうかそこにある事は父上や母上には言わないで下さい！」

「姉上え？ 昔はジョージも、“お姉ちゃま”と呼んでくれてかわいかったのに……」

「お、お姉さま！」

「サマ？」

「お、お姉ちゃま……どうか、どうか私の恥ずかしい事を父上や母上には言わないで下さい！」

「えー？ でも、先の無い姉にはジョージをこれ以上見守ることはできませんし……」

「殿下が間違つても姉う……お姉ちゃまを手にかけることが無いように、私が間に入ります！」

「でも、ジョージも私がマーガレットさんに色々……良く知らない

けど、酷いことをしたと信じてるんでしょう?」

「いえ、絶対そんな事はありません!」

姉のわざとらしい問いかけを、ジョージは必死に否定する。

マーガレットの持ち物が壊されたり、階段から突き落とされたり。つい半日前までジョージも姉の仕業と信じて疑わなかったけれど、今は違うと言い切れる。

……ジョージをいたぶるだけで牢内からこれだけのことをできる人が、恋敵を虐めるのにあんな生ぬるい事をするはずがない。というか、ホントに恋敵だったら虐める程度で済むはずがない。そして姉が本気になったのなら……マーガレットは今頃姿かたちもない筈だ。

「お姉ちゃまはマーガレットに手を出していないと信じてます! 誓約書も書きます! ……だから、だから姉う……お姉ちゃま、そこに書いてあることを父や母に渡すのだけはやめてください! お願います!」

「あら、そう? ……教えないのは、お父様やお母様だけでいいの?」

「は、はい!」

「ホントに? 他には誰かいない?」

「え……?」

姉が変な念押しをしてきてジョージは戸惑った。

黙っていてくれそうな雰囲気はありがたいけど……その他って?

姉の事だから、^{マサ}「面白そう」で引つ掻き回すかもしれない。

「で、では……メイド長にも……」

「他には?」

「え? えーと……殿下やマーガレットにも……」

「他には？」

「え？ ほ、他に……？ では、サイクスとか他の仲間も……」
「そうですか」

ホッとするジョージの前でレイチエルが鉄格子に近寄り、全然別の方向へ格子の間からノートを外へ突き出した。

「わかりました。ジョージの意思を尊重しましょう」

「あ、ありがとうございます……」

「じつはもうこの場で聞かせてしまっていたので、今さらダメと言われてもどうしようかと思いました」

「はっ？」

姉のおかしなセリフに首を傾げる暇もなく……ジョージの後ろからコツコツと靴音がした。

「えっ！？」

石段脇の暗がりから。

豪奢な見た目の少女が姿を現した。

タイプは違うけど姉に匹敵できるだけの美しさを持つ女王然とした少女は、微笑みながら牢に近寄ってレイチエルからノートを受け取った。

ジョージは驚愕と恐怖で声も出ない。

「あ、あ、あ……」

腰を抜かしたジョージに向かって、相変わらず不敵な笑みを浮かべたままの少女が典雅な淑女の礼をした。

「お久しぶりでございますわ、ジョージ様。私が父の諸国歴訪に行して以来ですの、一年ちょっとぶりでございますか……」

表情は淑女らしく……ただし目元だけ猛禽類のそれを浮かべた美少女が満面の笑みを浮かべた。

「幼馴染なのに一年離れただけで存在も忘れられた、不肖の許嫁、寝取られ女のアレキサンドラ・マウントバッテンですわ。お久しぶ

う……というよりお見知りおきくださいませ、でしょうかね？ それともお初にお目にかかります？」

「ひ……ひいいい！？」

「まあジョージ様。いくらどうでもいい女でも、レディに暗がりで化け物に会ったかのような反応は傷つきますわ……そう言えば、こも暗がりでしたわねえ？」

素敵な婚約者同士の再会に、レイチエルも微笑んだ。

「ジョージのいろいろな“懐かしい思い出”は、やはり生涯を共にする伴侶が持つのが良いでしょう。アレキサンドラ、ジョージをお願いしますね？」

「はい、お義姉さま」

「ジョージも、アレキサンドラの言う事をよく聞くんですよ」

「ひいいい！？」

「なにか返事が気になりますが……久しぶりの婚約者の再会ですもの、姉は引つ込みますから後はお二人で。積もる話もありますわよね。例えば……教育的指導とか」

レイチエルは鉄格子の外から響く悲鳴や罵声や詫びる涙声やを無視して、お茶を入れて楽しそうにすすった。

「さて、と……翼はもう片方ももぎ取りませんと、バランスが悪いですよね」

20・弟は昔を思い出す

姉は美しかったが何故か影が薄く、「よく見れば美人」などと言われていた。

じっくり見れば見惚れるほど美しいのに、意識して探さないと視界に入らない。殿下の妃の地位を狙う他の令嬢から「昼間の月」などと陰口を叩かれていたが、正直言えて妙だと思う。

エリオット殿下が男ながら光り輝くような美しさであるのもあって、隣で背景と化していた姉は確かに昼間の月だった。

「おい、ジョージじゃないか！」

サイクスの幾分焦りを含んだ大声に、ジョージはぼんやりと顔を上げた。

「ああ、サイクス……」

庭園の段差に座っているジョージの元にサイクスが駆け寄った。

「最近殿下の所に来ないんで心配していたんだが……お前どうしたんだ、酷くやつれているぞ！？ 寝不足か？ 飯食ってないのか？」
「いや、そういう訳じゃないが……ちょっと疲れることがあってね……」

「そういうときはステーキだ。疲労はステーキで回復する。赤身肉のレアを五百ぐらい食えば大抵の肉体疲労は改善するぞ？」

「いやいや、そういう問題じゃないんだ……」

ジョージは力なく笑って友人に説明した。

「アレキサンドラが急に帰国したんだ……で、彼女に相応しい男に鍛え直すって言われて、外務で猛烈な詰め込み教育を受けているんだ……もう頭が詰め込み過ぎで破裂しそうだ」

「なるほど！ うん、そういう時はステーキだな。ステーキを食べれば大抵の精神疲労はたちまち解消する」

「その方法で何でも解決するのはおまえだけだ」

「しかしアレキシサンドラか……親の海外視察について行ってもう一年くらいか」

「ああ」

「あれか？ 再会した瞬間は盛り上がってキスとかしちゃったのか？」

「馬鹿言え。そんなシチュエーションじゃなかったよ」

まさか姉に土下座中に彼女が隠れて見ていて、身内に一番聞かれたくない恥話を全部バラされたとは言えない。

「それ以来こき使われて殿下の所へ顔を出す余裕さえないんだ……」
「なるほどなあ」

サイクスがニヤリと笑ってジョージの肩を小突いた。

「ま、おまえはアレキシサンドラと仲良くやってろ。マーガレットは俺がエスコートするからよ」

「マーガレットは許嫁とは違う、もっと高尚な存在というか……おい、僕をなんだかんだという前に、サイクスお前だって立場は同じじゃないか。マーガレットにのぼせ上がっているって、マルティナは知っているのか？」

ジョージが人の悪い笑みを浮かべた。

「マルティナはおまえを熱愛しているからなあ。殿下と姉上とか、僕とアレキシサンドラとか、政略や腐れ縁の許嫁とは一味違うじゃないか。まあ殿下がいるからにはサイクスがマーガレットと結婚はないけど、マルティナよりもマーガレットに入れあげてるって知られたらまずいんじゃないのか？」

サイクスの許嫁は政略による婚約とはいえ、幼少の頃からサイクスにべた惚れだったらしい。彼女もまた国境付近へ赴任して都にいないけど、サイクスと結婚するのだから行きっ放しという事にはな

るまい。

他人の事をからかう前に、おまえはどうなんだ？ そんなちよつとした反発心を込めてジョージがサイクスを見たら……。

サイクスが振動していた。

彼の大柄でこつい身体が、小刻みというより何かの装置みたいに超微細な振動で震えている。

よく見れば汗がとめどなく噴き出し、目はうつろで手は硬直している。

「……ごめん。マルティナの事は言うべきじゃなかったな」

サイクスが落ち着いた頃。

ジョージがぼつりと言った。

「……ここ最近の騒ぎでさ、思い出したことがあるんだ」

「なんだ？ 昔の思い出か何かか？」

「ああ、思い出というかなんというか……おかしな記憶があるんだ」
ジョージは足元の小石を拾って投げ飛ばした。軽く飛ばしたそれは何メートルか宙を飛び、芝生に打ち込まれた杭に当たる。

「どつという訳か、前後が判らなくてそのシーン一つだけを覚えて
いるんだ」

それが自分の見たもののなのか、それとも夢なのかわからなかった。
本を読んで衝撃を受けたシーンを幻視したのかも知れないし、全然違う光景を頭の中で合成してしまったのかもしれないと思っていた。

「すごくいい天気で、青空の下に庭が広がっていて……」

多分園遊会か何かの記憶なんだろう。ジョージの視界には、子供

たちがいた。……。だけど……。

「問題は、その真ん中の脈絡もない光景なんだ」

庭園の広い池のほとりに、赤茶けた髪を持つ女の子が立っていた。ワンピースを着た小さな女の子は、池をずっと見つめていた。手に小石を持っていて、時々池へ投げている。幼児がよくやる遊びだ……その先に人がいなければ。

池の中には男の子が一人いて、岸から離れた所で溺れていた。必死に手をばたつかせ、水を飲んでしまうのか助けを呼ぶこともできない。必死にもがいて浮き上がるうとするのだけど、岸に近づくことはできない……女の子が石を投げつけるから。

溺れる子が岸に近づこうとすると、女の子が子供と思えないシャープな投石で威嚇をする。彼女の投げた石が当たった瞬間だけ、男の子の悲鳴がかすかに聞こえる。

「異様なのは、その女の子の顔なんだ……」

女の子は男の子を溺れさせているのに、何の感慨も無い平静な顔をしていた。

虐めている子の事を見下したような嘲笑でもなく、怒りを込めた憎しみの顔でもない。ただ淡々と「親に焚火の跡がちゃんと消えているか確認しておけ」と言われて仕方なく見ているような……つまらない作業をやらされていると言わんばかりの、事務的な顔だった。そして女の子の周囲には、よそ行きの服を泥だらけにした男の子たちが座り込んで泣いている。

彼女より体の大きい男の子たちが、顔を涙でくしゃくしゃにしながらしきりに「お願いだよ。もう勘弁してよお」「死んじやうよう。もうやめてよう」と女の子に訴えているが……少女は無視して溺れている男の子を監視している。

たまに女の子にすがりつこうとする子がいるけど……彼女はサッと躲し、その子にも石をぶつけて撃退していた。

「覚えているのはそれだけ。前後はないんだ。とにかくその光景だけが記憶に焼き付いているんだ」

「……なんていうか、ずいぶんシニールな光景だな」

「ああ。あまりにシニール過ぎて悪夢とも言えない。現実の物かも何か絵で見たのかもわからなかった。何かの暗喩かと思つて学者に聞いたこともあるけど、わからなかった」

「それを思い出したのか……ははっ、なんか最近のお前のねーちゃんみたいだな」

「そうなんだ……」

ジョージががつくりと首を落とした。

「……それで気が付いたんだ」

あの光景は、夢じゃない。

あれは現実にあつた事。

「この変な記憶は夢でも何でもない。ただ目の前で起きたことを覚えていただけなんだ」

「……もしかして」

「ああ……なにかの集まりで、気に食わない事をしたらしい男の子に姉上が制裁を加えているだけだった……」

押し黙つた二人の上を、陽気に誘われたツバメが一声鳴きながら通り過ぎた。

ややあつてジョージが顔を上げた。

「それでな。それを思い出したら、一つ気が付いたことがあるんだ」
「なんだ？ もっと怖い話とか、勘弁だぞ？」

「それは聞いてもらわないと判らないが……僕、アレキサンドラが苦手だったんだ」

アレキサンドラとは幼少時からの幼馴染とはいえ、正直それほど仲が良くない。

何しろ彼女には昔から罵ったり酷いいたずらをしたりされていた。いじめに近い事をされていた記憶があるから苦手意識が刷り込まれている。

さすがに最近では手が出てくることは無くなったけど、今でも上から目線で散々口撃されていて、彼女が親の視察旅行について行ったときは正直しばらく会わずに済むとホッとしたものだ。

「でも、それには僕の誤解もあったんだ」

「誤解？ 俺はある程度の大きさになってからしか知らんけど、彼女はいつもそんな感じだったろ？」

「ああ。だけどさっきの記憶が何だったか判ってから思い返すとな……僕は色々記憶を混同していたんだよ」

ジョージに何かしてくる女の子は一人じゃなかった。

「よくよく考えれば、一人の女の子がしてきたんじゃないかなったんだよ。顔を覚えてはいないけど、小さい頃に何かしてきた女の子には金髪だった時と赤茶色の髪だった時があるんだ」

「おい、それって……」

「そう。僕を見るなり罵ってきたのは金髪の子。だまって何かしてくるのは赤茶の髪の子……いたずら、というか実験をしてきたのはアレキサンドラじゃない。姉上だ」

サイクスが天を仰いだ。今日も空は高い。

「……アレキサンドラもとんだ風評被害だな」

「そうなんだ。彼女には悪い事をした……彼女を一番苦手になった記憶が、彼女じゃなかったんだから」

「……何をやられたんだ？」

「……これも、一シーンしか覚えていないんだけどね」

僕はいくつぐらいたっただろうか？ 庭先で、カタツムリを見つけて遊んでいた時。

いつの間にか横に来た女の子に手を取られ、庭の奥の方へ連れていかれたんだ……。

赤茶の髪の子は人目のない所へ来るなり、いきなり僕のズボンを引き下ろした。

「な、何！？」

「うん、ちよつと……お尻貸して？」

そういう彼女の手には、爆竹が箱で握られていて……。

「まで、おいそれは……どうなったんだ！？ 何をされたんだ！？ いったい何を……いや、やっぱいい！ もう怖くて聞きたくねえ！？」

「ははは、心配するな！ 僕だって覚えているのはこれだけなんだ！ 姉上が僕で何をやったのか覚えてないんだ……覚えてないんだよお……」

庭園から響いてくる男二人の悲鳴と妙に甲高い空笑いに、通りがかりのメイドはいったい何だろうと首を傾げた。

最近姉上は綺麗になった。

好きなように生きているせいか、自分を型にはめずに生きているせいか。

本当の彼女は艶やかで、輝くような美しさを持つ人だった。美貌の殿下に引けを取らないくらいに。

姉上は本当は、昼間の月なんかじゃない。

太陽も食らいつくすような、シャレにならない爆発力の超新星だった。

21・令嬢は地下でセッションをする

「何かないのか、何か!？」

今日も今日とてエリオット王子の怒りは収まらない。

地下牢に立て籠もっているだけの元婚約者に虚仮にされっぱなしだ。何か一矢報いてやらないと、到底彼の気は収まらない。

……当初は令嬢に命乞いさせるのが目的だった筈なのだけど、いつの間にか目標が後退していることは気が付かないことにして無視をする。

今を生きる。それがエリオットだ。

先日は片腕とも頼むジョージ・ファーガソン公爵令息が、致し方ない理由でエリオットの側近グループから脱落した。

視察旅行から帰国した彼の許嫁に尻を叩かれて、後継者教育を優先させることになったのだ。彼は毎日毎日朝から晩まで、後継者教育で将来の嫁にこつてり絞られている。

すっかりやつれた彼の姿に、エリオットたちは落涙を禁じえなかった。

それはそれで仕方のない事だ。

だが、しかし。その許嫁は宿敵レイチエル・ファーガソンが、ジョージを始末する為に呼び寄せた刺客の疑いがある。頭が上がりない相手を味方につけるとは、ヤツは何と汚い手を使うのか!？

エリオットは世界の平和とマーガレットとの輝く未来の為に、なんとしてもレイチエルをギャフンと言わせなければならぬと決意を新たにした。

とは言っても。

いつも先手を取られてばかりで、勝ったためしがない。そんな側近連中と会議をしていても、一向に名案は出てこなかった。そもそも出てくるものなら、とうの昔にレイチエルを負かす事ができている。

皆で煮詰まっていると、マーガレットがお茶を入れて持ってきてくれた。

「皆さん、どうぞ」

「おお、ありがとう！」

男たちが“我らの天使”が淹れてくれたお茶に群がっている間、マーガレットは会議の議事録を取っていた紙を見ていた。

「エリオット様、なかなかいいアイデアが出ないんです？」

「ああ、これはというものが出てこない……何をやって攻めても返し手がありそうで……」

王子様、始めから吞まれてる。

攻撃プランと相手にされた事のリストを交互に眺めていたマーガレットが、その中の一行を指し示した。

「エリオット様。何も新しい事をしようとしなくても、レイチエルさんにやられたことを改良して返してやったらどうですか？　これがレイチエルさんの考え付いた限界なんですよ？　それを拡大して返してやったら、打つ手がないんじゃないですか？」

マーガレットの何気ない提案に、エリオットは手を打った。

「それだ！」

王子様、気づくのがかなり遅い。

為政者としてかなり不安な要素を露呈しながら、エリオットは嬉々としてプランを議論し始めた。

いつものようにまったりと怠惰な一日を過ごし、そろそろ寝ようかとベッドメイキングを始めたレイチエル。

枕にラベンダーのオイルでもたらそうかなと思っていた所に、扉を開ける音がしてドヤドヤと多数のお客が降りて来た。

「あら、こんな時間に珍しい」

「はっはっは、邪魔するぞレイチエル！」

もう夜だと言うのに妙に元気なエリオットに、レイチエルは首を傾げた。

いや、おかしなテンションでハイなのは、多分頭がアレのせいだと思うけど……彼はなんでなのかヴァイオリンのようなものを持っている。いや、ヴァイオリンそのものだ。

そして彼の後ろに付き従うサイクスは樽を二つ担いでいた。

その後ろのマーガレットは大量の鍋。

さらに名前も覚えていないヤツが籠にいっぱい空き缶。

最後にうんざりした顔の牢番が何故かトライアングル。

レイチエルは額に手を当てた。

「これはさすがに、何をしているのかわかりません」

「むはははは、なんだと思うレイチエル？ 当ててみる！」

「……廃品回収？」

「それは王子の仕事なのか？」

「地下牢に用もないのに日参するのも、王子の仕事じゃないですね」

おかしな一行は地下牢の前室に、抱えて来たガラクタを並べ始めた。

配置を見てレイチエルも彼らの意図を悟る。鍋の並べ方がドラムセットのそれだ。

「なるほど……私を寝かせないつもりですか」

口の端を持ち上げて得意満面のエリオットはギターを構えてレイチェルに申し渡した。

「ちよつと夜に合奏の練習をするのに、音が響いて構わない場所が無くてな。それで地下牢なら派手に音がしても構わないだろうという事になったわけだ。我々は勝手に演奏しているから、レイチェルは寝ていて構わんぞ」

そして“してやったぜ！”と言いたげな顔で宣言する。

「ああ、もちろん聴いていてくれても構わないぞ？ あとで感想を聞かせてくれると嬉しいな」

最後にいかにも見せつけるように全員耳栓を詰め、各々の楽器を構えた。

エリオットのヴァイオリンが、百年使っていない鉄扉もかくやという錆び付いた金切り音を張り上げた。

サイクスの持ったバチが樽を滅多打ちにしてバカみみたいな轟音を立て、マーガレットの並べた鍋がスティックで叩かれて甲高い金属の跳ね返る音を響かせる。

準備の時に呼ばれていた名前を信じるとボランスキーとか言うヤツが、紐をつけた空き缶をやたらにガチャガチャ振り回し、遠い目をした牢番がおかしなタイミングでトライアングルを鳴らす。

無秩序な騒音が地下牢に響き渡る。ただ耳障りな音をそれぞれに鳴らしているだけで、耳栓をしていても鼓膜が痛くなるひどい音だった。

「意外と楽しいな、これ！」

「ウハハハハハハハハハ！」

「あの、あつしはいる必要あるんですかね……」

牢番のつぶやきはそもそも音量が低すぎて、残念ながら誰の耳にも入っていない。

レイチエルは昼寝用の耳栓をはめると、おとなしく椅子に座って聞いている。

何も言わない辺りが不安を書きたてるけど、いつもなら早々の反撃があるのに黙っているのがエリオットの機嫌をさらに良くした。

「張り切っていくぜ！」

「おおーっ！」

「あの。勤務時間終わってるんで、あつしはもう帰りたいんですけど……」

「今夜はオールナイトだ！」

ここで一つ、エリオットが計算に入れていなかったポイントがある。

ただ無茶苦茶に物を叩いているつもりでも、人間が長時間叩いていると……どうしてもリズムを取りたくなる。

無意味にただ派手な音を立てているつもりでも、ずっと続けていると意識しないうちに規則的な音が生まれてくる。

段々と。そう、段々と無秩序な騒音にメロディが生まれてきた。

目をつぶって聞いていたレイチエルが不意に立ち上がる。

彼女は木箱の山を漁りに行き、帰ってきた時には手にトランペットを持っていた。いつかのあの晩、エリオットを優しき音色でけたましく叩き起こした……あのトランペットだ。

少女はいつか月に向かって吹いた時のように、トランペットを唇に当てる。眠るように目を閉じて、肺いっぱい空気を吸い込んだ

彼女は初め静かに金管楽器へ息を吹き込んだ。

……騒音で満たされた地下空間に、一本背に骨の通った見事な音色が流れ始める。

その時、歴史は動いた。

この中でおそらく唯一、音楽の素養があるのはレイチエルだろう。彼女が参戦したことで、てんでんばらばらに自己主張していた楽器？ の音に方向性が生まれた。

ベースになるメロディが生まれたことにより、すでにリズムを取り始めていた各自の演奏？ が一つの流れに吸い寄せられる。レイチエルのトランペットに合わせるように、ヴァイオリンの節回しが変わる。鍋を叩くリズムが変わる。

気が付けば六人の楽器？ を奏でるタイミングは、一つになりかけて重なり切らない微妙な合奏に変化していた。なんとなく不協和音を含んだ演奏がもどかしい。

ただ不快な騒音を出していたはずなのに、皆が音を合わせようと必死に耳を澄ませてリズムを探る。

「……くつ、俺がメインの筈なのに！ このままではレイチエルに喰われてしまう！」

エリオットは猫がガラスをひっかく音の方がマシなヴァイオリンを必死に操った。バンドの主導権を途中参戦のレイチエルに奪われるわけにはいかない。

当初の目的を完全に見失った王子様は、主旋律を奪還せんとトランペットに挑み続ける。

レイチエルの魂のトランペットが激しくシャウトする。

エリオットのヴァイオリンがパッションを込めて熱く鳴り響き、サイクスの樽を叩くバチが脳天気ハイなリズムを打ち鳴らした。マーガレットの鍋の大群が間奏部を華麗なドラムソロで魅せる。ボランスキーは自分に酔って空き缶の束を振りまくっている。

そしてトドメに、早く帰りたいと顔に書いてある牢番のやる気のないトライアングル。

完璧だった。

完璧なセッションだった。

お互いの強い個性がぶつかり合い、反発し合いながら一つの音色を作り出す。

楽譜もない。題材になる曲もない。即興で作られたメロディが増幅されて六人を包み込み、いつしか新しい一つの曲が誕生した。

聴き惚れる客は無く、楽譜に採られる事も無く。ただ今この瞬間を満たすだけの刹那の魂。

二度と聴くことのできない一曲に、五人はしばし陶然と身を委ねる。

そして牢番は早く帰りたい。

そんな彼らが忘我の境地に達した瞬間。

「うるさいですよ！ 今、何時だと思っているんですか!？」

女官長が怒鳴りこんできた。

「いい加減にして下さい殿下！ 遊びたいのは結構ですが子供じゃないんです！ 王宮には多数の人間が暮らしているんですよ!？」
女官長は目を白黒させるエリオットからヴァイオリンをひったくった。

「い、いや、俺は……」

「私！」

「はいっ！……わ、私はそんなつもりでは……」

「こんな真夜中にガラクタを並べて楽隊ごっこをすること自体がおかしいのです！」

「すみませんっ！」

サイクスが横から口を出した。

「で、でも女官長。殿下はレイチエル嬢を……」

懲らしめようとやったのだ、と言おうとしたが。

女官長がため息をつきながら頷いた。

「そう、それもです！　いくら外に響かなさそうな場所が地下牢とはいえ、可哀そうにここに閉じ込められているファীগソン様の迷惑を考えてあげなかったのですか！？　ほら、頭まで布団をかぶって可哀そうに……」

「え？」

言われて一同が振り返れば、さっきまでトランプを熱奏していたはずのレイチエルはベッドに潜り込んで丸まっている。

「ああ、こんな所に閉じ込められた上に酷い迷惑をかけられて、お可哀想に……」

「いや、待て！　レイチエルはさっきまで」

王子の弁明を否定するように、レイチエルがひょこつと顔を出して涙ながらに訴えた。

「女官長……うっ……私寝たいのに、殿下たちが押し入ってきて……」

……

「き、貴様！？　一人だけ無関係を装うとはずるいぞッ！？」

「うっ……つらかったよお……」

「まあああ！？　殿下っ！　夜中にこんな迷惑をかけられたファীগソン様が可哀想だと思いませんかの！？」

「いやだから、コイツだつてノリノリで……」

「この姿を見て、どの口からそんな事が言えますの！　上に来なさい、お説教です！」

「本当なんだ、聞いてくれッ!？」

「え？ あたしらも？」

「あつしも!？ なんで!？ もう帰りたい!」

「黙りなさい!」

即席のバンドはレイチエル以外全員連行され、女官長の朝までお説教コースに強制参加と相成った。

さっきまでの事が嘘のように静まり返った地下牢で、レイチエルはやれやれと枕を整え、明かりを消したのだった。

22・少女は暁に叫ぶ

早朝の礼拝堂。

祭壇の前にマーガレットが跪き、熱心に祈っていた。

……正確には、熱心に祈っているように見えた。

誰にも邪魔されずに考え事をまとめるには、礼拝堂で祈るのが一番よ。マーガレットは母にそう教わった。

祈っている人に話しかけるのは失礼だ。普段人気者でも、ここでは邪魔されることはない（母・談）。

何より世の中の苦情を言いたいことは、だいたい神様の責任だ（母・談）。

マーガレットは両手を合わせ、目を閉じて首を垂れていた。ぶつぶつとつぶやくその言葉は傍目には聖句に聞こえる。

例えば隣に座っても聞き取れない音量で、彼女はこう口に出していた。

「なんとかここまで持つて来たつーのに、なんであと一歩がうまくいかないんですか神様！ やつと……やつと王子様をゲットしたんすよ！？ だけどあのクソ女が屈服してくれなきゃ、王様が帰ってきたらひっくり返されるかもしれないじゃない！ そのあたりよろしく願いますよ？」

マーガレットの掌を合わせて握った指先にギュツと力がこもる。

「そりゃここまで幸運は感謝してますよ？ 貧民街スラムで生まれて十歳まで元気に育つなんて運がいい方だし？ ちよつとそこらじゃ見

ない美少女に育ったし？ 変態親父ロリコンに売り飛ばされる前にママが男爵様ババをゲットしてくれたし？ 貴族のボンボンたちは素直で可愛いあたしにメロメロだし？ 王子様だってあんな血も涙もないイカれた女よりあたしが良いって言うてくれてんですよ……もう幸せエピソードくらしまで突っ走るっきゃないでしょ！」

マーガレットの呟く声がだんだん大きくなる。

「だいたい貴族令嬢血の青いメスどもってのはなっていないのよ！ 何あの自分は特別みたいな顔してお高くとまるサルどもは！？ あたしの婚約者に近づかないで？ はあ？ 木で鼻をくくったみたいな態度であしらって、政略結婚だから仕方なくって言い放って男を幻滅させたのはどこの誰なの！？ そのくせあたしが彼に優しい声かけたら、婚約者こを取られるって焦りだすとか馬鹿なの！？ 死ねよブタども！ てめえらの態度が全部火いつけとるんじゃボケが！」

マーガレットの独り言はどんどん大きくなる。怒りに肩も震えてきた。

「フレンドリーな態度で、こまめにケアするのは基本でしょ！？ 単純な男どももなんか『貴方だけだよ？』『私はわかってるよ？ 貴方が頑張ってるの！』『誰に何を言われたって、貴方には私が付いてる！』の三つだけ囁けばその気になっちゃうんだから！ こっちは好かれる努力をしてるんだよ！？ 営業努力をちったあしろよくソツタレな嬢ちゃんどもが！ そんな態度で結婚して、あとは長男さえ生めば一生左うちわの終身雇用だど！？ ふざけるクズが！」

とうとう怒りで頭が沸騰かれのおあいてしてきて叫び始めるマーガレット。

「ふんぞり返ってろくろく顧客対応きそくのおやくそくもしくせに、横から契約取られたら業界ルールおじょういんりを無視してるだど！？ だったら足で取り返さんかエリートども！ 場末の娼婦だつて常連客には細かく気遣いしてんだよ！ お偉いおまえらができないとは言わせんわ！」

もう完全に頭に血がのぼって、祈ってる体さえ忘れるマーガレット。

「あたしはエリオット様を無事ゲットしてアイツらを見下してやる

んだから！ ママは貧民街の娼婦だったけど、ちゃんとお客を選んで付き合ったから男爵夫人にまで成れたんだもん。娘のあたしはママ譲りのこの美貌で、男爵家から一気に王子様^{てっぺん}取ったる！」

祭壇の前でビシッと勝利のポーズを決めるマーガレット。不信心この上ない。

「それにしても……あのレイチエルを何とかしない事にはエリオット様との未来が薔薇色にならないわ。幸いレイチエルの方はエリオット様にあんまり惚れてる様子が無いけれど……あんなにカッコいいのに、なんでレイチエルは気にならないのかしら。まあ確かにジョージもカッコいい方だから見慣れているのかもしれないけれど……でもエリオット様は別格にカッコいいじゃない。何が不満なのかしら」

主に中身が。

「まあ、あいつも確かに見た目が良いもんね。男にチャホヤされるのに慣れているからなのかな……」

多分違う。

「にしても……あの女、地下牢に入ったら薄着のせいか、素材の良さが目立つわね……。あれホントにコルセットで“作って”ないの？ ウエストなんかこーんなんだし……。あの胸、マジでパット入ってない？ ケツのラインから見て足も長いわよね……」

意外にちゃんと見てるマーガレット。薄着だけでエキサイトしている男たちとは大違い。
バカども

マーガレットはハツとする。

「いや、ちよつと待って……顔があたしといい勝負な上に、スタイルがメツチャ良くって……しかも公爵令嬢で頭もいい？ 王様だか王妃様だから覚えめでたくって、エリオット様に何されても余裕で躲してると……」

マーガレットは愕然とした。キツと祭壇を睨むと、主神像をビシッと指さす。

「ちょっと神様、どういうことよ!? 生まれは最高で才色兼備、運もあるって……レイチエルばかりエコ贖きゆうりようじゃない! 幸運を平等に分配するのがあんたの仕事でしょ!? 寄付金きゆうぎんもらってる分だけ働きなさいよ給料泥棒! ……いや、もちろんあたしに多めに配ってくれる分には嫌とは言わないけどね?」

少女は顎に手を当て考えながら祭壇の前をうろろ歩き回る。

「いや、そもそも考え方が違うのかしら? レイチエルはもらい過ぎでしょ? あたしはいまいち上がり切れないし……貴族でも、もっとパツとしない連中もいるわよね? 神の恩寵にこれだけ差がつくって、いったい何が違うのかしら……」

うろろ歩き回ったマーガレットがぴたりと止まった。

「まさか……いえ、そうよ……きつとこれだわ!」

主神像を再度指さし、マーガレットが叫んだ。

「神様、あんた面食いでしょ!? 顔が良いレイチエルやあたしは運が良くって、さらにスタイルが良いレイチエルは特別枠! くそう、謎は全て解けた!」

祭壇前で地団太を踏む少女。不信心を通り越してバチあたり。

「そう言う事かあ! クソツ! それじゃあたしはいつまで経ってもレイチエルの上に行けないじゃない! 神様スケベオヤジめ! 今までの喜捨が全部無駄じゃない!? 祈れば人生なんとかなると思ってた、あたしの純情を返せ!」

返済を主張できるほど立派な信仰心でも無いし、通算で財布をひっくり返せば弁済できる程度の寄付金だったのはこの際無視するマーガレットだった。

礼拝堂から何やら奇声が聞こえると言うので駆けつけた神父は、遠目に少し扉が開いているのを見つけた。動物が入ってしまったて鳴いているのかもしれない。

「はて、発情期の猫でも入り込んだかな?」

中を確認しようと近寄った神父が扉に手をかける前に、両開きの

扉が中から押し開けられた。

「？」

綺麗な赤毛をツインテールにした少女が、取手に手をかけ立っている。俯き加減で、肩が震えていた。

「おや、お嬢さん。何かありましたかな？」

「……神は」

「はい？」

上を向いた可愛らしい少女は、鬼の形相で絶叫した。

「神は、死んだ！」

「なにごと！？」

腰を抜かす神父を横目に、マーガレットは泣きながら走り去る。

「くそう……ちくしょう……あたしはてっぺん取ってやるんだからあ……」

神様が面食いでレイチエル優先だろうと、私はそんなのぶっ飛ばしてエリオットと結婚してやる！

マーガレットはくじけない。雑草のごとき生命力で、何度だってトライしてやる。

生まれついでた貴族令嬢の上を行ってやる。

走るマーガレットは進路を睨んだ。

「そうよ、お貴族様にはお貴族様をぶつけてやるのも一興じゃない。レイチエルを引きずり降ろそうとしていた、エリオット様狙いのブスどもを焚きつけてやれば……よし、それで行こう！」

マーガレットは、上がり始めた太陽に向かって拳を突きあげた。

「神が何だあ！ まっけるもんかぁーッ！！」

レイチエルは闇に忍んで来たメイドから、定期報告でマーガレット爆走の一件を聞いた。

「なるほど……そういう方でしたか」

「はい。独り言の多い方ですね……調査担当が三日がかりで調べた身の上話を全部口に出してましたよ」

「調査担当は泣くに泣きませんね。先に言ってくれたらよかったのに」

令嬢はすっかり冷めきつたお茶を一口含み、天井を見上げた。

「しかし……」

「はい」

「めんどくさそうな方ですね」

帰りかけたメイドが腰を落として投擲用のナイフを抜いた。レイチエルが手を上げて制する。

外からの扉が開き、鎧のこすれる音を響かせて一人の少女が降りて来た。簡素な略式鎧に埃避けのマントを羽織り、騎士の旅装に身を包んだポニーテールの少女だ。漆黒の髪とお揃いの黒い瞳を持っている。

「すまないな、もっと早く会いたかったんだが遅くなった！ これでも家にもよらずに直行してきたんだが」

「いいえ、マルティナ。よく来てくれたわ」

メイドに牢番の椅子を用意させ、レイチエルは微笑んだ。

「近況の報告の前に……お茶でもどう？」

23・令嬢は昔馴染の慰問を受ける（前書き）

ザマアその2？ それとも小物だから1・5？

23・令嬢は昔馴染の慰問を受ける

レイチエルが本を読んでいると、ドヤドヤと扉の方から人が入ってくる音がした。

レイチエルの指先がピクツと反応する。

珍しくレイチエルが警戒を露わにして、ちらりと石段の方を見た。

警戒している理由は、足音が知らない集団の物だからだ。

外を監視しているこちらの監視者がなにも合図を送ってこないのは、危害を加えられるような武装をしていないということ。エリオットの配置した騎士が騒がないのは、表立って地位がある人間が正規の手順を踏んで入ってきたということ。

だけど宰相その他の政府要人が事態解決のために来るのなら、政庁内に配置した部下から情報が入っているはず。表の権力があつて公式訪問でない。警戒するだけの要注意人物だ。

すぐに石段をぞろぞろ降りて来たので姿を確認して……レイチエルは興味を失った。

なんだ、^{エリオット}バ力殿争奪戦の噛ませ犬たちか。

牢の中にいるレイチエルに向かって、豪華に飾り付けたドレスをこれ見よがしに着ている令嬢が口火を切った。

「お久しゅうございますわ、ファーガソン様……いえ、こんな状況ですと“様”なんて付けたら嫌味になるかしらあ？」

旧知の仲と言ってもいい……もちろん良くない関係の……アグネス・サセックス侯爵令嬢が挨拶するのをレイチエルは無視した。

但し、『コイツの頭は最近の状況を理解していない』という情報が追加されている。

次々と並み居る令嬢たちが同様に慇懃無礼の挨拶を続ける。どうもこいつも、ついこの間までエリオットと許嫁のレイチエルをやっかんで陰口を言いふらしていた連中だ。

“王子と婚約するとこの手の連中が湧いてくる” “どうせ口先だけだから、悪口を言われるのも有名税” “でも本当に引きずりおろしを画策していたら先制して叩け” ……次々と父と母の教えが頭の中をよぎる。

「……あら？ 陰謀は先に叩けつて、ただの小娘に察知しろつて難しくないかしら」

「なにかおっしゃって!？」

「いいえ」

クスクス笑うのを見咎めた令嬢の一人に語気荒く聞かれるが、レイチエルは何でもないと言って読書に戻った。

「ファーガソンさんはやはり殿下に好かれる努力が足りなかったのではなくて？ まあ、飽きられるのは早いと思っていましたけどお？ まさか牢屋に入れられるほど嫌われたとは」

「いいいえオードリー様。レイチエル嬢のパツとしなさでは、そもそも殿下のお心をつかむ事が最初から難しいですわ」

「まあ失礼！ そうね、そんな当たり前の事実を見落としていたなんて、私も配慮が足りなかったわあ」

聞こえよがしに堂々と貶してくる令嬢たち。たぶん咎めても、一応敬語で話しているので失礼な事は言っていないと強弁される。そして彼女たちは今度はそれを盾にとって、言いがかりで貶められたと他の人々に宣伝して回るのだ。

レイチエルには効果が無いけど。

鉄格子の前で、大げさに喜怒哀楽を示しながらレイチエルの悪口をしゃべりまくる令嬢たち。

鉄格子の反対側で、我関せずと黙って本を読んでるレイチエル。盛装して石畳に立ち、ハイヒールが痛くて時々重心をかける足を入れ替えてる令嬢たち。

楽なファッションでアームチェアにだらしなく寝そべり、読書を続けるレイチエル。

散々上品に見せかけた下世話な悪口を言いまくり、しきりにレイチエルに話を振る令嬢たち。

読書に没頭してはつきりしない生返事しかせず視線一つ向けないレイチエル。

とうとう一人がキレた。

「ちよっと！ これはなんなのよ！？ 牢の中のアンタが偉そうにふんぞり返って適当に相槌打ってて、あたしたちが立ったままって…… 立場わかってんの！？ どういう事よ！？ まるつきり逆じゃないのさ！」

他の令嬢も内心同じように思っていたようで、一人がキレれば皆も一斉に騒ぎ出す。

「ちよっと、なんとか言いなさいよ！？」

「囚人のくせに立場わかってんの！？」

レイチエルは慌てず騒がず。

のんびりページをめくり、外の令嬢たちが騒ぎ疲れて黙った瞬間にボソツと言った。

「嫉の足りない人たちですね。あと五ページで読み終わりますから、それまで待つてなさい」

「な、なんて言い草よ！？」

「ちよっと貴方、私たちを敵に回したらどうなると思っているの！」「何を言われようと気にしない。」

どれだけ怒鳴ってもレイチエルが本から視線をずらさないのを理解して、徒勞で疲弊が浮かぶお嬢様たち。

結局お互い顔を見合わせながら押し黙ったまま、レイチエルが本を閉じるのを待つことになった。

サイドテーブルに本を置くと、レイチエルは爽やかな笑顔で冷めたお茶を啜った。

「こんな結末とは思いませんでした。たまには推理物もいいです
ねえ……うん、同じ作者のを何冊か入れてもらいましょう。ああ、
喉が渴いたから冷めたお茶がむしろ美味しい……」

にこにこ笑顔でカップを置くと、やっとレイチエルは令嬢たちの方を向き直った。散々待たされて、デコボコな石畳に痛めつけられた足をかばう少女たちを見る。

「あら、失礼。どうぞ座って楽になさって？」

「座る場所がどこにあるのよ!？」

痛みにもう涙目になっている一人が叫ぶ。

レイチエルは家具が牢番用の机と椅子しかない前室を見た。

「そっち側は私の管轄じゃありませんので、どうぞ苦情はエリオット
ト殿下へ」

「あ、あんたねえ……!？」

「まあ別に海の上と言っわけでもないんですし、座ろうと思えばどこ
でも座れるでしょ?」

「こ、このお!？」

貴族令嬢……それもマーガレット辺りならともかく王子妃を狙う様な家柄の子女が、牢屋の石畳なんかに自主的に座れるわけがない。歯噛みしながらも退去も着座も出来ない令嬢たちに、レイチエルは微笑んで促した。

「すいませんが読書中は人の話を聞いていませんので、お話を最初

から繰り返していただけますか？」

「ファーガソン、あんた……！」

視線だけなら人を殺せそうな令嬢たちの圧力が凄いが……レイチエルはどこ吹く風と涼しい顔。何しろこっちは視線なんか頼らなくとも人を殺せる令嬢だ。

「さて」

レイチエルは手をこすり合わせた。

「皆様、最近お顔をお見掛けしていませんでしたが……息災なようで、なによりですわ」

「……貴方も牢屋に何か月も入っている割には、お元気そうですね……」

「ええ、健康的に暮らしていますので！」

イイ笑顔のレイチエルに少女たちはたじろいだ……彼女たちは表情が豊かなレイチエルに驚いただけで、まだ自分の身に迫る危険に気が付かない。王子の許嫁になり切ったレイチエルしか知らない彼女たちは、危険な野生のレイチエルを見たことが無いのだ。

「健康と言えば、バーバラ様は大丈夫でした？」

「は？」

いきなり聞かれて意味が判らない令嬢に、レイチエルは過剰なまでに心配そうな顔をする。

「最近流行り始めたドーナツに、さらにたっぷり生クリームを付けて食べるのが好きだとか。わずか二か月で十キロもふくよかになられ、仕立て直しが間に合わないとドレスのお店が悲鳴を上げているそうですね。そんなのは笑い話ですけど、急激に太……ふくよかになられたりするのは心臓に負担をかけるそうですね。先週のお医者様の結果はいかがでした？」

「な……！？」

言われた令嬢は隠しきれないのを自覚しているだけに、レイチェルのあけすけな指摘に絶句する。

そして他の令嬢たちは矢面に立った彼女より冷静な分、レイチェルの言葉のおかしな点に気が付いた。

二か月前は、レイチェルはすでに牢に入っていた。
ましてや先週に情報が洩れる筈もない個人宅で健康診断を受けたことを、彼女がなぜ知っているのか？

無言になった少女たちの顔を見回し、レイチェルは別の一人に声をかける。

「カーラ様」

「な、なんですの……？」

警戒も露わな令嬢に、可愛らしい笑顔でレイチェルはいきなり核心をぶつけた。

「先週の仮面舞踏会^{マスカレード}はいかがでした？」

「……！？」

顔が引きつるカーラ嬢。他の令嬢たちは不審げに囁き合う。

「先週？ 仮面舞踏会なんてありました？」

「いえ、私の閨閥には招待状なんて流れてませんでしたけど……」
レイチェルが笑顔のまま爆弾を落とす。

「ああ、舞踏会と言っても社交界の公式な招待ではありませんわ。
同好の若手貴族が私的に集まって……」

「ああ……」

大方、有志が集まったダンスサークルみたいなものだろうと令嬢たちは納得した。時々あるのだ。ダンス下手で夜会が怖い少年少女が、練習の為に集まったりすることが。

しかしそんな事が、顔が引きつる話題の訳が無い。

「……みんなで裸になってダンスそっちのけに、イイことをする会合なのだそうですわ」

「！」

驚愕に叫ぶこともできない令嬢たち。

「嘘よ！？ そんな集まりなんて知らないわ！」

もう白い顔色で叫ぶカーラ嬢。

王子妃をねらう高位貴族の令嬢が、いかがわしいサークルの常連なんてトップクラスのスキヤンダルだ。王子どころか、同格貴族の初婚相手も難しくなる。

「私を陥れるつもりね！？ 自分が失脚したからって、私まで巻き込もうなんて……この悪魔！」

カーラはレイチエルに向かって叫びつつも、横目でせわしく同志たちの顔を見た。

今の話、この令嬢たちが黙っていてくれれば揉み消せる。だけど……そもそもレイチエルからエリオット殿下を奪い取り、自分こそが王子妃になるうという集団だ。呉越同舟もいい所の彼女たちが、レイチエルの重しが取れた後に黙っているとは思えなかった。

やはりレイチエルの発言を否定し、しらを切り通さなければ……！
そうカーラが決意したところへ。

「いやだわ、そんなつもりじゃ……」

困った様子のレイチエルが首を振った。

「ただ単に興味があっただけですわ？ 先週のその会で、テイラー伯爵家のジョン様の初物を絶対食ってやるって豪語なされていたんでしょう？ ジョン様を落とせばカーラ様は童貞狩り五人目成功で、サークルから永世肉食女子の称号をもらわれるとか。同好の方でも滅多に成し遂げられない栄誉だそうですね？ でしたら成功したかどうか、気になるのが人情というものでしょう？」

「……！」

令嬢たちはあまりの情報に、もう声にならない。いかがわしい集まりに顔を出しているどころか、並みじゃないほど爛れた生活を送っているなど……これが知れば、もはや爵位持ちとの結婚は難しい。

カーラ嬢は否定も口留めも……もうそこまでの気力も無く、崩れ落ちて石畳に尻餅をついた。

笑顔で次の獲物をサーチし始めるレイチエルに、他の者たちも慄いた。

コイツは、誰だ！？

朗らかな令嬢の皮を被る得体のしれない化け物に、少女たちは身体の芯から震えが止まらない。

それでも一人が勇気を出した。

「あ、貴方……以前と性格が違い過ぎない！？」

レイチエルは微笑んだまま。

「あら、私は昔からこうですわ？　ただ、王子の許嫁という立場がありますと、行儀を良くする方が優先になりました……」

レイチエルは啞然としている一同の顔を眺めながらクスクスと笑う。

「面白いですわよね。私を舐めてかかっている人って、私に口がないと思って公言できない自分の自慢話や他人の噂話をペラペラしゃべるんですよ。なんで私がしゃべらないなんて思うのかしら？

ふふ、おかしい」

令嬢たちの顔から血の気が音を立てて引いていた。

大なり小なり、身に覚えがある。競争相手にマウンティングするのに、自分のやらかし自慢で脅すこともある。他人の不名誉な噂話なら、なおさら喋りたい。

「それに、私が監獄へ入れられた事を怒っている人たちもたくさんいまして……ありがたい事ですわよね。その方たちが今回の事件に関わった疑いのある方々を、調べて回ってくれているんですの」

令嬢たちの顔面には、もう下がる血液も残っていない。レイチェルの入獄に関与したと疑われるのはエリオットとマーガレットだけと……三番目に誰が怪しいかとなると……。

倒れそうな少女たちの前で、レイチェルがわざとらしく手を打った。

「是非とも楽しいお話を続けたい所なんですけど、暇な私と違って皆さまはお忙しいのでしょうか？　もし習い事とかあるのであれば、残念ですわね」

笑顔ながらも目が笑っていないレイチェルの言葉を、令嬢たちはきちんと理解した。

これ以上続けようってんなら、どっちか首を括る所までとことん続けようじゃないか。だけど今引き下がると言つのなら、見逃してやってもいいぜ？　-

「残念ですが、手習いの時間ですわね！　お、おほほほ、ごきげんよう！」

入る時も率先していたアグネス嬢が、撤退する時も先陣を切った。

「お名残り惜しいですが失礼しますわ！」

「ごめんあそばせ！」

令嬢たちが痛みにくくしている足を酷使して、とにかくレイチェルの視界からの脱出を図る。千鳥足で石段にたどり着き、何とか地上まで登って……。

「開かない！？　」

アグネス嬢が押しても引いても、外へ出る扉は開かない。

何人かが手伝っても、少し動くぐらいで全然開く様子が無い。

令嬢たちが帰る様子が無いのを見て、次の本を手に取ったレイチ

エルが目を細めた。

「あら。皆様、お時間があるようですわね」

「い、いや……そんなじゃなくて!？」

「と、扉が開かないんです!」

「まあ……その扉、鍵が付いていないのでいつでも開いてますわよ? マーガレット様なんか、牢番さんがいない時でもひよいひよい入ってきますわ」

レイチェルが手にした本を置いて、椅子のリクライニングを解除した。

片肘をついて頬に指をあて、斜に座った足を組む姿は伝説の魔王のようだった。

「では皆様、積もる話もありますし。時間の許す限り、楽しく“おしゃべり”……いたしましょうか」

「イ……イヤアアアアッ!」

建物の外で換気窓の傍に座り込み、一休みしていたマーガレットはため息をついた。

「やっぱブスどもじゃ相手にならないか……」

外を見張っていた騎士たちが交替の時間になっても替わりが来ないので、ちよつとの時間だからとマーガレットが代理を申し出て帰ってもらっていた。

交替要員が来るまでの間に、マーガレットは下町仕込みのテクニクで扉を固定した。

素人は荷物を積み上げたがるが……人が出られないように扉を押さえるのに、実は全体を覆う必要はない。さりげなく石畳用の薄石を重ねて置き、ガタガタになった石畳のくぼみに嵌まるように角を

合わせる。それだけで、扉の下端が引つかかっていたら上の九十九パーセントがフリーでも開かなくなるのだ。つかえ棒の要領である。

もちろん力任せに押し開けられる可能性もあるけれど。中に入っているのがサイクスならともかく、お嬢様方では開けようがない。フタどもお嬢様たちの悲鳴さえ適当に理由をつけておけば、監視の騎士たちは扉が開かないなど想像もしないから助け出さないだろう。いつになつたら出られるか？ 彼女たちの幸運次第だ。

レイチエルとご令嬢方と、共倒れしてほしいと思って焚きつけてみたけど。

「一方的ね……やっぱりエリオット様たちに何とかしてもらわないとなあ」

あの、人の足を引く張る事しか能の無い令嬢方はやっぱり役に立たなかった。

まあ、ホントに出れないなんてレイチエルも想像もしないだろうから、いつまでもうるさい蠅に居座られて苛つかせるぐらいの事はできただろう。

策が一つ破れたところで、マーガレットはくじけない。

次の手を考えればいい。やられたらやり返す、それが彼女の信条だ。

そしてなにより、気に喰わない事ではレイチエル以上だったブスどもが全滅だ！ レイチエル、グッジョブ！

マーガレットはやつと来た騎士に挨拶すると、足取りも軽く宮殿へ戻って行った。

24・令嬢は牢の中なので何もしていない（前書き）

ザマアその2？ 3？ とりあえず2ということで。 気持ちサラッ
と。

24・令嬢は牢の中なので何もしていない

だんだんレイチエルへの嫌がらせが、課外活動みたいになつてきたエリオット王子たち。

彼らは今日も今日とて、地下牢の周りで準備を進めていた。

今度こそはと期待に弾んだ声でエリオットが指示を飛ばしている
と、肝心のレイチエルがヒョコつと換気窓から顔を覗かせた。

「サイクス様、いらつしやる？」

「あ？ 俺？」

サイクスが換気窓に歩み寄った。

「なんだ？」

「先に謝っておくわね？ ごめーん」

「それはマーガレットに言えよ！？」

とはエリオットの言。

レイチエルは王子様を無視して、サイクスに困ったように笑いかける。

「実はね、暇だからあちこちお友達に手紙を出していたら……マーガレット様の件でマルティナがね……」

「なっ！？ おまえまさか、マルティナに知らせたのか！？」

上司の元カノをおまえ呼ばわり。

「知らせたって言うか……来ちゃった」

おとといの晩に牢まで来てくれてね、とかレイチエルがあれこれ言うのを後ろに、サイクスが全力疾走で走り去る。

「お、おいつ、サイクス！」

「アビゲイル殿！？」

他の取り巻きたちが慌てて声をかけるけど、その声も聞こえたの

かどうか。

一人事情に詳しいエリオットが青い顔をしている。

「レイチェル、貴様は何と言う事をしてくれたんだ!？」

「本題は私が婚約破棄されて捕まったところだったんですよ？でも、なんでもかマルティナはサイクス様がマーガレット様と仲良しだつてところに反応しちゃって」

「当たり前だ！　おいっ、全員直ちに王宮へ戻るぞ！　サイクスが危ない！」

「え？」

深く知らない取り巻きたちは、王子の慌てた様子に首を傾げた。

騎士団の上層部が集まった会議室で、騎士団長のアビゲイル卿は立派な顎髭を撫でながら報告を聞いていた。

そこへ、なにやら廊下の方からけたたましい足音が響いてくる。

さすがにベテランの騎士達、ひどくうるさいけど足音は一人だと見当をつけた。

「何事だ？　おい、誰か見て来い」

隊長の一人に指示され、控えていた若い騎士の一人がドアに歩み寄り……そして扉を開ける前に、蹴破られた扉に吹っ飛ばされた。

「何事だ!？」

一斉に剣を握って立ち上がった騎士たちの前に……酷く狼狽したサイクスが姿を現した。

「サイクス？」

呆然と呟いた騎士団長パパに気が付いたサイクスが手を出した。

「親父い！　金くれ!!」

何故か焦って小遣いをせびるバカ息子サイクスを前に、一斉にこめかみをさする騎士団上層部。深くため息をついたアビゲイル卿が代表して、動揺している愚息に語り掛けた。

「サイクス…… おまえももう正騎士になろうというのに、会議室に乱入して公務中の儂に小遣いを請求するとは…… いいかサイクス！？ おまえはただでさえ、ファーガソン嬢の件で殿下を諫めもせずに従っていると非難を浴びているのだぞ？ 許嫁だっているのに殿下の愛人にデレデレしおって、常識も無いのかと白い目で見られているのだ！ またポワソン嬢にプレゼントか？ そんな甲斐性があるのなら、まずマルティナに何か買ってやれ！」

父の説教も素通しのサイクスが叫び返した。

「そのマルティナがレイチエル嬢の手紙を見て、来ちゃったんだよ！ ここに！ 説教は後だ、親父！ まず逃走資金をくれ！」

アビゲイル卿が懷から出した財布を投げ渡しながら、居並ぶ幹部たちに叫ぶ。

「騎士団集合、近接戦装備！ 郊外の駐屯地からも兵を動員して方阵を組ませろ！ 懷に入り込まれたら止められん、兵は攻城戦装備で大盾を持たせろ！」

慌ただしく動き出す騎士たち。いきなり訪れた緊急事態に怒声が飛び交う。

「東部方面の管理官は何をしていたんだ！？ エバンス嬢に監視を付けていたはずだろう！？」

「エバンスを配属した騎馬中隊が監視していたはずなんだ！ 精兵四十人だぞ！？」

アビゲイル卿は息子に北を指さす。
サイクス

「サンドバレーの北方司令部に早馬を出しておく！ 足りない金はそこから借りろ！」

「わるい親父！ 生きていたらまた会おう！」
とにかく身一つで雲隠れしようと踵を返すサイクス。

だが。

「ボクが来ているのを知っているのに、会わずにどこへ行く気なのかな？　なあ、サイクスう……」

いつの間にか、扉の前に。

長い黒髪をポニーテールに結わえた死神が、ゆらりと立ち塞がっていた。

「東方兵団の連中は何をしていたんだ……」

幹部の一人が思わず呟いた言葉に、マルティナがヘラリと笑った。「急いで出発しようとしたら、みんなが止めに来たから……二十人ばかり拳で“説得”したら、快く送り出してくれたよ……。でも説得に時間がかかって、おかげで来るのが遅くなっちゃった」

アビゲイル卿が手をかざして待ったをかける。

「マルティナ……確かにサイクスの噂は気になっただろうが、おまえは騎士団に奉職した身。勝手に配置を離脱して会いに来るのは問題だぞ？」

キツと騎士団長を睨んだマルティナが涙目で叫ぶ。

「枯れたおっさんには判らないかもしれないけど、サイクスが浮気したんだよ！？　もう呑気に国なんか守っている場合じゃないよ！」

「お願い、そこは国を優先して！？」

「ボクはサイクスを守る為に騎士になったんだから！　騎士の誓いだって口の中では“国王陛下”を“愛しいサイクス”に言い換えていたんだ！　ボクの剣はサイクスを守るためにあるんだよ！？　しやべった事もないおっさんなんかどうでもいいんだ！」

「それ騎士が言ったら一番ダメなヤツ！？」

マルティナが一步一步サイクスに近づいてくる。

「サイクス……どういう事？　ちゃんと話を聞かせてくれよ……？」

「あ、あの、なあ……」

マルティナの後ろで、隊長の一人がハンドサインで指示を出す。控えていた騎士達がそろそろと動き、背後から一斉に飛びかかった。

見えないほどの速度で抜いた剣を、左右にわずか一振りずつ。

マルティナの左右に吹っ飛ばされた四人の騎士が呻いて転がる。

「あの速度で振った上に、剣を胸甲に当てて嶺打ちにしただと……！？」

隊長の一人が愕然として呟いた。まともに見ていない中で、後ろから来る複数の兵の装甲部へ同時に当てるというのは神業に近い。

「ああ、相変わらずサイクスが絡んだ時だけ凄いな……」

「確かに……さすが“純愛の狂戦士^{バサカ}”！」

幹部たちが囁き合う。マルティナは若手の有望株ではあるが、それでも普段の実力は見習騎士の上位五人に入るくらい。トップを争うサイクスより下の筈なのだが……サイクスに女の影がある時に限って、なぜか人間離れた暴れぶりを発揮している。

「辺境へしばらく離しておけば、頭も冷えるかと思っただが……」
「会えない分だけ悪化してないか？ 前は問答無用で任務放棄して帰ってくるなんて無かっただろう……？」

ひそひそ囁き合う人々が、チラッとサイクスを見やる。“もう結婚しちゃえよ”という無言の圧力に、例に無く青い顔のサイクスが反論する。

「じよ、冗談じゃないぞ！？ 他人事だと思つて……人に押し付ける前に自分が結婚してみろ！」

その時。

観衆が一斉に「あつ……！」という顔をしたことで、サイクスは自らの失言に気が付いた。

恐る恐る振り返る彼の視界にマルティナが入ってくる前に、まず彼女の渦巻く怒りのオーラが見えてきた。

怖くてそれ以上首を回せないでいると、焦がすような灼熱の怒りと反対に……氷点下の冷たい響きを持った囁き声が聞こえてくる。

「サイクス……お願い、君とボクの仲だろう？　なあ、なにかボクに不満があるの？　言いたいことがあるなら言おうよ？　ボク、正直に言つて欲しいんだあ……」

サイクスも覚悟を決めて、恐る恐る呼びかけた。

「マルティナ、あんな……」

「いやッ！　そんな話聞きたくないッ！」

「まだ何も言つてねえよ!?」

話もできないうちに勢いよく尻を蹴られて、つんのめったサイクスは横転して床に仰向けに倒れた。

這いずつて逃げる前に、剣をだらんと垂らしたままのマルティナが目の前に仁王立ちになる。

「最近マーガレットだか何だかいう雌豚に、サイクスが夢中だって聞いたの……なあ、サイクスう。ボクと結婚するよな？　養豚業者なんかに婿入りしないよねえ？」

マルティナの目を見れば、瞳孔が開いている。完全にいつちゃつてる。サイクスは刺激しないように笑顔を浮かべて調子を合わせることにした。

「あ、ああ、もちろんだマルティナ！　俺は……」

「嘘言うな！　サイクスがマーガレットとかいう盛りのついた雌犬に夢中だって、ボク昨日一日あちこちで聞いて廻ったんだから！」

仰向けのサイクスにマルティナは馬乗りになると、襟首をつかんで拳を振り上げた。

「ボクが、遠征、先で、どれ、ほど、君の、事を、考え、ていたか、わかる!?」

スタツカートが入る所で、ボクツとかメシツとか湿った殴打音が響く。

「ボク、はっ、君、だけ、を、あい、して、いる、んだっ！ 他、の、女、なんか、みて、ない、で！」

ほとんど間隔が細くなる。見てるだけの群衆は、そろそろサイクスが生きているのか心配し始めた。

「ボク、だけ、を、見て！ こん、な、こと、で、殴り、たく、なん、て、ない、んだ！」

延々続くので……そろそろ生きてるかどうかよりも、サイクスの遺体の首がちぎれないか心配し始めた観客たち。

「わかる！？ 君も、痛い、かも、知れ、ない、けど！？ ボク、の、ここ、ろの、ほう、が、痛いんだ！」

馬乗りになった少女が悲痛に叫ぶ。

それを聞いて廻りの人々は思った。

“ いや、絶対サイクスの方が痛いだろ ”

周囲の心は一つになった。

マルティナが歪な笑みを浮かべたまま、短刀を挿している己の腰を探り始めた。

「ああ、サイクス……この世に他の女がいるからいけないんだね？ さすがに世界全部の女は殺りきれないから、ボクたち二人で天国に行こうか？ ふふ、永遠に二人だけだよ？」

騎士たちが止める入る順番を押し付け合い、マルティナが短刀を探り当てたその時。

マルティナとは別の女の声が響いた。

「やめて！ あたしの為に争わないで！」

その場にいた人々が一斉に声の方を見ると……マーガレットがエ

リオットや取り巻きたちを引き連れて入ってきたところだった。

騎士たちの顔色がさらに悪くなる。サイクス限定瞬間湯沸かし器に追加燃料が投下された！

マーガレットを見たアビゲイル卿が叫んだ。

「逃げるポワソン嬢！ もうマルティナは狂戦士モードだ！」
バーサーカー

「はいっ！？」

聞きなれない単語にマーガレットが首を傾げていると。

ピクリとも動かないサイクスの上から、ふらりとポニーテールの女が立ち上がった。

「ほほう……おまえが雌豚で雌犬で泥棒猫の一人動物園か……」

「ひとつ……！？ 誰よ、あんた！？」

気丈に言い返すマーガレットの横で、取り巻きたちがビビっている。どう見ても目の前の女は普通じゃない。あきらかに正気じゃない。ちなみにレイチエルは正気だけど普通じゃない。

目がイッチャってしている黒髪の女は、さっき投げ捨てた剣を拾うと歪んだ笑みを浮かべた。

「お見知りおこう、ボクがサイクスの許嫁のマルティナ・エバンスだ」

「はあ。どうも？」

訳が分からずヘコツと頭を下げるマーガレットに、マルティナが一步踏み出す。

「おまえに誑かされてひどい目に合わされたサイクスの為に……」

“ いや、ひどい目に合わせたのはおまえだし ”

騎士団一同は心の中でそう思ったが、懸命にも誰も口には出さなかった。

彼らの考えている事なんか気にもせず、マーガレットだけを見ているマルティナの壊れた笑みがより深くなった。

「……おまえの首を取る！」

「危ないマーガレット！」

次の行動を予測したエリオットがマーガレットにタックルして引き倒した頭上を、ギリギリでマルティナの剛剣が通過する。身体に遅れたツインテールの先端が数十本、鈍い剣先でまとめて引きちぎられた。

「あ痛ッ！」

「ちっ、逃したか！」

マルティナの剣が手元に戻った後に状況を把握したマーガレットは、本来ならマルティナの剣が自分の胴を両断していた事を理解して青くなった。

「あ、あんた……危ないでしょ!？」

「当然だ」

マルティナが剣を握りなおした。

「この世はサイクスに色目を使う雌犬が多すぎる。ボクとサイクスは天国で、二人だけで幸せに暮らすんだ」

「あ、そう？」

「だから、薄汚いおまえが追って来ないように……同じ天国に来ないように、今からみじん切りにして豚舎に撒いてくる」

「へえ……て、あたしを!? ちよつと待って!？」

「待たない！」

じりじり迫るマルティナ。じりじり下がるマーガレット。

「話せば判る！」

「問答無用！」

マルティナの頭が完全にイカれていることを理解したマーガレットは、脱兎のごとく逃げ出した。

それを追いかけるマルティナは足元を見ていなかったために、タックルで倒れていたエリオットの頭を踏んづけて転倒する。

「ふぎやつ!？」

「くそっ!」

邪魔なものを蹴って急いで起き上がったマルティナだが、無駄にした十秒ほどの時間差でマーガレットは遙か向こうを走っていた。

「逃がすかッ!」

追いかけてこをする女二人が出て行った後。

金縛りが解けたように王宮警備の兵へ指示を出し始めた騎士団を後ろに……床に転がっているエリオットへ、ボランスキーがにじり寄った。

「殿下、御見事でございました! マーガレット嬢は元気に逃げます!」

「そ、そうか……? はは、身を盾にした甲斐があったというものだ……それより誰か、鼻血が止まらないんだがチリ紙持っていないか……」

「逃げるな雌豚! 貧民街の施しのシチューより細かい肉片に変えてくれる!」

「そんな物になってたまるかあ! 安物の豚肉とはキロ単価が違うわ!」

かみ合わないやり取りをしながら、スプリンター走りで逃走するマーガレット。

簡易とはいえ鎧を着た上に長剣を振るいながら、そのスピードに追いつくマルティナ。

二人の勢いと時々振るわれる剣の破壊力に恐れをなして、王宮中の廷臣が逃げ惑う。たまに待ち構えていた兵士たちが鉄張りの大盾で囲んで押さえつけようとするが……。

マーガレットの後ろで、盾を押さえていた兵士たちが宙を飛ぶ。鉄張りの筈なのに、剣が当たった大盾がくの字に曲がって吹き飛ん

だ。

やばい。このままでは千六本に切られてしまう。

それは大根の切り方……って、誰が大根脚やねん！

いやいや一人でボケとツツコミしている場合じゃない。マーガレットは息が切れる前になんとか隠れるところを探そうと、わざと狭い所を選んで逃走を繰り返した。

ヴィジュアルディ大公は、賓客用の玄関に飾ってあった壺を宰相に見せていた。

「これが最近評判の若手陶工に注文して焼かせた大壺じゃ。なかなかであるう？」

「ほう……敢えて土色を残してグラデーションを楽しむとは……面白いですな」

「うむ、これは後世に残すべき作品だと自負しておる」

そこへ宰相府の下僚が慌てた様子で走って来た。

「大公殿下！ 宰相閣下！ 至急非難してください！ 狼藉者が宮殿内で暴れているとの連絡が……！」

側付きの者が慌てて二人に退出を促す前に……台風は到来した。

「くたばれ！」

「やなこった！」

ツインテールの少女が咄嗟に陰に隠れた大壺を、ポニーテールの少女が長剣で一刀両断にした。

一瞬無傷に見えたが……直後に斬撃痕に添ってひびが入り、続いて衝撃波で爆発四散する。

あっと言つ間に行き過ぎてしまった嵐を見送り、大公は宰相に言

った。

「……後世に残すべき作品だと、自負しておったんじゃ……」

マーガレットは知らなかったが、サイクスが絡んだ時のマルティナの暴走は有名だった。

それを知っていた王宮の人々は自分の部屋に立て籠もり、扉が開かないように必死に押さえていた。ほとんどの扉があかず、たまに出て来る兵士は当てにならず、マーガレットは必死に人っ子一人いない廊下を走る。

「どっかに逃げないと……何か距離を取る方法はないの……!?!」
「待てえっ! 逃げるな雌豚があああ!?!」

後ろから怨嗟に満ちた轟く呻きが近づいてくる。そこらの怨霊より、実体がある分だけ余計に怖い。“一番怖いのは生身の人間だぜ?” というどうでもいい格言が、マーガレットの頭をよぎった。

走り過ぎてもう余裕はない。一直線に続く廊下の先に、行き止まりのテラスが見えてきた。確かその向こうは大噴水のある広場だ。つまり、外。

後ろをちらりと振り返ると、最初の半分以下にまで近づいたイカレ女が息も切らさず追ってくるのが見える。

「えーい、やったるわっ!」

マーガレットはありったけの力で全力疾走すると、勢いそのままにテラスへ飛び出し……飛び乗った手すりを踏切台に、脚のバネを最大に活かして空中へ飛び出した。

二階のテラスから空を飛んだ少女は綺麗な放物線を描き……かなりの距離を飛んで、噴水のある四角い池へドボンと落ちた。

浮き上がったマーガレットは張り付く髪をかき分け、急いでテラスを見る。彼女に続いてテラスからジャンプしたらしいポニーテ^ナー

ルが、飛距離で遙かに及ばずテラス前の大理石の広場に叩きつけられるのが見えた。

「うしっ！」

走るスピードは同等でも身一つのマーガレットと違って、鎧に剣と重量のあるマルティナは踏み切る力が遙かに必要になる。マーガレットでもギリギリな池まで、マルティナはさすがに飛べなかった。兵士たちが一斉に投網をかけて捕獲するのを眺めながら陸に上がったマーガレットは、今さらながら腰が抜けて、

「……あゝ……そのうち死ぬわ……」

その場にグツタリと大の字になって寝転んだ。

レイチエルは読んでいた本を閉じて、前室で座り込む牢番を眺めた。

「今日はずいぶん長い時間いらっしゃいますね」

「ああ……ここが一番安全そうなんだ」

数日後。

騎士団詰め所の端で、サイクスの膝に乗ったマルティナがラブイ雰囲気を発散しながらイチヤイチヤしていた。

「ねえサイクス……ボクの事、愛してる？」

「ああ、もちろんさ」

「結婚式は、どんなドレスが良いかな……自信ないけど、マーメイドラインとか似合うかな？」

「ああ、もちろんさ」

幸せバカップルそのものなマルティナの問いに、首に固定棒^{ギブス}をは

めて顔を腫らしたサイクスはからくり人形のようにガクガクと頷く。サイクスの返答が棒読みなのを除けば、その姿は無理すれば恋人たちがいちゃついていると見えない事も無い。

公衆の面前で膝に乗っていちゃつくなど、マーガレットでさえやったことが無いふしだらな行いだけれど……詰め所にいる騎士は誰も咎めない。というか見えない振りをしている。サイクスと甘い時間を過ごしている(つもり)マルティナにストップをかけるなど……自殺するなら城壁から飛び降りた方が楽に死ねる。

窓の外からこっそり覗く首脳部の中で、サイクスババ騎士団長は呟いた。

「このままマルティナの発作が静かに収まってくれればいいのだが……」

「もし何かの拍子に痴話喧嘩が始まれば、また再発して先日の二の舞ですよ……」

先日的一件事はマルティナが内乱罪一步手前でレイチェルの代わりに入牢してもおかしくない騒ぎだったが……サイクスにも非があると言う事で許嫁間暴力の事は不問になっていた。

いや、それを置いても抗命・戦友への暴力・王宮侵入・上官への暴言・宣誓違反・器物損壊・公務執行妨害・大公への不敬・男爵令嬢暗殺未遂の各現行犯と、三回ぐらい高い所に上がれる罪状が充分にあるのだけれど……上は大公から下は一兵士まで、恋愛脳？ になっっている時のマルティナと関わりあいになりたくなくて、いつの間にか発生事実自体がうやむやに。

その代わりに再発防止を求められた騎士団首脳部が、今こうして頭を悩ませている所だった。

「やはり王宮から遠ざけましょう。今度はサイクスを付けてやって、僻地で新婚ごっこでもさせればいいじゃないですか。暴れても砦の

半壊ぐらいで済むでしょう」

副団長の意見に皆が頷く。複雑な思いの父も重いため息をついた。
「元々サイクスに依存しすぎるマルティナを引き離して、矯正するための国境線送りだったのだが……この際、サイクスにもう身を固めてもらうのも有りか」

窓の中ではマルティナが楽しそうに何かを言うと、サイクスが機械的に肯定を繰り返している。

「しかし、サイクスも頑丈だな……あの腐った缶詰を浴びた時も、ひと風呂浴びたら治ったもんな」

「それが取り柄だからな……しかし」

騎士団長は周りの側近たちを見回した。

「この一件、やはりファーガソン嬢が絡んでいるのか」

「本人が認めていますからね。マルティナに近況報告の手紙を出したと」

「そりゃあサイクスを排除するには、マルティナにポワソン嬢の事を教えれば一発ですからね」

「何も悪いことはしていないが、原因は確実に彼女だな……」

騎士団長は天を仰いだ。

「陛下たちに早い所戻っていただかないと……ファーガソン嬢のエスカレートする嫌がらせで王宮が廃墟になりかねん」

「ははは、次はどんな手で来ますかね？」

「縁起でもない事を言っな！？ これ以上騒ぎを起こされてたまるか！」

とはいえ……エリオット王子とレイチエル嬢の関係がそのままである以上、まだ何かあるのは間違いない。

憂鬱な未来しか想像できなくて、騎士団の幹部たちはガックリとうなだれた。

25・令嬢はペットを飼う

裏庭を老人と壮年の男が歩いていた。言わずと知れた大公と宰相のコンビだ。

「聞きましたよ。先日割られた壺の代わりを、陶工がすぐ作ってくれると約束したそうで」

「おお、経緯を聞いて気の毒がってくれてのう。他の約束に優先して取り掛かってくれるそうじゃ……あの後、儂も寝込んでしまったからの。少しは気が楽になった気がする」

話しているうちに池のほとりに差しかかり、大公が池の脇に植えてある木を見上げた。

「おお、実が熟してきたな」

大きく育った木には、子供の拳ほどの小さな赤い実が鈴なりになっている。なかなかの豊作に、大公が嬉しそうに目を細めた。

「鳥たちが集まる水場に美味しい果物などあれば、より集まってくれるかと思つて十年ほど前に姫リンゴを植えたんじゃ。今年もそろそろ食べ頃か……すでに齧つた痕も見えるな」

「そうですね。……あつ、上の方に何かいますよ？」

宰相の指さす方を大公も急いで見てみた。

「ほう、白い綿毛が可愛い」

「ええ、フワフワの毛がやわらかそうな……猿？」

二人は顔を見合わせ、目をこすつてもう一度木を見上げた。

木の上の方で、枝から枝に猿が飛び移っていた。柔らかそうな白い短毛を全身にまとい、三十センチほどの体長と同じぐらいの長さのしっぽを持っている。

サルは何故か背負い籠を担いでいて、日の当たる場所の完熟した実を選んで籠に放り込んでいた。

「猿……じゃな」

「猿、ですね。王宮に猿が出たなんて聞いたことが無いが」
道具を担いでいるからには飼われている猿なのだろう。それにしても王宮で放し飼いになっている猿なんて……。

猿は出来のいい実を収穫する傍ら、自分も齧って食べている。今も美味しい所だけを齧り終えた芯を投げ捨てようとして……二人に気が付いた。

しばし見つめ合う猿と二人。

猿は近くの良さそうな実を次々もぐと、二人に向かって五、六個投げつけて来た。

「うおっ!？」

「なんじゃ!？」

いくつか投げた猿は、ニツと笑ってウインクすると親指? をピツと立てた。

その顔はまるで、

『腹減らしてるんだろ? 俺のおごりだ、たっぷり食えよ』
と言っているかのよう。

猿は籠が満杯になったらしく、ピョンピョン跳ねて木を降り始めた。

「やだ、あのおサル……男前」

「キウンキウン来ちゃいますな」

地面に降りた猿がどこに行くのかを見ていると……手も使いながらトコトコ走り、かつてエンリケ（仮称）の消えた通風孔へ。

中から若い女の子の声が聞こえてきた。

「まあヘイリー、たくさん取って来たわね。いい子ね、ありがとう」
大公と宰相は顔を見合わせた。

「エリオットより頼りになりそうじゃな」

「レイチエル嬢もいい男を捕まえましたな」

エリオット王子は荒れていた。

「くそう……サイクスを守ってやれなかった……」
取り巻きも涙ながらに報告する。

「昨日の出発の際に見送りに行きましたが……すっかり魂を抜かれた風情で、その姿はまるで運命を悟りながら屠殺場に引かれていく牡牛のようでした……あ、涙が……」

ボランスキーも悲痛な顔で天井を見上げる。

「せめて……せめてエバンス嬢がペタだったら、サイクス殿も浮かばれたのに……」

「それはない」

エリオットが机を叩いた。

「くそつ、全部レイチエルのせいだ！ マルティナを呼び寄せるなんて禁じ手だろう！？ 王宮や騎士団の損害がどれだけデカくなっただと思っているんだ……しかも、どいつもこいつも俺たちに責任があるように言いやがって……」

そんな沈痛な空気のエリオットの執務室に侍従がやってきて、至急の件だと大公からのメモを置いていった。

「大公殿下が何の用事でしょう？」

「……またレイチエルだ……」

「でしょうね」

エリオットが便箋を机に叩きつけた。

「今度は裏庭の果物を、サルを使って収穫しているそうだ！」

「……はっ？」

聴き慣れたエリオットの荒々しい足音に気が付き、リクライニングチェアに寝そべっていたレイチエルは本から顔を上げた。

「いつもより遅いお越しですね」

「おかげさまでな！」

レイチエルの腹の上で昼寝をしていた猿も目を覚まし、珍客を見る。エリオットと猿の目が合った。

「レイチエル、なんだコイツは」

「この子ですか？ シロゲオナガザルのヘイリーです。ヘイリー、ご挨拶は？」

レイチエルに言われ、一旦主の顔を見た猿はエリオットに視線を戻して右手を上げた。

『よお』

「それじゃないでしょヘイリー。それは親しい人へするの」

ヘイリーは間違いに気が付き、立ち上がるとエリオットに尻を突き出して軽く叩いた。

『おととい来な？』

「それも違うでしょ？ ヘイリー、相手をよく見てご挨拶」

ヘイリーはエリオットをじつと見て、立ち上がると両手の親指を耳に突っこんで残りの指を舌と一緒に激しく上下させた。

『バーカバーカ』

「ごめんなさいね殿下。どうも芸を覚えきれないみたいで」

「悪意は十分伝わったわ！ 貴様の関係者は猿までこうなのか！？ どういう教育しているんだ！」

「愛情をこめてじっくり教えています」

「教えられないのは礼儀か！？ 常識か！？」

「お世辞ですかね」

エリオットがサルをビツと指さした。

「そもそもこいつは、なぜここにいるんだ！？」

レイチエルが頬に手を当て、嬉しそうにウフフと笑った。

「屋敷に私がないのが寂しかったみたいで、ここまで会いに来ち

「やっ たみたいです」

「当たり前前の事みたいに言われ、エリオットはファーガソン公爵邸と王宮の距離を頭の中で計算した。ざっと馬車で三十分。

「嘘をつくな!？」 貴様の屋敷からここまで、相当な距離があるぞ!？」 来たことも無い猿がどうやって来るんだ!？」

猿が折癖の付いた手書きの地図を出した。

「メイドに地図を描いてもらって、道を訊きながら来たみたいです
ね」

「門番は何をやっているんだ!？」 猿なんか通すな!？」

「ここの門ってほとんど素通しですね、あはははは」

「ここは王宮だぞ!？」 笑い事じゃねえんだよっ!？」

エリオットが咳払いをして仕切り直した。

「貴様の猿が野鳥用に栽培していた果物を勝手に取って行ってしまうと苦情があつた」

キョトンとしている猿を指す。

「牢でペットは飼えません。捨てて来なさい!」

「私、出れないんで捨てに行けないんですけど」

「じゃあ自分で帰らせる!」

レイチエルと猿が抱き合う。

「聞いた? ヘイリー、殿下は貴方をたつた一人で街に放り出せつて……酷いよね? 人情が無いわよね? 迷子で野垂れ死んだらどうするのかしら? こんな人が次の王様になったら国はどうなってしまうのでしょうか? 我が国の未来は真っ暗ね」

「ウキ……」

抱き合つてさめざめと泣く主従にエリオットが怒鳴る。

「ここまで自分で来たんだろ!？」 初めての王宮に一匹で来たのに、自宅に帰れないってなんだよ!？」

「あら意外、わりと論理的に考えたわね」

「ウキー」

「揃って嘘泣きかよ!? ペットまで器用だな、おい!?!」

カンカンのエリオットにヘイリーがトコトコ近づき、鉄格子によじ登ってひよいと姫リングを差し出した。

「ん?なんだ?」

「ウキヤ? ウキヤキヤ」

思わず受け取ったエリオットに猿が何か言っている。また本を開いたレイチエルが翻訳した。

「お前も受け取ったから共犯な? だそうです」

「こいつホントに猿なのか!?!」

背もたれをリクライニングさせているレイチエルの腹の上に、猿がよじ登る。レイチエルの胸を枕に自分も寝そべると、チラッとエリオットを見てきた。

「うん?」

エリオットが見返すと、猿はわざと頭をバウンドさせて主の胸のぶに感を強調してニヤリと笑ってきた。

「……こいつ」

猿はさらにエリオットに向かって舌を出し、鼻の頭に親指を当てると他の指をひらひら振ってみせた。

「貴様、この野郎!」

急に怒鳴りだしたエリオットをレイチエルが見た。

「急にどうしました、殿下?」

「このエテ公が俺を馬鹿にした!」

「猿が何を言うと言うんですか」

「いや、だって!? こいつさっきも俺を共犯に仕立てたじゃないか!」

「私がそうじゃないかって勝手に言っただけですよ。常識で考えてください」

「貴様が常識とか……」

「サルがそんなことをするわけないでしょう。殿下の被害妄想ですわ」

「くっ……！ ふっ、まあな！ ふんっ、猿ごときと同レベルでは争えんな！」

強がり言って猿を見やれば、猿はレイチエルにたしなめられたエリオットをニヤニヤ笑ってみている。

「この野郎……」

エリオットが歯噛みしていると、猿が何かに気が付いたようにエリオットの後ろを覗く。そこにはついて来たマーガレットがいて……。

猿が目を見開いて驚いた顔を見ると、嫌な笑いを浮かべた口元を押さえて上目遣いにエリオットを覗き込んだ。

『ワオ、おまえそっちの趣味！？ うーわ、趣味悪う！』

「貴様！ 出て来い、ぶっ殺してやる！」

「また、なんですか殿下……」

「このエテ公が俺とマーガレットを思いっきり馬鹿にした！」

「えっ、あたし！？」

マーガレットが驚いて割り込んできた。猿を見る。

「かわいいお猿さん……！」

マーガレットの嬌声に、猿もかわいい顔を作ってフリフリとしゃぼを振っている。

「この子が何したんですかあ？」

「ぐっ……！！？」

まさか本人に胸を馬鹿にされたなどと言えない。

「……いろいろと人に言えない事だ」

「殿下……今のちよつとの時間で、猿とどこまで意思の疎通をしたんですか……」

取り巻きも胡乱な目で見て来る。

「いや、それはだな……」

説明に困っているところに、レイチエルの追い打ち。

「猿は言葉がしゃべれないんだから、細かい事なんてわかるわけないじゃないですか……殿下が無意識に思っているから、猿のちよつとしたしぐさに重ねちゃうんですよ」

「ぐぐうつ……!？」

誰にも理解されずに奥歯を噛みしめるエリオットの前で、猿がまた嫌な笑顔で拳の中に親指を握りこんで突き出してきた。

『もうヤツた？　ねえ、もうヤツた？』

「きいさあまあああ！　もう許さん、サーベルの錆にしてくれる！」
刃が傷つくのも構わず、抜き放った刀でめちやくちやに鉄格子を切りつけるエリオット。

「殿下、どうしたんですか!？」

「すっかりして下さい！　落ち着いて、おちついてえ!？」

「ああ、こんな時にサイクス殿がいれば……」

取り巻きたちが大騒ぎになり、真剣を抜いているエリオットを何とか抑えようとする。

「エリオット様、落ち着いて下さい!」

ゼイゼイ言っているエリオットにマーガレットがすがりつき、王子はなんとか落ち着きを取り戻した。

「どうしたんですか!？」

「あのエテ公が、あのエテ公が俺にふざけたことを……!」

「猿は寝ているばかりで、別に何もしてないじゃないですか」

「こいつは陰険なクズ野郎だ！　皆の見ていない時に限って……!」
と言いながらエリオットを見ると、訝し気なレイチエルの上に猿がいない。

「うん？　ヤツめ、どこへ……!？」

思わず探したエリオットの視界に、いつの間にか鉄格子のこちら側に来ていた猿が入ってきた。

猿は床にしゃがんで、そーつとマーガレットのスカートのすそを持ち上げて中を覗き込んでいる。エリオットの視線に気が付くと、パツと白い布を指し示した。

『白だぜ?』

「白なのか!？」

「何が白なんですか？」

「え!？ いや、その……」

全然猿が見えていないマーガレットに聞かれ、エリオットは返答に詰まった。まさか猿にお前のパンツの色を教えてもらったなどと言えるわけがない。

不審を極めるエリオットに、レイチエルどころか自分の側近の目も痛い。

説明しようにも、猿が人間並みに意思表示するなんて誰も信じない。唇をかみしめてどう言おうか悩んでいると……。

気が付けばエリオットのすねに肘について寄りかかっていた猿が、肩を竦めて首を振った。

『おまえも大変だな』

「誰のせいだと思ってやがるんだっ、このエテ公があああああああー!」

「きやああああ!？」

自分の足元に向かってめちゃくちゃにサーベルを振り回し始めたエリオット。マーガレットが悲鳴を上げ、取り巻きが逃げ惑う。

「殿下、おちついて!」

「医者を、医者を呼ぶんだ!」

猿は軽々白刃を避け、さっさと鉄格子の向こうに逃げ込んでレイチエルの胸に飛びつく。

「ヘイリー、大丈夫!？」

「ウキー……ウキ、ウキ、ウキヤキヤ……ウキー? ウキヤ、ウキヤー……」

猿はかわいい顔で目に涙を溜め、レイチエルの胸に顔をうずめながらしきりにエリオットがどれだけ怖かったかを身振り手振りを入れて訴えている。

「ああ、ヘイリー可哀想に。こんなに怯えちゃって……怖かったね？」

「ウキー……」

「殿下！ ただの猿に当たり散らすなんて最低ですわ！」

「お、俺は！ このエテ公があまりにふざけた事ばかりするから……！？」

「猿に何ができるといいます！ ちょっと服を引っ張ったり物を取ったりするぐらいでしょう？ そんな事で刀を抜くなんて……！」
「そうですよエリオット様！ こればかりはレイチエルさんの言う通りですよ？」

「マーガレット、俺は……！」

「殿下……ちょっと落ち着きましょう？ ささ、執務室に戻ってお茶でも……」

「おまえたち！？」

誰も信じてくれない。

「ウキヤキヤ……」

「よしよしヘイリー。酷い目にあつたね？ 泣きたいよね？ いい子いい子、私が付いてますからね？」

「エリオット様、お猿さんを虐めちゃダメですよ？ めっ！」

「殿下、このサーベルもうどうしようもないですよ……師範になんて言い訳しよう」

口々に詰ってくる取り巻きの向こうで、レイチエルに抱きしめられた猿と目が合った。皆に見えない角度で、エテ公ヘイリー君が邪悪な笑みで勝ち誇っている。

「……泣きたいのはこっちだあああああ……！」
エリオットの絶叫が響いた。

戻って来たエリオットたちに、ちょうど居合わせた大公が訊いた。
「どうじゃ？ レイチエル嬢に猿の事は頼んでくれたかの？」

「それが……」

側近の視線をたどると、憤懣やるかたないエリオットが絶叫している。

「納得いかねえええええ！」

「それどころじゃありませんでした……」

「……そのようじゃの」

レイチエルは昨日ヘイリーと一緒に運ばれてきた、珍しい南国フルーツのバナナをヘイリーに与えていた。

「はい、ヘイリーご褒美よ。よくできました」

「ウキヤッ！」

飼い主のレイチエルは、当然ヘイリーの本性を知っている。

数日後。

大公の机に、姫リンゴがいくつか転がっていた。

「これが殿下の取り分と言う事ですかね……猿が年貢を納めて来るとは」

「儂、分け前が欲しかったわけじゃないんじゃないが……」

26・国王は湯治を堪能していた

旅館の部屋としては十分に豪華だけど、王の居室としては質素な一室で。

頭を下げて控える使者に片手を上げて応えながら、国王は軽やかに裾を翻し臨時の玉座についた。

ガウンで素足にスリッパ姿の王は、使者に楽にするように言いながら冷茶に口をつける。

「いやすまぬ、湯治中なのでこんな格好だ。お主も楽にしてくれ」「はっ！」

わずかに姿勢を崩した侍従は、王宮より預かって来た報告書を大量に取り出した。

「各部署よりそれぞれ上申が出ておりますが……大別いたしますとエリオット王子の政務に関する不安の声が数多くを占めまして、特に先日ご報告しましたレイチエル・ファীগソン公爵令嬢に対する婚約破棄の一方的な宣言から……」

「大体似たような内容なら、要約してくれ」「はっ！」

侍従が広げた報告書を重ね直した。

「早く帰ってきて。以上です」

「そうか」

王はグッとグラスをあおると空になったコップを脇に置いて、ローテーブルに並べられた報告書をちらりと眺める。

「うむ。余も早く都に戻りたいのはやまやまなのだが、腰の具合が思わしくなくてな……」

「ははっ……それと、こちらは城代様からです」

「叔父上からか」

さすがに王族の重鎮からの親書は臣下に代読させるわけにいかず、

王は封筒を受け取ると口を開けて便箋を広げた。

『心臓に悪いことが多すぎて身体がもたない。早く帰ってきて』

ヴィヴァルディ大公の手紙を封筒にしまい、王は宿に用意させた便箋にペンを走らせた。

『鋭意努力します』

「ではこれを叔父上に届けてくれ。余も都の様子は気になっているのだが、いかんせん肩の具合が治りきらぬでな。出発できるようになったら、改めて連絡する」

「はっ！」

使者が退出すると王も謁見の為の部屋を出て、宿舎に指定した離れに入る。

「お帰りなさいませ、陛下」

応接セツトに座っている王妃と公爵夫妻が出迎えた。全員バスロ―ブ姿だ。国王もガウンを脱ぐと同じ格好をしている。

うんざりした顔でどつかとソファに腰を下ろした王は、給仕代わりのメイドが運んで来た大振りのジョッキを受け取った。

「まったく、帰って来い帰ってこいと催促ばかりだ。余は足が痛くて湯治中だとさんざん言っておるのに……体調も悪いから馬車の長旅には耐えられんのだぞ？」

昨日爽やかにポロで汗を流した国王は、快調そのものの顔色でジョッキになみなみ注がれたピルスナーを喉に流し込んだ。

「まあ陛下、でしたら飲酒は控えませんか」

ニヤニヤ笑う王妃に言われ、げっぷをした王は平然と答えた。

「だからアルコールで消毒しているのではないか」

王宮では絶対出ない、庶民向けの濃味料理が並ぶテーブルを一瞥する。漬け焼きの骨付きチキンを選んで手づかみで口に運び、黄金の炭酸水（アルコール入り）で流し込む。

「こういう楽しみを人前でできんのを考えると、ホントに国王なんぞ成るものではないな」

「イメージが大事な商売でありますれば。たまに羽目を外すから楽しいですよ」

鳥の脂の付いた指先を舐めながら、王はサイドテーブルにあった報告書をめくる。

「まったく……政庁や宮廷から送られてくる報告の方が、内容も頻度も牢内の令嬢に負けるとはどういうことだ」

先ほど王宮からわざわざ侍従が持って来た報告書の山は一応目を通したが、簡単に言えば内容は二点だけだ。

一つ目はエリオットの当てにならなさ。牢に入れたレイチエルに嫌がらせをするのに一所懸命で、政務の方が滞っているというもの。二つ目は、エリオットの政務放棄に関連してやたら騒動を起こすというもの。必ずしもエリオットのせいではないみたいだが、彼のグループがなんだかんだと事件の当事者になっているのは間違いないようだ。

だから結局のところ結論は、どうにも収拾のつけようが無いから早く帰ってきて、と……。どれもこれも大同小異な内容ばかりだ。「留守はしっかり守って見せるから、気楽に行って来いと言えないものかな、あいつらは……」

都で留守を守っている筈の者たちの顔を思い浮かべながら、国王は苦いものを飲んだような顔になる。

「さすがにイレギュラーもいい所ですからな、今回の騒動は」

ファーガソン公爵もほろ苦く笑う。王子も娘も良く知っているけ

れど、それがこんな騒ぎを引き起こすとは考えてもいなかった。

……娘については、可能性を考えなくなかったのもある。

「それにうまく対応するのが政治家であり官僚である。こんな事では他国の者どもに鼎の軽重を問われるわ」

そう言い放った王が、彫りの深い理知的な顔に人の悪い笑みを浮かべる……旅館備え付けのバスローブ姿だといまいちかつこが付かないが。

「それに、この事態にただ一人対応できている者がいるではないか、なあ父上殿よ」

言われた公爵の方が、今度はしかめっ面になった。

「対応できていると言いますが、遊んでいると言いますか」

公爵はチラリとお替りを運んで来たメイドを見上げた。

「影の者に手渡しにしろとは言わないが、せめて報告書は机に置いておいてくれんものかな？ 朝起きると枕元に置いてあるのは心臓に悪いわ」

レイチェル付きのメイド、リサが頭を下げた。

「ご主人様、お嬢様からの手紙は私が昨日運んで来たのが初めてですわ」

「公式にはな」

娘がこの状況を楽しみ過ぎているのが気になる。

三日にいったん枕元に置いてある報告書の内容も、事務的に書いてあるけどツツコミどころ満載の内容なのが気になる。

グラスを置いた王妃が、見ていたレイチェルからの報告を王に渡した。

「やはり次の王妃にはレイチェルさんしか考えられないわね。このレポートを見てくださいな。内容の充実ぶりと要点をまとめた整理ぶり。週に一度、不完全な報告を上げて来るだけの王宮の者の不甲斐なさときたら……」

なぜ内容が充実しているかと言えば、王子の足を引っかける舞台

裏まで書いてあるからじゃないかなあと公爵は思った。客席から寸劇だけ見せられる廷臣たちには書けるまい。

「しかしこれを見れば、とてもレイチエルとエリオット様の結婚はさせられないでしょう。これだけやらかしていますと、結婚生活が一年と維持できると思えません」

公爵夫人がだいぶアルコールの回った顔で言った。手元の報告書にはサイクスが辺境送りになった一件が書いてある。

王妃が冷たい為政者の顔で夫人のグラスに冷たいワインを注いだ。
「エリオットを止めて次男のレイモンドを王太子に据えます。エリオット派の子どもを説得せねばなりません……このやらかしぶりなら、彼らもすでに諦めているでしょう」

王妃の言葉に王も乗っかる。

「というか、レイチエル殿はそこまで考えて事件を起こしているのだろう……そうだな、仕返しをされないためには相手を引きずりおろしておくのが一番だ」

王と王妃が見つめ合った。

「やはりレイチエルさんを王妃に望んだのは間違いでなかったですわね。自分より権力が上の者を相手に、余裕で翻弄して見せるこの才覚。どんな状況も冷静に予測して、事前準備を隠し通す力も捨てがたいですわ」

「ああ。エリオットを池に突き落としてバンバン石を投げつけていた時は驚いたが……話を聞けばしれっと冷静に説明する姿には大いに感銘を受けたものだ。相手の親にだぞ？ 有能で面の皮が厚い、しかも万時わかった上でだ。あれは臣下より国を動かす立場に相応しい」

王と王妃は楽しそうに、手に持つビールをぶつけ合った。

「プリズンイエーツ！」

公爵が散らばった報告書のバックナンバーを乱雑に掻き集めて控えるリサに渡す。

「しかしソレを考えればそろそろ、片を付けねばなりませんな。いつまでも政権中枢が空洞化しているのも宜しくありませんし……」
「ああ、そうだな……やれやれ、二か月に及んだ楽しい湯治もそろそろ仕舞いか……」

王が大儀そうに嘆息すると、背もたれに寄りかかる。王妃と公爵夫妻も顔を見合わせた。

「飯と風呂と昼寝をローテーションする日々……」

「王宮では食べられない市井の珍味に、マナー無用の気楽な宴会……」

……

「社交界みたいに外面を取り繕わずに良くて……」

「足を引つ張る部下も、嫌味に無駄な時間を使う政敵もない……」
四人はぐでぐとソファに長くなった。

「あゝ、帰りたくないなあ……」

地下牢の闇に、メイドが浮かび上がった。

「お嬢様」

「うん？ 今日には報告の日じゃないわよね？ どうしたの？」

ヘイリーと遊んでいたレイチエルが目を向けると、メイドが頭を下げて報告した。

「フラツカー温泉郷へ派遣したりサより至急の連絡です。陛下とご主人様がいよいよお戻りになられます」

「ふうん」

起き上がったレイチエルが顎をさすった。

「それは表の報告ね？ 裏は？」

「両陛下はエリオット様を切り捨て、レイモンド様を王太子に据えることに決められた、との事です」

「まあ！」

レイチエルが小首を傾げた。

「殿下は何か、やらかしたのかしら」

別に返答を要求されているようではなさそうなので、メイドは黙って待っていた。

しばらく無言で考えたレイチエルがボソツと呟いた。

「ところでレイモンド様って……どういう方だったかしら？」

「……すべてを掌握されているのに、肝心な部分だけが興味が無くて抜け落ちてますよね」

「エリオット殿下の三歳下というのは覚えているんだけど」

「……明日にでも身上書をお持ちします」

「ああ、つまり口で言えない性癖持ち？」

「そう取られまして……」

レイチエルは仰向けになってベッドに転がった。

「あゝ……休暇はたった三ヶ月で済みいかあ」

「お嬢様……世間の人は普通三ヶ月も休んでしまうと、職場に席があるか心配になるものです」

「そうなんだ」

レイチエルはごろごろ転がりながらにんまり笑った。

「お嬢様。後の利用価値を考えるとお嬢様は公爵令嬢をクビにならないと思われます」

「……お願い、空想して楽しむ余地は残しておいて？」

27・令嬢はお楽しみ会を主催する

エリオット王子はティーカップを置くと、頬杖をついて天井を見上げた。

「考えたのだが……レイチエルをやり込めるのに、ヤツと対立していたご令嬢たちに協力してもらうのはどうだろうか？ 貶したり心を折ったりするのは女性の方が得意と聞いたことがある」

ともにお茶をしていた取り巻きたちが一瞬静まり返り……一拍置いてざわめいた。

「殿下がまともな事を言ってるぞ……！？」

「そんな深く考えることができるなんて！？」

「なんだ貴様ら、その評価は！？」

上から目線の手下どもに雷を落としながら……ジョージがいればツツコミを自分でしなくてよかったのにと、ちよつと泣きたくなったエリオットだった。

そんなエリオットが粗忽な取り巻きどもを蹴散らすのを見ながら、ボランスキーは思っていた。

え？ 今頃思いついたの？

閑話休題。

レイチエルの代わりに私を！ と売り込みが凄かった令嬢たちと、ファーガソン公爵家に対立する家の令嬢たちをリストアップした。三十人近くになる。

「よし！ これだけのご令嬢たちに責め立てられれば、さすがのレイチェルも往生するだろう。くくく……よし、すぐに声をかけて回れ！」

「はいっ！」

有効な手を思いついて気合いが入った男性陣に、マーガレットが恐る恐る声をかける。

「あの……なんにもそこまでしなくても……」

「ははは、マーガレットは優しいな！ だが、レイチェルはあの通りやりたい放題だ。この辺りで一発ガツンとやり込めなければ後の為にならん！」

「そうですか……」

エリオットがやる気を出しているの、それ以上はマーガレットも言えない。

まさか、“半分はすでに使いつぶしました、てへっ”とは言えない。

使いに走った取り巻きたちが戻ってきた。

「殿下、ご令嬢たちにあたったのですが……どうしたわけか、殿下をレイチェル嬢から取り上げようとしていた方たちは、最近は軒並み家に閉じこもって、全然宮廷に出てこないようです」

「なんでだ？ あんなに自分が自分かと、機会を見つけては売り込みに来ていたのに？」

原因は彼の隣にいる。

「それと、家として対立派閥の方たちなんですが……今日はお茶会とかで、ほぼ王宮に来ているそうです」

「え？」

エリオットは首を傾げた。

王宮が広いとはいえ、そんな催しがあれば開催情報ぐらいは入ってくる。王子の自分が聞いていないのに、王宮のどこでそんな事を……。

そこまで考えてエリオットは、最近の理不尽な出来事は大体一ヶ所で起きているのを思い出した。

地下牢へ駆けつけてみると、扉の外へ机を出して牢番が一人座っていた。いつもの薄汚れた作業着にネクタイを巻いているのを見れば、また何か起こっているのは丸わかりだ。

「あ、殿下」

「今日は何だ!？」

現実逃避している表情の牢番がチラシを一枚見せた。

「本日の面会は完全予約制となっております。前売り券の提示をお願いしやす」

「面会の前売り券ってなんだよ!？」

「今日はお楽しみ慰問会となっておりますおりやして……えーと、“無実の罪で牢屋に入れられている可哀想なレイチェル・ファーガソンの為に、本日は都でも一流の芸人たちが鍛えた芸を披露します”だったかな? あっし字は読めないんですけどね」

「貴様はなんで顎で使われて受付なんてやっているんだ!？」

「はあ……なんか最近、あのお嬢には逆らっても無駄だなんて思うんす……」

「牢番が囚人に調教されてるんじゃない!？」

エリオットは牢番を押しつけて扉に手をかける。

「あっ! 殿下、チケットなしの入場は困りやす!」

「ええいつ、どけ! 貴様は自分の仕事を思い出せ!」

エリオットを先頭に降りていくと……階段を降りたところに幕を巡らして楽屋が作られ、その前に小さなステージが設置されて手品師が奇術を披露していた。

「こちらの箱をノックしますと……はいっ！ あちらの引き出しに入った筈のヘイリー君が現れました！」

なぜかレイチエルのペットがアシスタントを務めている。

喝さいを浴びながら気取ってシルクハットを脱いでお辞儀した手品師は、さっそく口上を述べながら次のネタを披露し始めた。実に手慣れた様子で、公爵家の家臣が化けているようにも見えない。

ボランスキーが手を叩いた。

「あ、あれは今セントラルサーカスで大人気のジェームズ・マティスですよ！ すげえ、自宅へ出張してくれるの初めて見た」

「自宅じゃないだろう、ここは！？」

芸を眺める客席を見れば、所狭しと机と椅子が並べられて貴族令嬢が埋め尽くしている。円卓に数名ずつ座ってお茶会の態を取ってはいるけれど、ほとんど前を向いていてメインがどっちかまるわかりだ。

エリオットたちが来ても気にせず舞台を食い入るように見ている令嬢たちに、さすがの王子もたじろいだ。

「お、おい……こいつら妙に熱中し過ぎていないか？」

「殿下……ここに並んでいるご令嬢方は身分が高すぎるので、街歩きなんかしたことないんですよ。大劇場のオペラを観劇したことはあっても、大道芸や大衆演芸みたいなのは親が見せてくれないんです」

「それでこの過熱ぶりか……」

だが、そんなのは気にしてられない。

「おいレイチエル、こんな所で演芸会など許していないぞ！」

激しいブーイングも構わず舞台前を突っ切って鉄格子の前まで行くと、中から鑑賞していたレイチエルが“意外な事を言われた！”と言いたげにびっくりしている。

「まあ殿下、私は演芸会など開いていませんわ」

「じゃあこれはなんだ！」

「これはですね」

レイチエルは含むところなどないという感じでコロコロ笑う。

「お友達が面会に来てくれたところに、たまたま慰問が来まして…

…」

「簡単にバレル嘘をつくな！ 貴様チラシを作って、チケットも前売りしていたそうじゃないか！？」

「あら、順番が逆だったかしら？ まあ、些細なことですよ」

「この規模のどこが些細だ！？」

エリオットがレイチエルと押し問答していると、ボランスキーが手品師に注意された。

「ちよつとお客さん、公演中はお静かに」

「あ、すみません」

「お静かにじゃない！ 終わりだ終わり、さつさと片付けろ！ 貴様も謝るな！」

手品師をエリオットが追い立てると、万座の令嬢たちから激しい非難の叫びが上がった。

「横暴だわ！」

「一週間楽しみで寝れなかったのに！」

「うるさい！ レイチエルの策略になんぞ乗せられやがって！」

激しく抗議する令嬢たちに怒鳴り返すエリオットは、当初レイチエルに対抗する為に彼女たちを味方につけるつもりだったのを忘れていた。

そんな事をしているうちに手品師の後ろのカーテンが動き、おっさんがもう一人顔を出した。

「あれ？ もう出番ですか」

「えっ、コメディアンのジョン・スミス？ 物まねと替え歌が神つてると評判の！？ うわっ、僕も見たい！」

「どうも〜！」

「貴様の出番もない！ ボランスキー、貴様も何しに来たんだ！？」

部下もあてにならず、孤軍奮闘で追い出しにかかるエリオットの前に令嬢が立ちはだかった。

「殿下、せっかくのお楽しみ会の最中に何を騒いでくれますの！？」

「そうですね！ 皆、今日を楽しみに指折り数えてきたのですよ！」
「む、ゴードン公爵令嬢にタフト侯爵令嬢か」

エリオットに堂々と抗議をしてきたのは、どちらも父親がファーガソン公爵家と対抗している派閥を持つ実力者の令嬢だ。頭ごなしに命令すれば済むような相手ではない。

面倒な相手に嘆息しながらも、エリオットは毅然とレイチエルの企みを封じにかかった。

「ここは牢だ！ レイチエルは懲らしめる為に入れているのに、こんな催しなど……」

「そんな事はどうでもいいんですのよ！」

「そうですね。御託はいいから、サッサと退いてくださいませ！」

「な、なに！？」

言葉も終わらないうちに遮られ、目を白黒させるエリオットを実力行使で追い出しにかかる令嬢たち。

「早く帰ってくださいまし！」

「そうですね！ このままスケジュールが押せば…… アダム・スチュアート様の出番が短くなってしまうわ！」

「えっ！？」

キャサリン・タフト侯爵令嬢の言葉に、令嬢たちが総立ちになる。
「ちよつと殿下、早く帰って！」

「アダム様にいただくお時間が短くなったら万死に値するわ！」

「さつさと帰れ！」

「邪魔しないで！」

「ええっ!？」

群衆のあまりの激しさに、思わず後退してしまうエリオット。

「あ、アダム様が!？ 凄い、生で見られるの!？」

「マーガレット!？」

愛する女の凄い喰いつきに、かなり傷つくエリオット。

「お、おい……こんなに熱狂するなんて、アダムなんとかって何者だ？」

ボランスキーにコソツと尋ねれば、取り巻きからも知らないのかという目で見られる。

「中央劇場で今凄まじい人気を誇る俳優です。苦み走った甘いマスキにムキムキ細マッチョなボディと、大人の色気がダダ漏れのセクシー派です。都の女性はもうみんな釘付けですよ」

「え？ 俳優がこんな狭い舞台で何をやるんだ？」

戸惑ってボランスキーに聞き返せば、反対側からゴードン家の令嬢が切羽詰まった声音で説明してくれる。

「アダム様はなんと、今日は特別にストリップショーをして下さるんですのよ!？」

「は？」

エリオットはさつきから、言われる言葉が異次元のものに聞こえて仕方がない。

「男のストリップ？」

「男が見たがるような下賤な出し物と一緒にしないで下さいまし！最後の一枚は死守するんですのよ!？ でも、その鍛え上げられた肉体が余すところなく披露されて、それを間近で鑑賞できるこの幸せ……！今日は皆、アダム様のブーメランパンツにおひねりを差し込む事を夢見て、夜なべしてお札を綺麗に折ってきたんですわ！」

「はあ……?？」

全然理解できないエリオットへ、鼻息を荒くするマーガレットが足りない部分の捕捉してくれた。

「俳優ってやっぱり不安定な職業だから、貴族やお金持ちのパトロンの持つことが多いんですよ！ でもアダム様は凄く売れているのもあって、愛人契約どころか個人宅の出張公演みたいな枕営業系の事はしないんです！ それを自宅に呼んだうえに、御法度のストリップまでしてもらえるなんて……レイチエルさんの顔の広さ、凄いわ！」

「そ、そういうものなのか……？」

エリオットにはよく判らない世界だ。

しかしおかげで、居並ぶ令嬢たちの目が血走っている理由が分かった。レイチエルめ、金にあかせて人気俳優で対抗派閥の御機嫌取りとは卑怯な真似をしてくれる。

なのでエリオットは、

「いいかね、君たち……」

説得しようとして、

「さつさと引つ込め！」

「テメエの顔見に金払ったんじゃないわよ！」

「アダム様っつ！」

心を折られた。

「な、なんだこいつら……」

「もう興奮しすぎて、相手が誰だとか家がどうなるかとは一切目に入っていないですね……」

「く、くそう……」

処罰するなら全員の家に譴責をかけなくてはならないが……数が多くて、だれがどの家の娘か、確認し切れるかどうか。

おまけに処罰理由が、ストリップに夢中で王子を無視したからとか……とても国王へ上申できない……。

しかも。

「見たい、アダム様見たい！」

マーガレットまで食われた。

「マーガレット!？」

もつとも、そうは問屋が卸さなかった。

「ちよつと貴方、タダ見なんて許されないわよ!？」

「私たち苦労してチケット手に入れたんだからね！」

「そんな……」

前売り券を買ってなかったマーガレット、令嬢たちに排斥される。

「お願い、混ぜて！」

「ダメツ！」

でも諦めきれなくてワアワアやり合っているマーガレット。

「マ、マーガレット。そんなものを見なくても……」

みつともないマーガレットをエリオットが連れ帰ろうと声をかけ

た……その時。

「まあまあ、みなさん」

レイチエル
救いの神が降臨した。

「マーガレット様もやはりアダム様は見たいわよね」

「はいっ！ 見たい、見たいです！」

「お、おいマーガレット……」

レイチエルが一つ空いている椅子を指し示した。

「念のために予備で空けておいた席です。マーガレット様に提供しますわ」

「いいの!？」

「おい、マーガレット!？」

聖母の微笑みでレイチエルが頷く。

「ええ。アダム様の笑顔の前には誰もが心奪われますもの。さ、同志マーガレットよ、お座りなさい」

「ありがとう！」

「マーガレットオ！？」

エリオットの言葉も耳に入らず、喜色満面で座ったマーガレットにレイチエルが手を差し出す。載っているのは、金貨が二枚。

「そしてこれを授けますわ」

「ほえっ？ 金貨？」

令嬢たちが皆聞き耳を立てているのを承知で、レイチエルは声を潜めてマーガレットに説明する。

「アダム様は伸縮性のいいブーメランパンツ……おひねりはパンツに紙幣を差し込むのが定番ですが……硬貨、それも特に重い金貨なんておひねりにしたら」

「……したら？」

「良く伸びるパンツに重たい金貨……それはもう、すんごい事に……」

「すんごい事に！？」

一斉に令嬢たちが色めき立つ。

「そこまで考えてなかったわ！」

「そんな……凄すぎる！」

「き、貴様ら……」

呆れるエリオットが見回すと、マーガレットがレイチエルの前にひざまずいて恭しく金貨を受け取っていた。

「お、おい……マーガレット？」

「か……」

「か？」

「神は地下におられた！」

「マーガレット！？」

「おい、貴様らしい加減に……！？」

事態を掌握する為に、声を張り上げようとしたエリオットだったが。

その時うしろから、ムキムキの身体を無理やりタキシードに包んだ美青年が現れた。

「きゃあああああああああああ！」

エリオットの声なんか粉碎する、令嬢たちの黄色い雄叫び。

いかにもダンディーな青年は、女の子をあしらい慣れたしぐさで投げキッスをしてニヒルに笑う。

「ハアイ、子猫ちゃんたち。すぐに開演するからちよつと待っててね？」

「おい、貴様も……」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアア！」

エリオットがアダムなんたらを呼び止めようとするも、後ろから襲い掛かる津波の如き裏返った黄色い声に押しつぶされる。

注意しようにも、もう生アダム様を見てしまった令嬢たちの目にエリオットなんか入っていない。

「いい加減にしないと……！」

「アダム！ アダム！ アッダツムウ！」

「……ねえ、聞いて……？」

「アダム！ アダム！ アッダツムウ！」

へろへろになって出てきたエリオットたちを牢番が出迎えた。

「どうしたんで？」

「いや、殿下がね……」

エリオットが這いつくばったまま悔し涙に暮れている。

「くそう……俺だってイケメンなんだぞ……きゃあきゃあ言われて

たのは俺なのに……畜生、俳優ごときがあ……」

「イケメン勝負で負けちゃってさあ」

「そういう勝負じゃねえよ!？」

「あー、相手が悪かったっすね」

「俺だって凄いよ!」

「そういう勝負じゃなかったのでは……?」

「そうだった!」

どんどん本末転倒になっていつてるエリオットに、牢番が集金箱を差し出した。

「すいやせん、殿下。あつしも立場があるもんですから……立ち見つてことで、いくらでもいいから払ってくださいません?」

「当日券はないんだろ?」

「殿下、また話がすり替わってます」

28・変態は猿と飲み交わす（前書き）

ザマア2・5……なのかな？

28・変態は猿と飲み交わす

エリオット王子は不機嫌の極みであった。

「くそつ、レイチエルめ……ただじゃ済まさん！」

後ろを振り向き、取り巻きの伯爵令息に声をかける。

「マーガレットの容態はどうだ!？」

「思わしくありません。相変わらず重篤のままです」

暗い顔で首を振る少年。エリオットはより激しく悪態をつき始めた。

「くそつ! あの悪魔め、今すぐひねり殺したい……! マーガレットをこんなにしやがって……畜生! ああ、あの疫病神を今すぐ退治する方法はないものか!? ああもう、地下牢に火をつけて焼き殺してしまいたい!」

絶叫して……そして肩を落とすエリオット。

その後ろでは。

「うへへへ……アダム様の見事な腹筋……ああ、素敵だったわ……」

幸せな時間を過ごしたマーガレットが、よだれを垂らしそんな顔で夢見心地になっている。あれから三日経っても魂が抜けたままだ。暗澹たる表情の伯爵令息が報告する。

「最悪のケースを想定しますと……このままアダム・スチュアートの追っかけになる可能性も……」

「なっ!?! そ、それだけは何としても阻止するんだ! くそつ、なんでこの手の病気は医者がないんだよ!?!」

叫んでは備品に八つ当たりしているエリオットを見ながら、取り巻きたちは声を潜めて囁き合った。

「このままだと、午後にはホントに地下牢へ火をつけに行きかねな

いぞ？」

「ああ……だけど実際に火をつけるのは俺たちの役割だよな？」

「そりゃそうだな……さすがに嫌がらせて人を殺すのは……」

「なにか、適当なうつぶん晴らしが無いかな……」

エリオットが気が付かない所で、ゴシヨゴシヨ相談する側近たち。

「うん、これでいこう」

「そうだな。適度なガス抜きになるだろう」

「よし……殿下、ちょっといいでしょうか？」

打合せの結果を持って、代表のボランスキー侯爵令息が手を上げる。

「なんだ!？」

「はい、増長しているレイチエル嬢に一発お仕置きをしませんか？」

「……ほう？」

気が立っているエリオットをなだめながら、ボランスキーたちは計画を説明する。次第に乗り気になるエリオットに安堵しながら、取り巻きの少年たちは目配せを交わし合った。

「よし、それで行こう！ 今晚さっそく決行だ、準備をすすめる！」

「了解！」

少年たちは気が付かなかった。

風にそよぐカーテンに張り付く小さな物体に。

「ウキー！」

「お帰りなさい。今日はどこまで遊びに行ってきたの？」

換気窓から入ってくるヘイリーをレイチエルは優しく迎えた。おサルは抱っこされて一通りブラシをかけてもらうと、満足してサイドテーブルに乗り移る。

「ウキー、ウキ、ウキ？」

ヘイリーはこめかみの横で指をくるくる回し、最後にグーパーする。

「ああ、エリオット殿下の所に行ってきたのね？」

ヘイリーはさらに、そこにあつたペンを取ってお尻を握り、片手でマツチを擦って着火する真似をする。

「うーん、花火を持ってきて窓から放り込むつもりかしら」

ヘイリーが頷く。

レイチエルはヘイリーを抱き寄せると、頭を撫でながら囁いた。

「ありがとうヘイリー、これで対策できるわ。ちよつと監視係ウォッチャーの所までお使い頼める？」

「ウキヤツ！」

そつと地下牢のある建物に近づく一団があつた。

「灯りは消えているみたいですね」

「ああ。ヤツは寝入りばなか……ちようどいい」

エリオットたちは扇状に散開しながら地下牢の換気窓に近寄り、そつと持って来た燭台を降ろした。一緒に買ってきたばかりの包みも広げる。

最新の玩具に、こういう時に便利なロケット花火というものがある。火をつけると不安定な軌道で飛んでいき、火薬が燃え尽きる直前に音を立てて爆発するという……まさにレイチエルの牢屋に打ち込むために作られたような玩具だった。もっと大きければ兵器にもなりそうな代物だが、今のところは音で脅かす以上の破壊力はない。だが、今日のような目的には好都合だ。

「くくく……ヤツの慌てふためく姿が見えるようだ。よし、放て」「はっ！」

大量に買ってきたロケット花火の袋を破り、一本目を取り出して火をつけ……ようとしたその時。

パパシュッ！

換気窓から軽い破裂音が聞こえ……今まさに火をつけようとしているロケット花火と同じものが、向こうからこちらに飛んできた。何本も。

「うおっ！？」

「なんだ！？」

こちらは広がって窓を囲んでいるので、あちらにしてみれば乱射してもどこかに当たる。次々と発射されるロケット花火がこちらの陣地で炸裂しまくる。

「くそっ、先手を打たれた！」

「レイチエル嬢は一人でなんでこんなに撃てるんだ！？」

こちらも七、八人で懸命に撃つのに、そもそも換気窓に届くのも珍しく、片っ端から明後日の方向へ飛んで行ってしまう。

「なんで……！？」

「おい、全然効いてないぞ！？」

エリオット側は目論見と真逆に自分たちが大混乱に陥った。

「なかなか面白いわね、これも」

レイチエルは初めから波板にセットされたロケット花火に次々火をつけていた。着火してしまえば波板の溝に添って勝手に飛び出していく。ロケット花火を扱ったことが無く、手持ちで火をつけてから離しているエリオット側よりよほど命中率が良い。

「ウキー！」

横で次の板に花火を並べているヘイリーも嬉しそうだ。

「そろそろ特性花火も出しましょうか」

「ウキッ！」

「落ち着け！ どうせ相手は一人だ、皆で一斉に狙えば押し勝てる

「箒だ！」

エリオットが動揺を抑えようとしているそこへ。

スパパパパパパンツ！ ドウンツ！

今までにない派手な音を出す一発が弾着した。

「なんだ！？」

「おいっ、音も威力も違うぞ！？」

次々飛来する中、見習騎士をしている男爵令息が飛んでくるシルエイトから正体を見極めた。

「ロケット花火を束にしてるぞ！ 三、四本まとめた上に……爆竹までくっつけてやがる！？」

「そんな手が……！」

花火にそんな威力はないと判つていても、やはり近くに着弾すると一瞬怯えてしまう。しかも音も破裂も、自分たちの持っている物と桁違いでは……。

一人に七、八人で撃ち負けるといふ沽券にかかわる事態が発生中。そこへさらに、次の悲劇が襲い掛かった。

「あれ？」

次の一発を取ろうとした一人が、手元にあつた箒の花火の包みが無いのに首を傾げた。周りを見回すと……何袋か集めて、まとめて導火線に火をつける猿の姿が。

「あ、おい待て！ そんな状態で火をつけたら……！？」

猿が飛び退くのと同時に、構えもしないで火をつけたロケット花火が支離滅裂に飛び散り始めた。

「うわぁ！」

「おい、逃げろ！？」

足元であらぬ方向へ走り回り、滅茶苦茶に飛び回って爆発するロケット花火。混乱を助長させるように猿が爆竹に次々火をつけ人が

固まっている辺りに放り込む。

そして、彼らに最大の悲劇が訪れた。

やっと静かになり、へとへとで座り込むエリオットの横に、不意に人影が現れた。

「……………」

エリオットが顔を上げれば……………女官長。

「殿下……………先日お叱り申し上げた話を、全く聞かれていなかったようですね……………」

「あ、いや……………」

「お説教の場所は、執務室で宜しいですね。それとも……………夜直が働いている中、正面玄関で正座しますか？」

「……………執務室で」

「酷い目にあつた……………」

エリオットはトボトボと居室まで戻ってきた。

お説教を延々食らい、その後計画が甘い手下どもを叱り飛ばして、もう色々精神的にやられた状態で……………すぐに寝たい。もう何も考えず、ベッドに倒れこみたい。

リビングで上着を脱ぎ、もうシャツのまま倒れるつもりでベッドルームの扉を開けた時……………今晚最後の悲劇が襲った。

エリオットが扉を開けたら……………猿がいた。

「はっ？」

どう見ても猿がいた。しかも、向こうもハッとした顔で……………手に

たいまつを持っている。

「え？ おまつ、ちよっ！？」

猿は手にした火をエリオットに投げつけて、怯んだすきに脇から逃走した。

「くそっ、衛兵！ 放火猿が出た！」

自分でも何言ってるかわからない言葉が出てきたけど、猿が火を持ってエリオットのベッドルームにいるなんてそれ以外考えられない。

「レイチエルめ、いきなり放火なんて手に出て来るとは……！？」

王宮で白い毛の小型の猿なんて、あのバカのペットしかいない。エリオットは猿に投げつけられたたいまつを踏んで消し、どこに放火されたのか慌てて室内を確認した。

結論から言えば、猿は家具に火をつけていなかった。

室内に放火するつもりはなかったらしく、燃えている物はなかった。但し……余計なものが増えていた。

「なんだ、こりゃ……？」

エリオットがベッドルームに入ってみると、床のあちこちに鍋が転がっている。その数はおよそ十。

一枚板を置いた上に松脂と木くずを混ぜたものが積まれ、その上に鍋が置かれていた。猿が火をつけていたのは、その混合燃料らしい。中火でじっくり過熱されつつある大鍋には、見たところトウモロコシの粒と油が入っていた。

エリオットはポップコーンを知らなかった。

彼が何かのアクションを起こす前に（そもそもすぐに消火活動しても、簡単には消えなかっただろうが……）、最初の鍋で一つ目の粒が爆ぜた。

ポンッ！

「え、何！？」

そこからは加速度的に広がっていった。

スパパパパパパパパパパパンッ！

よく判らない白い粒が飛び跳ねる。

あつと言う間に数を増したそれは、まるで下から上に電が降るみたいに激しくエリオットにぶつかってくる。

「痛いっ、痛いっ！　なんだこれは！？」

そして辺り一帯に広がる香ばしい油の臭い……。

駆け付けた警備の騎士たちもどうにもできず。見たことが無い代物なので、いきなり水をかけていいのかもわからない。

駆け付けた女官長にキレられている間も白い粒は増え続け……よく判らない爆発が収まった頃には、エリオットの部屋は白い粒で見渡す限り汚染されていたのだった。

疲れ果てたボランスキーは裏庭に近い通路を歩いていた。途中で一休みしたくなり、回廊の段差に腰かけて一息つく。

「はー……疲れたなあ」

今日の徒労感は一ひどい。まさかレイチエル嬢がロケット花火で反撃して来るとは……あんなものまで最初から持ち込んでいたのだろうか？　やはり恐るべき令嬢だ。

「ああ……どうせご令嬢に振り回されるなら、ペタなら尽くしがいいもあるのだが……」

レイチエル嬢は正反対だ。おまけに背は高いし綺麗系だし、かわ

いい感じは全くない。

「おなじナチュリズムに溢れているとはいえ……やはり、マーガレット嬢の方がいいな、うん」

一人で納得し、ふと前を見ると……猿がいた。背負い籠をしょって、たまたま通りかかったという風情だ。名前は確か……。

「……ヘンリー？」

たしかレイチエル嬢のペットじゃないか？ コイツは。

「ウッキー！」

猿は懸命に首を振るが、こんな猿が二匹も王宮にいないと思えない。なぜかたくなに否定するのかわからないが、まあ殿下と違って猿まです虐めるつもりはない。

「別にうるついても構わないが……変な所で悪戯するなよ？」

猿に理解できるかわからないけど、一応忠告はしておいた。さすがにボランスキーも、すでにエリオットの部屋で盛大にやらかしてきた帰りだとはわからない。

「うん？」

気が付けば、ヘンリーがこっちの顔を覗き込んでいた。どうもペツトというのは、気にしない人間がいると逆に気になるものらしい。ヘンリーは背負い籠を降ろすと、中からオレンジを出してきた。

ボランスキーに差し出してくる。

「ウキー」

「なんだ、くれるのか？ おまえ、イイやつだな……」

ヘンリーはオレンジを渡すとボランスキーの横に腰かけた。『話があるなら聞け？』といった感じで見上げてくる。

「なるほど、こうしてみるとペットというのも可愛いものだな」

言葉を理解しているのかわからないが、なんとなく愚痴りたい気分だったボランスキーはヘンリーに訥々と愚痴をこぼし始めた。

「というわけだな。これでも頑張っているのだけど、なかなか成果

が出ない……」

猿は判っているのかいないのか、ウンウンと頷きながら聞いている。途中話が切れた所で『ちよつと待っている』というボディランゲージをして中座し、一旦姿を消したかと思えば……帰ってきた時にはウイスキーのミニボトルとグラスを持っていた。

「ウキッ！」

二つのグラスを並べて器用に琥珀色の液体を注ぎ、一つをボランスキーに渡してきた。

「ウキー！」

「おい、これどこから持って来たんだ？」

「ウキキッ！」

「え？ ご主人様の？ 怒られるのは俺だけだからお前は気にするな？ ヘンリーおまえ、男前だなあ……」

感心したボランスキーはありがたくいただき、お猿のヘンリーとグラスを合わせる。

猿なので実際には酒を飲まないけれど、こうしていると酒場で気の置けない友人に語っている気分になる。ヘンリーは間を見るのもうまいらしく、ボランスキーの話に頷きながらも減っていくグラスの中身をドンドンお酌してくれる。

いつしかボランスキーは泥酔しながらヘンリー（仮称）に勤め人のつらさを愚痴っていた。

「ホントに殿下は人の苦労も知らないでえ」

「ウキキ」

「そう、そうなんだよ！ はあ、下働きの苦労を知らない人はいいいよなあ」

「ウキ」

「わかる？ わかってくれる？ そうなんだよあ」

「ウキッ、ウキッ！」

「辞表を叩きつけて殴っちまえて？ あはは、それができればなあ」

ほとんど一人酒だけど、愚痴を聞いてくれる相手がいるというのもいいものだ。なかなか貴族相手だと対面とかもあるので、たとえば妻が相手でも己を崩すのは難しい。

ボトルを空ける頃には、ボランスキーもだいぶ気分が良くなった。

「さて、それじゃ俺は帰るよ」

「ウキヤッ！」

「あ？ ああ、門からは馬車だから心配ない！ うん、ありがとうヘンリー」

背負い籠に要らなくなった空きビンとグラスを仕舞っていたヘンリーが、何か固い布のようなものを差し出してきた。

「ん？ これはなんだい？」

「ウキ～。キヤキヤッ！」

「いい物？ だいたいの奴はこれで元気が出るって？ ははは、宝物をすまないな、ありがたくいただいておくよ」

「ウキヤー」

手を振るヘンリーと別れ、ボランスキーは満天の星空の下を歩きます。

なんか悩みが全て押し流された気がする。これで明日から頑張れそうだ。

気分よく満月を見上げ、ボランスキーは目を細めた。

そして一個目の城門を通ろうとしたときに、あまりに怪しいので職務質問に引っかった。

「ボランスキー侯爵家の御嫡男様ですか……お勤めお疲れさまでした」

慇懃な言葉と反対に、いかにも疑っているという顔の騎士はボランスキーの進路をふさぐように立っていた。後ろにももう一人いる。

「だいぶ飲まれているようですが……今日はパーティはなかったですよ。殿下に勧められましたか？」

「いや、ついさっきそこで友人に勧められてな」

「ほう……王宮内で酒を勧められるお方というところ……？」

「うむ、お猿のヘンリー君だ」

たぶん普段のボランスキーなら、事実であるにしてももうちょっと上手く立ち回っただろう。しかし今は飲んだ直後。しかもミニボトルとはいえ蒸留酒を一本空けていれば、普通の人間は泥酔と言っても過言ではない。

酒を出せる有資格者でないのが問題だったのか、それともお猿なのが問題だったのか？ 尋問する騎士たちの目の色が変わる。

「……閣下、冗談を言っている場合ではないのですが？」

「冗談なんか言っていない！」

「そうですか。それで、どなたと飲まれました？」

「だから、お猿のヘンリー君だ」

「……そうですか。では、百歩譲って猿と飲んだとして。猿と酒を飲みながら何をしておられました？」

ボランスキーは酒の勢いで、胸を張って堂々と答えた。

「ああ、仕事の愚痴を聞いてもらっていた！」

「……仕事の愚痴を？ 猿に？」

「ああ！」

「……猿はなんと？」

「うむ。よっぽど嫌なら辞表を叩きつけて上司をぶん殴って来いな！」

「……猿が？」

「ああ、むろんだ。何しろあの場には私とヘンリー君しかいなかったからな」

「……そうですか」

前で質問していた騎士が、後ろの騎士に目配せを送る。後ろの逃走経路を押さえていた騎士はいったん離れ、城門から応援の兵士を

連れてきた。

「ところで……閣下が持っているのはなんですか？」

さつきヘンリーにもらった何かを、ボランスキーはそのまま手に持っていた。

「そういえばこれ、なんだろう？」

広げてみると……女性が胸のふくらみを支える、アレだった。

「……小職には、女性物の下着に見えるのですが」

「うむ、アレだな。これはビスチェというやつだな」

「……どこから持ってこられたんですか？」

「これか？ これはさつき飲んでいる時、ヘンリー君にもらったんだ」

「猿に？」

「猿に」

もう騎士は声も押さえず、ぞろぞろ来た兵士たちに騎士団詰所へ連行することを伝えている。

「いや、待て待て！ ホントだ。これは猿にもらったんだ！」

「……一万歩譲るとして……なぜ猿が、閣下に女性の下着を渡したんですか？」

「それは君、友情の証としてだよ！」

尋問する騎士がもう一人に囁いた。

「おい、増援をもらった方が良くかもしれん」

「手配します」

「なんでそんな話になるんだ！」

「なんでならないと思うのかが不思議なんですが……では、質問を変えましょう。猿は友情の証として、なぜこれを貴方に渡そうと思っただんでしょうかね？」

「ああ、なんでも……もらったヤツはたいいてい元気になるそうだ」

「おい、被害にあった女性がいないか調べる。ここまでイっちゃってるヤツだ、高位の女性のものかもしれない」

「頭に加減を考えると、女性の年齢を限定できませんね」

「だーから、君たちなんで私をおかしな奴にしたがるのか!？」
「その物ズバリだからで……失礼。猿がくれたなどと申されるものですから」

「持ち主だっってわかつているぞ!？」 これはヘンリー君が持つて来たからにはレイチエル・ファーガソン嬢の物に違いない」

「何故そこで、返そうと思わなかったのですか?」

「ヘンリー君の友情が詰まっているからな!」

「おい、とりあえず地下牢に行つてファーガソン様に確認してこい」
「そもそもコイツを地下牢に入れるべきでは?」

「変質者とご令嬢と一緒にできるか!」

もう隠す気も無く堂々と本人の前で相談する騎士たちに、ボランスキーは抗議した。

「君たち、私が自分の趣味でレイチエル嬢の下着を盗んだと思つているのか!？」

「ええ、まあ。ありていに言えば」

「冗談じゃない!」

ボランスキーはプライドをかけて……そう、王国ペタリスト協会会長の威信をかけて発言した。

「ボクがレイチエル嬢の下着に興味を示すなんてありえない事だ! 僕はペタリストだぞ!？」 ささやかなふくらみにしか興味はない

!」

「おいつ、人数を集めろ! こんなロリコン、逃がしたら大事だぞ!」

「君たち!？ だから言っているだろう、僕はペタリストだ! なんてロリコン扱いされるんだ!」

「ここまでの話で、なんでロリコン認定されないと思うんだ!？」

「馬鹿か君たちは!」

信念の男ボランスキーは、押し寄せる警備兵たちに堂々と言い放つた。

「ペタはささやかなふくらみを愛でる者! ロリは幼少時を愛でる

者だ！ 似て非なるこの二つは全然別モノなんだ！ ただ一瞬重なるだけで、趣味嗜好は別モノなんだ！」

「はいはい、続きは騎士団詰所で聞きますから！ はいっ、抵抗しないです！」

その日。

騎士に引きずられていく若手貴族を見た人たちは、彼がいつまでも悲痛な叫びを上げているのを目撃していた。

「違うんだ！ 全然違うんだ！ いいか、ペタはロリじゃない！ ペタはロリじゃないんだああ！」

地下牢に珍しく、統括の立場のソフィアが報告に訪れた。

「そろそろ国王陛下たちも都に着きますので、方針を打ち合わせたいと思います」

「そうね。陛下が帰ってきたらこの騒ぎもおしまいだし、最後のごたごたしたくないわね」

主たちが相談を進める横で、ヘイリーはさつき会った若者を思い出していた。

ヘイリーの名前を間違えて覚えている粗忽者だったが、泣いたり笑ったり面白い奴だった。よく判らない事をくどくど喋っていたけど、最後は機嫌よく帰って行ったので多分悩みは解決したのだろう。

最後に人間の男がみんな好きなのを渡してやった。ご主人様はたくさん持っているから、一枚くらいいいだろう。

あれで彼が楽しく暮らせたらいいな。

ヘイリーは小さな換気窓から、夜空の星を眺めた。

「殿下、料理人によればこれはポップコーンというものらしいです。食べられるそうですよ?」

「そんなの今はどうでもいいわ!? 畜生レイチエルめ、寝るどころじゃねええええ!!」

29・令嬢は嵐に恐怖する

“ エリオット王子があまりに間抜けだから ”

突き詰めて言うと、その一言に尽きるかもしれない。

エリオット王子の攻撃は毎回お話にもならなくて。

レイチエルは無意識に慢心していたのかもしれない。

地下牢の平穏は誰も壊すことができないのだと。

国王の帰還が期待を込めて王宮の人々の口に登る頃。

……地下牢に嵐がやってきた。

ボランスキー逮捕の知らせはエリオットの執務室に衝撃をもたらしていた。

「 なんだと、ボランスキーが……？ 」

エリオットも顔色を無くしている。これでジョージ、サイクスに続き側近が上から三人も脱落してしまった。王子のショックは計り知れない。

報告する伯爵令息も悲痛な顔を隠し切れない様子だ。

「 見ていた者の話では昨夜、女官長から解放されて帰宅する途中に……酔っておかしな事を叫んでいると、城門の衛兵に見咎められて連行されたそうです 」

「 そんな……！？ いや、確かにあのお説教の後では酒の一つも飲みたくなるが……ボランスキーが捕まるようなことをするはずがない！ 衛兵に抗議を…… 」

「 なんでも泥酔して城門に現れ、女物の下着を被りながら『 ロリコン最高！ 』と叫び続けていたとか…… 」

「……いや、そうか……早く解放されるといいな」

エリオットは力なく腰を下ろした。マーガレットが心配そうに駆け寄る。さすがに至高の時間を反芻している場合じゃないらしい。

「エリオット様……元氣を出して下さい！」

「マーガレット……俺はもう、どうしたらいいのか……」

「そうだ、これを持てばきっと元氣になりますよ！」

マーガレットがポケットから、派手な紫色の布を取り出した。

「ん？ これは何だい？」

「最後に投げ渡してくれた時、他のご令嬢たちとの争奪戦に勝って入手したアダムのパンツです！」

さすがに履いてるところを奪い取ったわけではないらしい。

「いや、いい！？ 知らない！」

思わず後ずさるエリオットを不思議そうに見るマーガレット。

そんな楽しい空気の所へ、王子の取り巻きの一人が駆け込んできた。

「失礼します！ 地下牢でレイチエル嬢が……」

「なんだよ！？ 今それどころじゃないのに、また何かやらかしたのか！？」

「いえ、それが……面会客に詰られて、悲鳴を上げているそうです！」

「はあっ！？」

レイチエルが立て籠もる地下牢……の奥の、シャワールームのカーテンの中に立て籠もるレイチエル。

エリオットたちが駆けつけた時、レイチエルの様子はそんな状態だった。

先客はエリオットたちに気が付く様子もなく、レイチエルに向か

って呼び掛けている。

「レイチエルさん！ 一日休めば二日分の努力が無駄になるのですよ！ さっさと出ていらつしゃい！」

「そうですよ！ “継続は力なり”です。すでに取り返すのに半年は時間が必要ですよ！？」

「いーやーでーすーう！ 私は殿下に婚約破棄されたんだから、もう王妃教育はいらないんですう！」

「馬鹿な事を言っでないで出て来なさい！」

あのレイチエルが押されている。

仁王立ちで牢に向かって怒鳴っている二人を見て、エリオットも“うわぁ……”という顔になった。

「サマーセツト公爵夫人とマールボロ伯爵夫人か……」

サマーセツト公爵夫人は、王妃教育の教養講義を担当する王宮の生き字引だ。公爵夫人の称号をもらっているが独身の王族で、ヴィバルディ大公の姉に当たる。

もう一方のマールボロ伯爵夫人は臣下でありながら王宮で生まれ育った異色の経歴の持ち主で、典礼を担当する。父も夫も宮中で儀典官を務めてきた関係で、これ以上ないほどの風紀の鬼^{マナー}。

王妃教育どころか宮中でのマナー全般で恐れられている双璧が、二人とも揃っている。

「此度の一件に関して、旅先の両陛下に貴方の解放嘆願と方針の確認を尋ねる書状を送り続けて参りましたが……やっと妃陛下から継続のお返事がいただきました。王子の乱心にはどうすれば良いのか切齒扼腕しておりましたが……方針が決まりました以上、遅れを取り戻すためにも今まで以上に力を入れて参りますよ！」

拳に力を入れて怒鳴るマールボロ夫人。ちよっとマナーがなっていない。

「まったく……二か月以上も手紙を送り続けてやっと返事が届くなど、両陛下も決断力が無さ過ぎでございます。お帰りになられたら、一言申し上げなくては……」

サマーセット夫人が眉間に皺を寄せている。

うるさ方からのしつこい書状に触りたくないの、侍従に内容だけ確認させて放置していた国王陛下。もう説教決定。

「むーりーでーすー！ 私はここに閉じ込められて出られないんですう！ 王妃教育なんて受けに行けないんですう！」

「座学はここで学べば宜しい！ できないのはダンスの練習ぐらいでございます！」

「せっかく別荘に来てるのに、なんで勉強しなくちゃいけないの！？」

「勉強することがたまっているからでございます！」

レイチエルが何を言おうと諦めてくれないお婆様方。小娘に迫力負けするようでは教育係は勤まらない。

カーテンに隠れて顔も出さないレイチエルが言い募る。

「だいたい殿下に婚約破棄されているのに王妃教育を受ける意味って何ですか！？」

「将来の王妃に必要な素養を身につけるためでございます！」

かみ合っていない。

「だから殿下が……！」

「エリオットの事はどうでもよろしい！」

グダグダ言うレイチエルをサマーセット夫人が一喝する。

「王妃にはレイチエルさん！ これは決まりです。妃陛下から続行の返事が来たということは、両陛下もそのつもりです。エリオットなど二、三発根性を注入すれば聞きわけが良くなります！」

前時代的な教育方針の公爵夫人。

「それでも嫌だつて言ったら……！？」

「二、三十発根性を注入すれば聞きわけが良くなります！」

実はマルティナと相性が良さそうな公爵夫人。

「そもそも私も嫌なんです！ 見てくれだけのおバカな王子なんて！」

婚約破棄した相手の言葉とはいえ、流れ弾に傷つく王子から呻きが上がった。ヒートアップしている女性陣は気が付かないけど。

「見てくれだけのナルシストで頭が空っぽのエリオットだからこそ、しっかりした王妃が必要なのです！」

サマーセット夫人はヒートアップする。エリオット一行に気が付かないまま。

「そもそも！ あの底に穴が開いている役立たずの花びん頭に、生涯にわたって国王が勤まらないのは判っていたことです。長子相続だから跡継ぎ予定ですが、だからこそ、万事ひび割れを隠すことができるレイチエルさんが必要なのです！」

本人が訊きたくなかった裏事情をバンバン暴露する夫人。

「王妃になるのも殿下と結婚も私だって嫌なんですけど！？」

「そんな些細な事はどうでもよろしい！」

「気にして！？ 私の意思も尊重して！？」

「どうせ政略結婚が基本の貴族令嬢なのです！ 陛下が望むのですからレイチエルさんに選択肢はありません！」

「それでもあのバカ殿さまは嫌だあーっ！」

ガンガン流れ矢が刺さっているエリオット。立っていられなくてうずくまる。

「アレが嫌ならば、この際レイモンドでも良いです。とりあえず王妃にレイチエルさんを据えて、旦那は後から考える予定です」

「それ逆！？ 普通王家なら嫁の方をチェンジでしょ！？」

「そんな生易しい事では国は存続できません！」

言いたい放題の御婦人方に、もう心の傷が痛くて床に手を突くエ

リオット。

「エリオット様！　しっかりしてエリオット様！」

背中をさすっていたマーガレットは、王子の代わりにババアどもに物申した……無謀にも。

「ちよつと、エリオット様をこき下ろすって何様のつもり！？　エリオット様はレイチエルさんの横暴に、このままじゃいけないと思つて立ち上がったのよ！」

「マーガレット……！」

感涙に潤むエリオット。

「エリオット様……！」

見つめ合う二人。

という雰囲気は無粹にも破壊する熟女様方。

「エリオットさん！？　よくも堂々と顔を出せましたね！？」

「エリオット……おまえは昔から講義を逃げ出してばかりでロクな人間にならないと思つていましたが……やっていい事と悪い事の区別もつきませんか！？」

「お、俺は正しい事を……！」

「私っ！」

「はいっ！」

まるで伝説に出て来るオーガのように、怒りでヤバい顔になっているマールボロ伯爵夫人が一步一步近づいてくる。

「エリオットさん……貴方がその態度では、レイチエルさんに謝る前にお仕置が必要ですね……！」

「え、なに、を……！？」

マールボロ伯爵夫人が、いきなりエリオットを後ろ向きに横抱きにした。

「うえっ！？」

夫人はほぼ成人のエリオットを軽々小脇に抱えると……。
ズルッ！

「え！？」

「キヤーッ！」

エリオットのズボンを膝までずり下げた。

「マールボロ夫人、何をする！？」

「何をしたはこちらが言いたいことでございます！ 貴方の愚かな行動に罰を与えて、レイチエルさんに誠意を見てもらうにはお仕置きです！」

マールボロ伯爵夫人は手を振り上げ、エリオットの意外とつるんと綺麗なお尻に……。

パンッ！

「や、止める！？」

「まだたつた一発ではありませんか、堪え性のいない」

「そ、そういう問題では……！」

夫人は聞く耳持たず、再度手を振り上げ……。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

爽やかなまでに小気味のいい音が連続する。

「待ってくれマールボロ夫人！？ 俺にもメンツというものが……」
「私っ！」

さらにひどくなる平手打ち……。

「止める、止めてくれえ……！」

エリオットが止めるのは痛いから、だけじゃない。

最愛のマーガレットが見ている。

憎たらしいレイチエルもカーテンの陰から顔を覗かせている。
威信を見せるべき取り巻きたちも固まっている。

メンツを立てなくてはならない相手が勢ぞろいしているのに、児童のように尻をむき出しにされて叩かれる……これは痛みより先に精神的にくる！

しかしマールボロ伯爵夫人はそんな事はお構いなし。

パンツ！ パンツ！ パンツ！ パンツ！

延々続く。

いつまでも続く。

「頼む、これは止めて！ 痛いっ！ お願い！？ 恥ずかしいから！」

エリオットがいくら懇願しても止めてくれない。

側近たちも……相手が誰かわかっているだけに止められない。騎士とかなら序列の高いエリオットの指示を優先したかもしれないけれど、貴族にとってこの妖怪^{アンタツチャブル}ババアのやることに逆らうのは王子の命令を無視するよりヤバイ。

尻が腫れ上がり、もう呻き声しか出なくなったエリオットを見て、サマーセット公爵夫人がマールボロ伯爵夫人に声をかけた。

「夫人、そろそろ……」

もう声も出ないエリオットが嬉しそうな表情を浮かべたが……。

「……私に代わりなさい」

この時の絶望感は、筆舌に尽くしがたい……と後にエリオットは語った。

ヴィバルディ大公より三歳年上の王家の番人は、歳を感じさせない力強さでエリオットを受け取った。！

「よいですかマールボロ伯爵夫人。私のように老いさらばえては、貴方のように何度も平手を喰らわすことなどできません」

その割に^{エリオット}准成人男性を小脇に抱えているが。

公爵夫人の手には、いつの間にか皮サンダルが握られていた。
「代わりに、年齢で衰えた分は経験と知識で代替することができ
るのです」

スッパァン！ スッパァン！ スッパァン！ スッパァン！

より威力と速度を増した軽やかな衝撃音が響き渡る。

「勉強になりました。ありがとうございます」

「うむ」

「余計な事をオオオツ……！？」

エリオットが声も出なくなり床に下ろされると……。

「ちよつとあんたたち！ エリオット様になんてことしてくれてん
のよ！？」

無謀にもマーガレットが食ってかかった。取り巻きたちが“やめ
ろ！”としきりにゼスチャーしているけど、マーガレットの目には
入らない。

「おや、貴方は？」

マーガレットが胸を張って答えた。

「あたしはマーガレット・ポワソン！ ポワソン男爵家のマーガレ
ットよ！」

「貴族令嬢が何たる口の利き方ですか！？ ……これはお仕置きが
必要ですね」

「ふえっ？」

マールボロ伯爵夫人が状況を飲み込めないマーガレットを横抱き
にすると、スカートをまくり上げてパンツを膝まで引きずりおろし
た。

「いや、ちよつと！？ あたし女の子よ！？ みんなが見てる前で何してくれちゃってんのよ！？」

「こんな青い尻で欲情する男はいません」

「いや、みんな目を背けているし！？ 赤くなっているし！？」

パンツッ！ パンツッ！ パンツッ！ パンツッ！

「ぎゃあああああ！」

「令嬢がなんと慎みのない悲鳴を上げるのですか」

「あたしにこんな事して、エリオット様が黙ってないわよ！？」

「私っ！ 令嬢が下町言葉であたしとはなんですか！」

「ぎゃあああああ！」

音が変わったことに気が付き、ヒョコッとレイチエルが顔を出し

……悲鳴を上げた。

「それ私の！ 私のサンドバッグなのに！ 初めて叩くの楽しみにしてたのに！」

「だあれがサンドバッグじゃあ！？」

「なんですか、その汚い言葉は！」

パンツッ！ パンツッ！ パンツッ！ パンツッ！

「夫人、そろそろ私にも叩かせなさい」

「おまえらお仕置きなんて嘘だろ！？ 楽しんでるだけだろ！？」

「次、私！ 私い！」

「おまえも黙れ！ このイカれたサド野郎！」

スッパァン！ スッパァン！ スッパァン！ スッパァン！

「ふむ。なんとか叩き心地！」

「で、ございましょう?」

「あゝん、私のサンドバッグがドンドン使い込まれて……!」

「おまえらまとめて死んじまえ!」

「なんですか、その汚い言葉は!」

「いいですかレイチエルさん。いつまでも聞きわけがないと、貴方もこうですからね?」

王妃教育の鬼教官二人は、どこか満足げに去って行った。

「……」

後にはレイチエルのほかに……むき出しのお尻を突き上げたまま
エリオット マーガレット
床に突っ伏す王子様と貴族令嬢、気まずげに黙っているエリオットの取り巻きが残された。

皆が押し黙ったままの中。

もそもぞ起き上がったエリオットが、へっぴり腰でズボンを上げようとし……腫れ上がった尻が痛くて途中で断念した。マーガレットもグスグス泣きながら、なんとかパンツを上げる。スカートは問題なく下りた……当たり前だ。

全員が無言の空間で。

部屋の主であるレイチエルが何か言おうとして言葉を探し……ウインクして親指を立てた。

「キュート!」

「うるせえっ!」

膝を叩かれてエリオットが下を見下ろせば、ヘイリーが気の毒そうな顔をしてオレンジを差し出している。

『気に病むなよ。ほら、これ食え』

「うるせえ！ エテ公に同情されてたまるか！」

「畜生、覚えてろよ！」

エリオットが泣きながら走り去った。マーガレットが続き……他の取り巻きたちは追いかけていいのかわからず、顔を見合わせあった。

その後一週間。エリオットは自室から出てこなかった。

30・王子は令嬢を暗殺する（予定）（前書き）

ザマア3・5？ 3が無いけど

30・王子は令嬢を暗殺する（予定）

エリオット王子の執務室には、一種異様な空気が流れていた。

やっと閉じこもっていた寝室から出てきたエリオットからは、追いつめられたチワワのような凶暴なオーラがダダ漏れになっている。全員集合を命じられた取り巻きたちは、今までにないエリオットの様子に刮目していた。

「諸君。いよいよ明日には、視察に出ていた父上と母上が帰ってくる。すでに前泊するティレルの街で投宿し、明日の昼前には王宮に着くと先触れがあつた」

「おお、ついにお戻りに……」

「今回の視察旅行はやたら長かつたな……」

「途中で陛下の具合が悪くなつたらしいぞ」

騒めく側近たちの会話を手を挙げて打ち切らせ、エリオットは先を続けた。

「初めの予定ではレイチエルに罪を自白させて父上の前に引きずり出し、婚約破棄を正式に承認してもらつてマーガレットと新たに婚約するつもりだった。ところが……！」

エリオットが両手の拳を振り上げ、力いっぱい机を叩く。

「あのとんでもない魔女は断罪に怯えるどころか、今に至るまで牢屋の中で好き勝手やりたい放題だ！アレに罪悪感なんぞ期待はしていなかったが、それにしだってなんで外にいた時より楽しく毎日過ごしているのだ！？おかしいだらう！？」

取り巻きたちは顔を見合わせる。

確かに王子の言う通りなのだけど、それはもう常々身に染みていることで……今さら全員集めて一から聞かせる必要性が判らない。

皆が首を傾げる中、エリオットは続けた。

「それだけではない。父上たちの視察旅行が長くなってしまったおかげで、その間にレイチエルの手の者が暗躍し……奴に関わる様々な事件が、ことごとく奴に有利に働いてしまった。今では王宮の者たちは我々に聞こえる場所でさえ、レイチエルの肩を持つような発言をする始末！」

正確に言えば彼らが話しているのは“王子が当てにならない”から“レイチエルの断罪は間違いじゃね？”という会話で、直接レイチエルの肩を持っているわけではない。

むしろエリオットが万事そつなくこなしていれば出てくることの無い話題だったのだけれど、エリオットたちにはその区別がない……だってエリちゃん馬鹿だから。

「この状態で父上が帰って来られても、我々の勘違いで済まされてしまう可能性が大だ。冗談ではない！ この三ヶ月の苦闘は何だったのだということになってしまう！」

現状はそれどころじゃないのだけれど、エリオットの認識はそんな感じ。

「そこでだ」

エリオットがやっと本題に入る。取り巻き一同、固唾を飲んで見守った。

「もう我慢がならん。レイチエルを今晚のうちに暗殺する！」

いつも我慢してないじゃん……というツッコミはさすがに今は出でこなかった。

エリオットの言葉の衝撃に、少年たちの間を無言の緊張が走った。今日の宣言はいつものモノとはレベルが違う。エリオットの追い詰められて狂気すら感じられる顔を見れば、王子が本気も本気で言っているのが判る。

エリオットが伯爵令息を指した。

クロスボウ

「貴様は武器を調達しろ。レイチエルは弩弓を持っている。最低でも盾を三枚と弩弓も三丁ぐらい、できれば止めを刺すのに長槍も三本ぐらい欲しい。三人連れて、直ちに準備せよ！」

「はいっ！」

王子様は反対側に座っていた子爵家令息を見る。

「貴様は二人連れて、地下牢の出入りを見張れ。何しろ明日には父上がお戻りになれる。一般の出入りのほか、レイチエルの手下の出入りもあるかもしれん」

「はい！」

「明日の朝まで発覚を防ぐため、牢番が帰ったら決行だ」

「あいつ牢番のくせにほとんど夜勤しませんよね」

「そんなの今はどうでもいいわ。ではいくぞ！」

エリオットの号令に、少年たちは一斉に執務室を飛び出した。

そのちよつと後。

お茶汲みをしていたメイドがカップなどを片付けて退出する。彼女は使用人用の作業通路に入った途端、その場に茶道具の載ったワゴン捨てて走り出した。

伯爵令息は仲間を連れて急ぎながらも、ついつい愚痴を漏らしてしまった。

「殿下も決起するのはいいとして……もっと早く言ってくれば良いのに」

今は夕方。

……そう、夕方である。決行当日の。

多分牢番が帰るのはもうすぐの事。牢内の明かりが深夜についても巡回の騎士に不審がられるだろうから、地下牢に押し入るにも時間がない。

「昨日とは言わないから……せめて昼前までに言ってくれば、家から持って来れたのに」

どうやって門番に通してもらうかは、まだ考えていない。だって僕たちエリオツツ。

どこへ行く当てもなく、彼は仲間を連れて王宮内をうろろ歩き回った。

「騎士団の武器庫から盗む？ でも、警備がいるよなあ……」

伯爵家のボンボンが人生最大の難問に悩んでいた時……ついて来ていた男爵家の三男が肩を叩いた。

「あれ！ あれを見てください！」

「うん？」

彼の視線の先……何かの倉庫らしい建物の脇に。盾が三枚と槍が三本、弩弓が三台壁に立てかけてある。中身の入っている矢筒もあった。

壁に張り紙がしてあった。

『ただいま虫干し中 触るな！ 近衛騎士団』

少年たちは肩を叩きあつて喜んだ。

「これぞ天佑神助だ！」

「良かった、ちょうどいいや！ これを持っていけば殿下に叱られなくて済むぞ！」

四人は人目が無いのを確認し、急いで武器を担いで逃げた。

なんでぴったりの数だったのか？

なぜ騎士団はこれだけしか虫干ししないのか？

どうして見張りも置かずに、これ見よがしに放置してあったのか？

少年たちは、そういう部分に疑問を持たなかった。だって彼らはエリオッツ。

地下牢への警告は、さすがに直行した子爵令息たちの後になった。王子執務室付きのメイドからバトンタッチされた庭師は、地下牢を遠巻きに見る位置で一回停まって監視体制を確認した。

大回りで一周ぐるつと周りを確認し……首を傾げた。

「入口しか、見ていない……？」

聞いていた通り、貴族のお坊っちゃんが三人で地下牢を監視している。

しているのはしているのだけれど、三人並んで突っ立って、入口扉だけを監視している。あの分では、先に同じ目的で配置されている騎士が横の茂みで困惑しているのも判っていない。

正直罷を疑ったけど……どうみても罷になっていない。困惑するしかない庭師は、エリオッツのクオリティを知らなかった。

とりあえず障害にならなそうなので、庭師は裏手の換気窓に回り込んだ。裏手を監視する騎士が味方なので先に接触し、手身近に用件を説明して周囲の警戒についてもらう。

かがみこんで声をかければ、すぐにレイチエルが応答した。

「どうしたの？ 直接緊急連絡なんて今までなかったのに」

「はっ、実は……」

話を聞いたレイチエルは、少しの時間ですぐに結論を出した。

「では、武器はこちらで調達させたのね？」

「はい。念のために騎士団の中の者が、使い物にならない物を用意

している筈です」

「ならばそのまま殿下たちにここを襲わせなさい。せっかく積み上げた状況証拠ですもの、この辺りで言い訳のしようもないものをドカンとやってもらいましょう」

「はっ！」

レイチエルは庭師と騎士を交代させて、騎士団関係の指示を出していく。

「我が手の者を選んで宿直させる必要はありません。但し、当直の小隊長はこちらの者にさせなさい」

「地下牢の周りの監視は撤退させますか？ 殿下は自分で監視させているのを忘れていたみたいですが」

「そのままでもいいです。事件が起きた後、なぜ今夜だけ監視を解いたのか問題になるかもしれません。むしろ忘れていた殿下たちが押し込んでくるのを、騎士団詰所へ報告に走ってもらう役をやってもらいましょう」

「はっ！」

エリオットたちが武器を手に入れて氣勢を上げている頃。

レイチエル側の準備も肅々と整いつつあった。

空が闇に包まれる頃。

「行けっ！」

エリオットの号令に、彼の取り巻きたちが一齐に地下牢へ雪崩れ込んだ。ドカドカと足音を立てて前室へ一気に押し入り、盾を構えた者の後ろに弩弓を持つ者がセットになって牢へ矢を向ける。

最後に地下へ入ったエリオットが、余裕ぶって中へ声をかけた。平静に見えるけど、視線だけに狂気が滲んでいる。

「レイチエル、お前の事だから父上たちが明日帰ってくるのは聞い

ているだろう。明日父上と母上に無実を訴えれば、貴様を気に入っている母上が解放してくれると目算しているのだろうが……残念だったな。貴様が明日の日の目を見ることはない」

ちよつと持つて回つて言い方だけど、レイチエルならば言いたいことは伝わっただろう。反応を楽しみにしているエリオットの前で……レイチエルが呆れ果てたため息をついた。

「殿下ももうちよつと考えているかと思つたのですが……」

「は？　なんだ？　俺が実力行使に出ることはないと思つていたか？　甘く見過ぎたな、俺はやる時はやる男だ」

「その“やる男”様に一応忠告しておきますけど……相手が避難するのは待たない方がいいですよ？」

「なに！？」

慌てて前に出れば、レイチエルは積んだ木箱の後ろで弩弓を構えていた。つまり、盾一枚の自軍よりよほど固い陣地に立て籠もっている。

「なんでヤツが逃げ込むのを待つてたんだ！？」

「いやでも、いきなり撃ち込むわけにもいきませんし……」

「『動くな！』ぐらい言えただろう！」

「あ、そうか」

手下の無能っぷりに怒りが収まらないエリオットに、レイチエルは忠告する。

「細部まで計画を詰めておかないからですよ……そういう粗忽で抜けている所を何とかしませんと、後々たいへんなことになりますよ？　すでにお尻に火がついているんですから」

囲まれてなお減らず口を叩くレイチエルに、エリオットは憎いというよりむしろ感銘を受けた。この心理は自分是有利な立場と誤解している人が、全能感に包まれて他人を下に見る時のアレである。

「お前が我々に囲まれて、未だにそんな口を利けるとは大したものだ。ははは、その心意気だけは記憶しておいてやろう。むしろ尻に

火が付いているのは貴様なのにな」

「いいえ、殿下ですよ」

「ふっ、ホントに口だけ達者な奴だ……ん？」

エリオットは、何かお尻に違和感を覚えた。

振り返ってみると、ズボンの尻が燃えている。

その下を見れば……いつの間にか回り込んだレイチエルのエテ公が、エリオットの尻めがけてマッチを構えていた。

「うおっちゃー！？ あちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃー！」

取り巻きたちが呆然とする中、エリオットは床を転げまわる。何が起こっているのか気が付いた他の者が消火に参加したおかげで、エリオットのズボンが燃えた以外はパンツが焦げたぐらいで済んだ。

お尻は明日医者に診てもらわないと判らない。

「お前のペットは何て事をするんだ！？」

「殿下は『リアルに尻に火がついてる』っていう、小粋なジョークじゃないですか」

「ブラック過ぎて笑えるか！ 死ぬかと思ったぞ！？」

「いまから私を殺すって人が、何を生ぬるい事を……」

レイチエルは手元に戻った猿と、顔を見合わせて一緒に肩を竦める。

「せっかくヘイリーがギャグをかましたのに……ユーモアが判らない人ですよね」

「ウキー」

「殺す！ まずエテ公を殺す！」

エリオットの指示で弩弓部隊がゆらゆら照準を変える中を、ヘイリーは木箱を駆け上がって換気窓から外へ逃げていった。

お尻に穴が開いた間抜けな姿のエリオットが、肩を震わせて調子はずれの笑い声をあげた。

「ふ、ふふふふ……レイチエル。貴様、俺を怒らせたな!？」

「ヘイリー渾身のギャグを潰されて、私の方が怒りたい気分です」

「ふざけるな!？」

激昂したエリオットが取り巻きたちに構えるように命じた。レイチエルも弩弓の矢先を上げる。

そしてエリオットが射撃を命じようとしたところで……一番扉に近い所にいた子爵家令息が恐る恐る声をかけてきた。

「あ、あの……」

「なんだ!」

エリオットの怒声に首を竦めた彼は、それでも報告すべきと考えて外への扉を指した。

「あの……さつきから、外がやかましいんです」

「なに? ……見て来い!」

「は、はいっ!」

慌てて階段を駆け上がった子爵家の次男は、勢いそのままに駆け下りてきた。

「で、殿下! 外で、猿が派手に花火をしています!」

「……は?」

彼が何を言っているのかわからない。

子爵家のボンが繰り返した。

「レイチエル嬢の猿が、さつきからロケット花火を上げているんです!」

エリオットの後ろで伯爵家のドラ息子が呆然と呟いた。

「そういえば、アイツさつき自分でマツチすってたな……」

猿の行動の意味を全員が理解したのは、その直後の事だった。
「全員武器を捨てろ!」

地下牢へ、騎士団が雪崩れ込んできた。当直の騎士たちが完全武

装で乗り込んでくる。

「な、なにごとだ!？」

エリオットが叫ぶと、険しい顔の小隊長が返した。

「それはこちらのセリフです。地下牢でこれはいつたい何ごとですか」

すでに我らがエリオッツは何倍もの兵士に囲まれて武装解除させられている。

「き、機密事項だ! 無関係な貴様らに話す必要はない!」

「そうですか」

エリオットが居丈高に怒鳴ると、騎士のリーダーはあっさり引き下がった。そして部下に向かって叫んだ。

「こいつらの持っていた武器を調べろ!」

「何!？」

「ついさきほど、虫干ししていた保管武器が無くなっているのが見つかりました。慌てて人数を動員して搜索していたところへ、この騒ぎです」

兵士の一人が叫んだ。

「どれも見覚えのあるものです。盗難品です!」

「わかった。コイツらを騎士団詰所へ連行しろ! どういうつもりか、じっくり聞かせてもらおう」

「ひいひい!？」

エリオットが呆然としている間に、取り巻きは一人残らず縄をかけられて引きずられていった。

「……な……」

開いた口が塞がらないエリオットに、騎士の隊長が宣告する。

「殿下。関係者として、後で事情聴取させていただきます。宜しいですな?」

「……わかった。だが!」

エリオットは奥に立て籠もるレイチエルを指した。

「コイツも牢に入っている身でありながら武器を所持しているぞ!」

隊長がレイチェルを見た。

「殿下、なぜ御令嬢が武器を持っているんですかな？」

「なぜ？ どうしてそれを俺に聞く！？」

確実に信用していない目で、騎士は言う。

「我々の知っている限り、こちらの御令嬢は夜会の最中にいきなり拘束され、牢に入れられたと聞いています」

「ああ、そうだな」

「それが、なぜ武器など所持しているのですか？ ドレスの下に弩弓が携帯できるとでも？」

「な、それは……」

痛い所を突かれた。

「いや……牢内に準備していたのだ」

隊長の視線は余計に厳しくなった。

「牢内に？ 夜会で突然拘束されたのに？ 着替え一つ持たない筈の令嬢が？」

「いや、見る！ たつぷり物を持っているじゃないか！」

牢内を見ても、騎士の反応は変わらない。

「そりゃ、貴人用の牢ですから家具ぐらいあるでしょう。まさか牢屋の壁飾りに弩弓があったとでも言うんじゃないでしょうな」

「き、貴様……！」

言い返せないエリオットを置いておいて、当直の小隊長はレイチェルに声をかける。

「御令嬢、なぜ弩弓を所持しているのですかな？」

言われたレイチェルはフルフルと震えている。

「で、殿下が……突然陛下がお帰りになる前に私を始末すると……。周りを囲んだ後に、武器の一つもないと外聞が悪いからと嘲りながら投げ渡されました……。私も黙って殺されるわけにもいかず、せめて形だけでも抵抗を、と……」

うつうつとむせび泣くレイチェル。

「殿下……別件でもお聞きすることになりそうですな？」

完全に見る目は犯罪者に向けられるソレ。エリオットは慌てた。

「ま、待て！？　そうだ、コイツを牢に入れた晩に、当直の騎士達もコイツが自分の荷物から弩弓を取り出したのを見ている！　そいつらに話を訊け！」

「三か月前のですか？　我々もローテーション配置ですから、その頃の当直は二か月前に前線へ移動しています。あと四ヶ月で帰ってきますが」

「そんな！？」

エリオット、この時大叔父と宰相も見ているのを忘れている。

……どちらにしても、レイチエルの息のかかった小隊長がエリオットの意見を容れるはずが無いのだが。

「と、とにかくコイツが武器を持っているのは問題だろう！？」

エリオットの苦し紛れの言に、小隊長がレイチエルに向き直る。

「では御令嬢、外の連中は排除しましたのでそれを渡してもらえますかな」

「はい」

「えーっ！？」

あれだけエリオットを苦しめた弩弓を、レイチエルは簡単に手渡した。

「では殿下。まさか逃げることはないでしょうから、詰め所でお待ちしておりますぞ」

「わかってる！」

慇懃無礼に念押しした隊長に率いられ、当直の騎士たちは引き上げていった。

「くそっ、あの野郎……」

騎士の王子を王子と思わぬ態度に腹を立てながらも……エリオットはチャンスの到来を感じていた。

今ならレイチエルを後ろから刺せる……。

エリオットはまだ自分のサーベルを持っている。取り巻きの排除に成功して油断しているレイチエル。不意に投げつけられ、急所に致命傷を与えられるかもしれない。

「よし……」

こちらに背中を見せているレイチエルに向けて、サーベルを抜こうとエリオットが柄に手をかけた時……。

「よいしょと」

近くの木箱から、レイチエルが弩弓を取り出した。

「……は？」

レイチエルは手早く弦を巻き取り、矢をセットする。

「準備オツケー」

「き、貴様……もう一台持っていたのか!？」

「殿下……」

レイチエルが呆れたように頭を掻いた。

故障した時の為に、セカンドガン予備機を用意するのは鉄則ですよ?」

「知らねえよ!？」

なにそのベテラン傭兵みたいなセリフ。

「じゃ、ちよつとお話ししましょうか？」

レイチエルが飛び道具なのに対して、エリオットのサーベルは間合いが足りないうえに投げつけてしまえば二撃目は無い。

エリオットは急激に不利になった。

「まあ、お話しするのは私じゃないんですけどね」

レイチエルが弩弓を引いた。

「？」

意図が判らずエリオットが疑心暗鬼になっていると……後ろで扉が開き、階段を一人降りてくる音がした。

「いらっしやい。この間新婚旅行に出かけたばっかなのに悪いわね」

「いや、いいんだ。ちょうどボクも用事があったから」

親し気なレイチエルの呼びかけに答え、エリオットの背後からありえない声が響いてきた。

「……まさか？」

エリオットがさび付いた扉のように、ギリギリ音を立てそうな力クカクした動きで振り返ると。

「やあ殿下、久しぶり」

黒髪をポニーテールにまとめた少女が立っていた。

「ボク、ちよつと殿下に聞きたいことがあって帰ってきたんだあ」

開いた瞳孔に狂気を宿して、元祖危ない少女はにつこり微笑んだ。

「この『殿下が僕を狙ってる』って本に書いてあるんだけど……嫌がるサイクスを殿下が無理やり食べちゃったって、本当？」

「え？ いや、なに……その本？」

「サイクスに聞いたたら、何やっても知らない、ホントじゃないって嘘つくんだよ？ で、

しつこく聞いたらサイクスが入院しちゃったから……殿下に聞きに来たんだあ」

レイチエルが朗らかに注意した。

「マルティナ、殿下に訊くのはいいけど……見える所にヤツちゃ駄目よ？」

「わかつているさ。五体満足で返すよ」

マルティナがどこからもぎ取って来た机の脚で、自分の掌をパシパシ叩く。

「それでは殿下……時間は有限です。サクサク答えてくださいね？」
夜が更けるまで、男の叫び声が裏庭に木霊した。

31・主は断罪する（前書き）

すいません、また通信系がおかしい……。
最後なのに締まらないですね。

31・王は断罪する

王宮へ、ついに国王夫妻が帰ってきた。

近衛の隊列に挟まれ静々と進む馬車を、宮殿で留守を守っていた文武百官が歓呼で出迎える。

「はっはっは、なかなかの歡迎ぶりだな」

主君の帰着を喜ぶ廷臣たちの熱烈な声に、慣例とはいえ国王も相好を崩した。これだけ歡迎されていると、自分がさも人気があるかのように思えてくる。

王妃も微笑んだ。

「今回は長く留守にしましたからね。やはり陛下の存在は大きいと実感したのでしょう」

「これで一週間もすると、やはりいると息苦しいとか言い出すのではないか」

「まあ、陛下下つたら。臣下の忠誠心を邪推するものではありませんわ」

「ははははは」

ゆっくり進む車窓からは、王の馬車を出迎えようと次々官吏や武官たちが駆けつけるのが見える。沿道に並ぶ廷臣たちは心の底から喜んでるように見えた。

……喜んでるように見え過ぎた。

「……王妃よ。何か様子がおかしくないか？」

「……そんな気がしますわね」

出迎えの人々の手を振る様子に力が入り過ぎているというか……ただの出張帰りの出迎えというより、凱旋パレードでも見るような……いや、むしろ絶望的な籠城戦に救援に駆けつけた援軍を見るような……。

「もしかして……エリオットの騒ぎで……」

「……部屋に戻って落ち着いたら、確認しましょうか」

なんとなく気まずい思いを乗せて、行列は熱狂的な歓迎の中を進んでいった。

両親の帰還を侍従に知らされ、エリオット王子は表情を引き締めた。

「ついに父上と母上が帰って来られたか……よしっ！ 事がここま
で来た以上は、もはや誠心誠意レイチェルの非道を訴えるのみ！」

昨晚、問題の悪役令嬢がうつとおしいので暗殺未遂しちゃった男
とは思えない決意だ。

「さっそくでございますが、一時間後に謁見の小広間で先日の婚約

破棄に関する裁定を行うとの事にございます」

「うむ。俺も直ちに向かおう」

「ははっ。……押した方がようございますか？」

「ああ、頼む！」

エリオットの車椅子は、侍従に押されて執務室を出て行った。

国王夫妻と両親の帰還をソフィアに知らされ、レイチェルは軽く
伸びをした。

「そうですね……もっとゆっくりしてきてもよろしかったのに」

レイチェルの顔に、“めんどくさい”と書いてある。

「欠席裁判も宜しくないかと思いますが」

「そうですね……仕方ありません」

とりあえず室内着を散歩着に着替えた。

「……参内するにはまだ軽装過ぎませんか？」

ソフィアに指摘され、レイチェルはふふんと鼻を鳴らした。

「私は牢に入っているのだから礼装を着ている方が変です。人に会

える程度の服装ならいいのです」

「その心は？」

「礼装なんて着てたら、呼びに来るまで二度寝してられないじゃないですか」

レイチエルは再度布団に入りながら答えた。

表敬訪問や非公式な対談の際に使われる小広間に、三か月前に行われたエリオットの婚約破棄の関係者が集められた。

国王夫妻のほかは、レイチエルにエリオットとマーガレット。その他に宰相や大公、騎士団長や大臣などの主要な閣僚級の人々。それにファーガソン公爵夫妻。

以上。

「……これだけ？」

意外に少ないメンバーに、ちょっと肩透かしを食らった顔のエリオット。

全く黙ったままのマーガレット。

国王の顔付きと集まった人々の顔ぶれを見て、だいたいの所を察したレイチエル。

「うむ。別に公式な裁判をやるわけではないからな」

王が鷹揚に頷いた。

「さて」

玉座に座った王が全員の顔を見渡した。

「先日のパーティで起きたエリオットの婚約破棄以来混乱が続いて
いるというので、ここらでカタをつけたいと思う」

重臣たちが口々に賛意を漏らした。特に大公がホッとした顔をしている。

待ちに待った瞬間に、エリオットが勢い込んで口火を切った。

「では父上、私から婚約破棄に至った説明を……！」

「ああ、それはどうでもいい」

口火を切ろうとしたが、水をかけられた。

「……はっ？　なんと？」

息子の問いに国王は頬杖を突いたまま、もう一度繰り返す。

「だから、そんな事はどうでもいいのだ」

「いや……えっ？　どうでもいいと申されましても……それを議論しに集められたのでは？」

「議論することなど別に無い。事実関係の確認など当の昔に済んでいる」

国王がちらりと息子を眺めて口角を歪めた。

「余がのんびり温泉で遊んでいたとも思っていたか？」
事実である。

「湯治で腹具合を治している間にも、情報を集めて分析を行っていたのだ」

部下が。

「今ここにおまえたちを集めたのはな……」

国王が座り直して足を組み替えた。

「余の跡継ぎに関して、内々に決定を申し渡す為である」

一瞬呆けていたエリオットが慌てて膝をついた。

「お、お待ちください父上！　王子の婚約破棄とその事情を、どうでもいいと申されましても……！？」

「正確には、その後の三ヶ月でどうでもよくなったと言っべきかな？」

国王がエリオットを見据えた。

「お前たちのバカ騒ぎについては、実のところ二週間で調べが付い

た。お前たち以外の関係者に事実関係をあたり、裏付けの確認も簡単に済んだ。レイチエル嬢が虐めたなどと言う事実は無かった。前提条件が無いのだから、お前の行った婚約破棄とその後の対応は不当である」

「そんな……！？ それは違います、だつて……！」

「まあ聞け！　そこまで調べが付いたところで、湯治中の我らの所にファーガソンが合流して善後策の協議が始まったのだ。それでどう荒立てずに事を収めるか検討している間に……それどころじゃなくなってきたな」

国王の視線を受けて、書類の山をワゴンに乗せた侍従たちが出てきた。

「エリオット。左の山が政庁や閣僚、各部署が余の所に寄越した報告書だ。右が余の放った裏の者が提出した、収集情報に関する報告書。そして中央の他の倍以上あるのが、レイチエル嬢が自分の手の者を使って父親に届けてきた現状報告。都を遠く離れた公爵が、現地にいるかのように状況を把握できる優れものだったぞ」

国王が厳しい目でエリオットを見据えた。

「で、お前の報告はどこにある？」

「……！」

国王の問いに、エリオットは答えを持ち合わせていない。

「基本的に余が留守中の連絡や問い合わせは政庁が寄越すことになっているから、おまえが日々の細々した問題を自分で余に確認する必要は無い。だが……将来の王妃と決められた許嫁を廃するようなおまえにとつての大事件が起こったのだろう？　いち早く余に知らせ、自分の立場を説明する必要があったのではないか？」

「そ、それは……」

エリオットが喉を鳴らした。

「……あとでまとめて出すつもりでした」

「課題をため込んだ子供のような事を言うな」

国王は、四人目の侍従が盆で運んで来た書類を手にとった。

「これは各報告書から抜き出した、婚約破棄後におまえと手下どもが起こした事件と影響をまとめた物だ。あまりに数が多くて抜き出すにも苦労したぞ？」

部下が。

「これを読めば、おまえの政務がどれだけ滞っているかよく判る。

レイチエル嬢への嫌がらせの準備、実行でリソースを取られ、その後は反撃されて被害を被って仕事どころじゃない。その繰り返しだな」

「それはレイチエルが……！」

「レイチエル嬢はほとんどその場で反撃しているだけだな。自分で何か企んだ時も、指示だけで済んで自分は読書か昼寝、趣味の事をして……何それ羨ましい……おまえに手を取られていないようだ」

さすがの国王も、レイチエルがBL本の執筆に時間を取られていたことは把握していない模様。

「おまえがレイチエル嬢にかまけて仕事をしない事で、王宮の者どもがどれだけ迷惑を被ったと思っている。婚約破棄の後にすべきだったのは、レイチエル嬢にギブアップ宣言を出させることよりも他にあつたのではないか？」

摘まんでいた報告書の抜き書きを侍従の持つ盆に放ると、国王はエリオットを厳しく見据えた。

「おまえは国政を見るのに能力も優先順位の判断も足りない。それを補うのがレイチエル嬢だったのだが、助力を頼むところか好き嫌いで排除する始末だ。おまえが継ぐのが伯爵辺りなら、まだ好きな女との結婚を優先してもいい。だが、王にそんな贅沢は許されぬ」

「ち、父上……」

エリオットは視線を横にずらした。

「じゃあ、母上の事は……」

「話の腰を折るんじゃない！」

「いえ、単純に疑問に思っただけです。もしか父上は母上を」
「議論をすり替えるな！」
「そっくりそのままお返ししますよ！」

国王はエリオットの疑問を強引に打ち切ると、玉座から立ち上がった。

「我が息子たちは、どちらも上に立つ者として不安が残る。その点、性格は破綻してあるが執行能力が優秀なレイチェル嬢は、次代の治世を考えるに外すことはできん」

「誰が性格破綻者ですか」

「というわけで！」

「もしもし？ 訊いてるんですけど？」

「エリオットがレイチェル嬢を娶れないというのならば、王太子には次男のレイモンドを置く」

「おーい、おーい」

「そんな、父上！」

「親子で無視しないで下さいーい」

「これはもう決定だ！」

「王冠のルビー綺麗だな、剥ぎ取って持って帰ろうかな」

「それは止めて！」

レイチェルをなだめ、王が手を叩いた。

「レイモンド！ 入ってこい！」

王の声に出席者が一斉に戸口を見た。呼び出しに合わせて第二王子が……入ってこない。

「？」

注目を浴びて居心地の悪そうな警備の騎士が、廊下に出て辺りを見渡す。

「あの、殿下はいらしていませんが……」

「呼んでおいたのに！ レイモンドはどこへ行った……ああもう、兄弟揃って……」

「父上、横にいますけど」

「うわっ、びっくりした！」

よく見れば、エリオットを若干幼くしたような少年が玉座の近くに立っていた。

「お、おまえいつ入ってきたんだ！」

「最初からいました」

人々がよくよく思い返せば……。

「あ、いた気がする……」

「そつえば、最初からそこにいたような……」

「僕の認識、みんなそうなんです」

初登場、影が薄いのが悩みの第二王子。

「いつだって会場にはいたのに……」

初登場ではなかったらしい。

エリオットの小型版だけあって、レイモンドも金髪の見目麗しい少年だった。

「殿下が僕を狙ってる」新作は、ちょっとシヨタ路線に振ってもいいかなとレイチエルは思った。

「こんな伏兵が王家に隠れていたとは……！」

感心するレイチエルに慥然とした顔のレイモンドが返す。

「隠れてません。行事の時にはいつでも兄さまの横に出ていたんですけど……レイチエルお姉さま、その顔だと覚えていませんね……」

「すいません、顔を覚えていないどころか存在も覚えていませんでした」

「言っちゃまずい相手に堂々と放言するお姉さま、凄いと思います」
国王は威厳を取り繕うように咳払いし、ステルス次男に問いかけた。

「レイモンド。おまえはレイチエル嬢を妻とし王位を継ぐつもりはあるか？」

十四歳思春期は即答した。

「はい、もちろんです！」

目をキラキラさせて、少年は胸を張る。

「兄さまがいらっしゃるので僕に廻ってくることはないと思っていましたが……こういう事情でしたら、僕は喜んで王太子に成らせていただきます！」

エリオットは愕然として弟を見た。

「レイモンド、おまえ王位を狙っていたのか！……影が薄いのだが取り柄だと思っていたのに……」

「兄さま、影が薄いのは取り柄ではありません」

レイモンドは胸に手を当てた。

「正直王位などはどうでもいいのですが……憧れのレイチエルお姉さまと結婚できるのなら、要らない地位が付いてくるのも我慢します！」

「付帯条件の方が重要なんだからな！？」

「おまえ、あんなのと結婚したいのか！？ 地獄を見るぞ！？」

エリオットの叫びにかき消され、国王のツツコミは無視された。

兄の忠告もどこ吹く風、レイモンドは夢見るように微笑んだ。

「あまりの影の薄さに、自分付きのメイドにお茶の時間を忘れられたり呼びかけても無視されたりした結果……僕は綺麗なお姉さんに冷たくされるとぞくぞくするようになったんです！ レイチエルお姉さまなんか綺麗で胸が大きくてクール系で胸が大きくて……もう最高じゃないですか！ ずっとあの方に無視されてみたいと思ってたんです。そしたら僕の存在丸ごと忘れて……なんて素敵な方なんだ！」

「しっかりしろレイモンド！ あれはクールじゃなくて他人に興味が無いだけだ！ だいたい粗忽なメイドと悪魔みたいなレイチエル

を一緒にするなよ！？ プラムワインを舐めて大丈夫だからって、火が付く度数の蒸留酒をジョッキでいこうと思うな！」

「兄さま、御心配なさらず！」

レイモンドは自信ありげに薄い胸板を叩いた。

「僕はこれでも、家庭教師から“一を聞いて十知った気になる男”と評価されたんですから！」

「お兄ちゃん、おまえのそういう所がものすごく心配！」

国王は傍らの王妃に耳打ちした。

「なあ、今さらだが……どっちを太子にしても将来に展望が持てないのだが」

「それこそ今さらですよ」

王妃は扇子で口元を隠して答えた。

「だからこそそのレイチエルさんなのでしょう？」

国王が手を叩いて注目を集めた。

「それでは諸君。レイチエル嬢とエリオットの破談は追認し、レイチエル嬢の許嫁は次子のレイモンドとする。合わせて王太子にはレイモンドを正式に決定し……エリオットは臣籍降下の上、リーフレイン伯爵の爵位を授ける！」

「それは……！？」

エリオットが呻いた。

国王が授爵を約束した爵位は王族に代々伝わる伝統ある肩書だが……領地は歴史的に重要なだけで狭く特別豊かでもなく、下手すれば豊かな地域の男爵に財力で負ける程度のものだ。正直単体でもらう爵位ではなく……大公などの肩書に付属する従属爵位、または隠居する王族の年金替わりでしかない。

「父上！ それではまるで、引退するみたいじゃないですか！」

「みたいじゃなくて、そのものだ馬鹿者！ 政權に恨みを呑んで野に下る者に、反乱を起こすような力を残すわけにいかん。表に出るような失態を犯して廃嫡されるのに、名誉職とはいえ王族として遇されるだけありがたいと思え」

「しかし！？」

「ならば」

国王が抗議するエリオットに向けて、グツと身を乗り出した。

「おまえにレイチエル嬢の御機嫌取りをして、結婚を認めてもらう事ができるか？　すでに天秤がマイナスに大きく振り切れている。

レイチエル嬢にプラス評価される事は相当に難しいのは、わかるであらう？」

「ぐうっ！？」

マーガレットを捨ててレイチエルに戻ることで自体、エリオットの心理的にありえないのに……。

「それからエリオット。おまえは忘れているようだが……」

言葉の出てこないエリオットに、国王は今まで封じていた黒歴史を開放した。

「おまえが園遊会でスカートをめくって強烈なアッパーを返されて悶絶し、仕返しに石を投げつけて蜂の巣を投げ返された相手がレイチエル嬢だ。その専守防衛なわりに苛烈な報復に王妃が惚れてな、息子を傷物にした責任を取れと無理やり婚約を結んだのだ」

「……もしや、従兄弟のグローブナー伯爵を棍棒で滅多打ちにしたのも……」

「レイチエル嬢だ」

「……本当にもしかして、池で溺れる私に笑いながら石を投げつけてきたのも……」

「それは殿下の被害妄想ですわね。私、別に笑っていませんでしたわ。つまらない仕事を早く終わらせてデザートを食べに行きたいと思っていたのですもの」

「俺を殺すのがつまらない仕事だとッ！？」

「あら失礼な。私、人殺しが楽しい人種ではございませんわ。だから殿下はサクツと処理してブッフエに行きたかったのに、なかなか沈んでくれないから困ってしまって……ホント、数量限定のチェリーチーズケーキを食べ損ねたらどうしてやろうかと」

「おまえ物事の重要度がおかしいだろ!？」

「仕事の優先順位がつけられない殿下に言われたくありません」

涼しい顔のレイチエルに喰ってかかるエリオットに、国王が尋ねた。

「で、どうする？ おとなしく隠居するか？ レイチエル嬢に再チャレンジするか？」

「……俺、いや……私は……」

エリオットの脳裏を遙か昔の陰惨な記憶と、ここ三ヶ月の心労がよぎる。

車椅子から立ち上がりかけ、つんのめったエリオットは四つん這いのまま懊悩し……

「……リーフレーン伯爵を謹んでお受けします……」
心が折れた。

「さて、エリオットはかような仕儀に相成ったが……」

国王がマーガレットに視線を向けた。簀巻きのマーガレットの後ろに立っていた侍従が猿轡を外す。

「ぶはっ!？ ちょっと王様、これはないんじゃないですか!？」

いくら何でも……」

「静かにしないと馬のハミを噛ませるぞ」

「静かにします」

さっきまでビタンビタン跳ねていた令嬢が静かになったので、王はいくつか質問をする。

「さて、ポワソン男爵令嬢よ。王子に必要な条件とは……何を思い

つくかな？」

ぐるぐる巻きで転がされているツインテールは首を傾げた。

「えーと……顔？」

「……他には？」

「んー……金？」

「……他に？」

「まだ！？ ううーん……あ、愛馬あいしゃは白馬が良いです」

国王は皆に視線を戻した。

「見ての通り、この娘はある程度まで庶民として育ったために貴族の素養が足りん」

「それ以前の問題に聞こえましたが……」

宰相の疑問をスルーして、国王はビシッとマーガレットを指さした。

「この騒動を引き起こしたお主をそのままにしておくわけにはいかん。そこで有力貴族家に無期限で行儀見習いに出すことにする」

「ふえっ！？ それだけでいいの？」

マーガレットが驚いた。エリオットの処分を今見ていて、半庶民の自分がどうなるかと思っていたのだ……さすがにそれぐらいわかる雑草娘。

「うむ。すでにファーガソン公爵には話をつけてある。しばらく娘に付けるそうだ」

出席者はしばらく考えていた。

マーガレットがハツとして気が付いた。

「それレイチエルじゃん！？ 言葉飾ってるけど、あたしをレイチエルの玩具にするつもりね！？」

「何を言う。ちゃんとマナーも教える気はあるそうだ」

「その言い方だといいでだよね！？ メインはレイチエルの玩具だよね！？」

国王が嘆息した。

「そうだな……こういうのははっきり言った方がいいかもな」

「なによ？」

「うむ。エリオットの不始末に、コイツを叩いただけじゃレイチェル嬢の気が収まりきらないのでな？　そこでお主は人身御供で提供されることになった」

「はつきり言えば良いってもんじゃないっ！？　だいたいあたし未成年よ？　行儀見習いでも人身御供でも、親の許可が必要なんだから！　ママがそんな許可出す筈がないんだから！」

マーガレットの叫びを受けて、国王が合図した。

「陪臣の身で恐縮ですが、失礼致します」

レイチェルの侍女、ソフィアが入ってきた。

「ポワソン男爵、並びに奥様にはお嬢様の行儀見習いについて許可をいただいてきました」

「そんなバカな！？　ママは意味が判らないほど馬鹿じゃないんだから！」

パパは？

「はい、それでお手紙を預かってきています」

ソフィアが封筒を抜き出した。

「えー、『愛しのマーガレットへ。ファーガソン公爵様のお家へ行儀見習いに出すと陛下からお話が参りました。どうしようか迷ったんですが、承諾することにします』」

「嘘ッ！？　そんなの嘘よっ！」

「『だって、承諾書にサインしたら今やってるアダム様主演の舞台の、プラチナチケットになってるプレミアムボックスシートを三日も押さえてくれるって言うんだもん。じゃあね、マナーのお勉強頑張つてね』……以上です」

聴いていたマーガレットが、今度は頭を床に打ち付けていた。

「そんななん出されたら認めるやる！？　あたしだって娘の二、三人ぐらい喜んで売るわ！　ああーっ、だけど嫌あああ！」

急に停まったマーガレットが、ちらりとレイチエルを見やる。レイチエルは今まで見たこともないぐらいに、満面の笑顔で両手を広げていた。

「いらっしやうい！」

「やっぱやだあああああああああ！」

ヴィバルディ大公が、ほっと息をついた。

「これで終わったんかの？」

宰相もホッとした様子だ。

「そうですね……」

「もうエンリケを食われることもないんかの？」

「そうですね」

「猿にリンゴを食われることも？」

「そうですね」

喜びの涙を流して抱き合う二人。

「……叔父上、何があつたのですか？」

報告書にはそこまで書いていなかった。

「ふむ、これで大団円だな」

満足げに言う国王……の後ろに気配がした。

「ロバート」

「？」

国王が振り返ると……サマーセット公爵夫人とマールボロ伯爵夫人が控えていた。

「これは叔母上。帰着のご挨拶が遅れ……」

「そんな事はどうでもよろしい」

サマーセット公爵夫人は、文字通り教鞭を手にしていた。

「ロバート、今回の貴方の判断・指示・伝達能力にいささか問題があった件について、裏でお話があります」

「いえ叔母上！？ それにはわけが……！？」

「お話があります。裏へ！」

公爵夫人は鞭を一振りした。

「それとも……ここでズボンを降ろしますか？」

王の処断は下ったけれど、まだまだうるさい小広間を離れた場所で眺めながら……レイチエルは儚げな笑みを浮かべていた。

事件は一通り終わったでしょうか？

これで事態が正常化すれば一件落着。あとはなるようになるでしょう。

レイチエルは後ろ向きに、そつと一歩踏み出す。

私の役目も、これで終わりです。
だから……。

そつとテラスから出て行きながら、レイチエルは笑みを浮かべたままでもう一度謁見の間を振り返った。

皆さん……私はもう……好きなお方の所へ行っていていいですよね？

「ああ、まったくもう……なあレイチエル、そろそろ失礼して……」

レイチエル？」

「いまだハチャメチャな会場に辟易した公爵はもう家に帰ろうと思つて娘に呼びかけた。レイチエルも三ヶ月ぶりに牢を出たのだ。家は懐かしいだろう。」

「……と思つただけだ。」

「レイチエル？」

「レイチエルが立っていた場所には誰もおらず……開いた大窓から入る風に吹かれ、ただレースのカーテンが静かに揺られているだけだった。」

「レイチエル！」

父の呼びかけにも答えず、レイチエルは幸せそうに寝返りを打った。

「こら、レイチエル！ 起きなさい！」

「んー……せつかく人が気持ちよく寝ているのに、なんですか……」

「なんですかじゃない！ 起きなさいレイチエル！」

ファーガソン公爵は鉄格子をガシャガシャ揺らした。

「なんでまた地下牢に入っているんだ！ もう出る！」

「いやですう」

レイチエルは滑らかな布団の肌触りを楽しみながら、掛け布団を持ち上げてより深く潜り込んだ。

「今、誰にも邪魔されない所で好きな方との逢瀬を楽しんでいるのです。邪魔するなんて無粋ですわ……」

「逢瀬？」

首を傾げる公爵の横で、ソフィアが冷静に尋ねた。

「お嬢さま、好きな方とは……もしかして、布団の事ですか？」

「そうですう……私たちは愛し合っているの……ぐう」

しばし宙を見て考えていたソフィアは、

「そうですか。それはよろしゅうございました」

考えるのを止めた。

「何を認めているんだ！ もっとちゃんと起こさんか！？」

「お嬢様の喜びが我らの喜びです」

「コイツら腕利きに見せかけて、とんだポンコツだ！？ おいレイチエル、起きろお！」

「ぐう」

令嬢の監獄スローライフは、いましばらく続きそうだった。

31・主は断罪する（後書き）

後書き（あつさり）

今まで読んでいただいた皆様、誠にありがとうございました。
書いたものにこれだけ人気が出たのは初めてで……思いがけない
事でした。

細かい事はまた晩にでも活動報告の方へくどくど書かせていただ
こうかと思いますが、取り急ぎ一言お礼申し上げます。

そして告知です。

実は連載半ばごろから、出版者様から連絡を受けておりました。
それも何社も。

題材は在り来たりの婚約破棄物なのですが……皆さま切り口が珍
しいと評価して下さり、本にしてみないかとお願いいただきました。
ありがたいことに話がまとまりまして、現在書籍化を目指して作
業を進めています。

できるだけ早く製品化したいと思っています。
凄いですよ……紙の本になって絵が付きますよ。先日戴いたイラ
スト（ありがとうございました）に続いて目に見える形になります。
ヘイリーやエリオッツが歌って踊ります（嘘）。

ぜひ実現したいと思っていますので、今後進展がありましたらま
た告知させていただきます。

本当にお読みくださった皆様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n5577es/>

婚約破棄から始まる悪役令嬢の監獄スローライフ

2018年5月29日07時20分発行